

潮音 令和七年度 海音寺潮五郎記念 文芸ゼミナール受講生作品集

令和七年度

海音寺潮五郎記念 文芸ゼミナール受講生作品集

潮音

～若人の樹～

鹿児島県立図書館

巻頭言

ここに「潮音」を刊行できますことを、大変うれしく思います。

本ゼミナールは、郷土出身の作家である海音寺潮五郎先生の文業を讃え、本県における文芸の振興を図るために実施しているものです。今年度も県内各地から集った十三名の高校生が全八回にわたる講義と演習を通して創作に励み、作品を完成させました。

「自分の文章が他者に届くのだろうか」「表現できる言葉を持っているのだろうか」という不安を持ちながら、「それでも書きたい、伝えたい」という熱い思いを心に宿して参加した受講生たちは、ここで同じ志を持つ仲間と出会いました。それぞれの個性溢れる視点や感性、表現方法に学び、自らの文章を見つめ直す過程を通して、言葉は次第に磨かれ、表現は研ぎ澄まされていきました。また、互いの作品を読み合う経験を通し、読む力、批評する力が育まれ、語彙の選択や構成の工夫、描写の精度といった表現の可能性を広げていきました。書くことと読むことが相互に響き合いながら、表現に深化をもたらししていくことを体得したことは、大きな成果であり、表現に向き合う姿勢をより真摯なものへと変えていきました。この講座を通して得られた新たな自信と表現することの歓びを胸に、今後も自らの言葉を信じ、創作の道を歩み続けてくれることを期待しています。

今年度のゼミナールに特別講師としてお迎えした直木賞受賞作家の万城目学先生には、読み手が展開を感じられるよう物語の過程を大切に書くこと、自身の物語を捉え直すためにも他者に作品を読んでもらうことが肝要であることを教えていただきました。その後の受講生の創作活動を力強く後押しする数多の御助言をくださった万城目先生に、改めて深く感謝申し上げます。

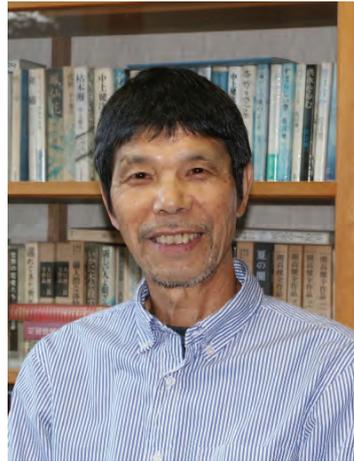
また、いつも温かく受講生に寄り添いながら御指導くださった立石富男先生と出水沢藍子先生に心から感謝申し上げます。言葉や文章を飾りすぎず、楽しんで書くといった具体的な御指導と、共に過ごした時間は、受講生のこれからの創作活動において、心の支えとなるはずです。今後、も受講生の成長と活躍を応援いただけますと幸いです。結びに、この作品集「潮音」に収められた言葉や思いが、手に取ってくださる皆さんの心に響き、新たな創作の始まりとなることを願っています。

令和八年三月

鹿児島県立図書館長 東條 広光

講師紹介

立石 富男 先生



枕崎市生まれ 鹿屋市在住
作家 文芸同人誌「火山地帯」主宰
九州芸術祭文学賞鹿児島地区選考委員

【文学賞】「記憶の翳」九州芸術祭文学賞鹿児島地区優秀賞

「うしろ姿」南日本文学賞 「知覧へ行く」労働者文学賞

「ソロモンの夏」自由都市文学賞

【著書】エッセイ集『夢と思いと言葉』 伝記『島比呂志』 小説集『黄昏』
『モンブラン』 『石を持つ朝』 『小説 島比呂志』 ほか

出水 沢藍子 先生



奄美大島生まれ 鹿児島市在住
作家 文章教室主宰 「小説春秋」編集・発行人
南日本新聞「新春文芸」選考委員 九州芸術祭文学賞鹿児島地区選考委員
「たつごうエッセイ」審査委員

【文学賞】「グンセイフの夜」南日本文学賞 「マブリの島」新日本文学賞

「還流」文学界同人誌優秀賞 「木瓜（もっか）」大阪女性文芸賞佳作

【著書】短編小説集『マブリの島』『銀花（ぎふあ）』 大島紬小説集『爪』
共著『鹿児島島の女性作家たち』 伝記『何もいらない』 ほか

カランコエの呼び声

松陽高等学校 二年

織野 折鶴

遠くから声が聞こえる。どこか懐かしいような、どこか臃げな、一体どこで聞いたのだろうか。よく思い出せない。その声が僕の名前を呼んだ。声が僕の名前を呼んだことはわかった。けれど何かにかき消されたように聞き取れなかった。

みやー。おーい、みやってばあ。

遠くから声が聞こえる。今度はさっきの声と違う。少し高い無邪気な声。誰だったっけ。思い出そうとしたその時だった。

ぐるん——

僕の体の重心が変に傾いたのがわかった。そのままわけも分らず一瞬にして、どだんっ、と冷たく固い何かの上に倒れた。

「いつ、たいなあ」

じんじんと痺れが残る右腕をさすりながら起き上がる。どうやらベッドで就寝中のところを落とされたようだ。小さな体でいばっているこいつに。

「ベッドから落として起こすなんて、相変わらずの乱暴者だ

な。デジー」

「ふん、おじいちゃんにミヤを起こすように頼まれたからね。なんか文句あるのかよ」

彼女は自分が悪いなどと露ほども疑わない様子で得意げに胸を張る。お気に入りの黄色のワンピースの胸には生きた白い花のブローチを付けていた。花弁は彼女のように生き生きとした色と誇りを持っている。僕がブローチをじっと見ていることに気づいたのか、デジーは自慢するように話していた口を一度閉じ、胸元のブローチを少しいじる。

「へっへーん、きれいだろ。この花の名前、あたしの名前と似てるんだ」

「知ってる。何百回も聞いたよ」

ちよつとした反論をするとすぐに頬を膨らませて拗ねるデジー。確かに何百回もとはいかないけど耳に穴が開くほど聞かされているのは事実だ。

「そういうミヤこそ自分の花見せてみるよっ。どうせ『花ナシ』のミヤにはできっこないもんねっ」

そう言うとな彼女は拗ねたまま階段に向かい、一階に戻って行く。台所で朝食のスープを作っているコベットさんに愚痴をこぼし、慰めてもらうのだろう。僕はふうと一つ息をついて、まだ少し寝ぼけた頭を起こすために洗面台へ歩み寄る。そう言えば、『花ナシ』なんて久々に言われたな。そう思いながらタイルが嵌め込まれた壁につけられた鏡の中の僕を見つめる。この世界はいつからこうなってしまったのだろうか。

二二xx年。地球温暖化や世界各国の戦争などにより、終焉へ向かいつつあった青い星『地球』。今では宇宙から見ても鮮やかな青ではなく、廃れた錆色のような姿から『荒廃世界』という名が定着している。そして世界が、空が、生き残った全人類の心が壊れかけたその時、約百年前に新たに創設された新世界政府『テセウス』が、空っぽの人形のように生きる世界中の人間たちのために、ある政策を行った。一輪の生きる花を出生とともに赤ん坊に贈るといふ政策だった。これを皆は『花贈り』と言う。

この政策が始まると空っぽの人形みたいだった人間が花のように生き生きとするようになったのだ。荒廃し、寒さに囚われた世界に温もりが戻って行った。それでも効果は人それぞれだ。生き生きとまではいかなくても心穏やかになった者、政策の効果がうまくいかなかった者など、まさしく十人十色の結果となっていた。現在では出生とともに赤ん坊に名前と花が贈られるようになっていた。最近では、生まれてきた子供たちに贈られた花に直結して名前をつけるのが主流らしい。デジーがその例だ。彼女の花は白のデイジー。白のデイジーには『無邪気』という花言葉があり、おてんばなデジーにぴったりの花だと僕は常々思う。先ほどからずっと一階がバタバタと騒がしい。本当に疲労という言葉を知らないような元気な女の子だ。

出生とともに贈られるその中でも異例なのが『花ナシ』とも言われる、いわゆる花を持たない人間の存在。なぜ花を持

たないのか理由も様々な事例があるが、花ナシの一人となっている僕の例で言うと、記憶喪失によって名前も年齢もわからないという状況なのだ。出会った時には頭から出血をしていて、全身びしょ濡れの傷だらけだったということをコペットじいさんからは聞いている。そして、花も花らしきものも持っていなかったという。それからずっと、僕は命の恩人であるコペットじいさん、そして同居している孫のデジーにお世話になりつつ穏やかな日々を過ごしている。

支度をし、一階へ下りると美味しそうな匂いに空腹が揺さぶられてくる。窓からは木漏れ日が差し込み、穏やかな雰囲気漂わせている。

「あっ！ おじいちゃん、ミヤ下りてきた」

キッチンの陰からデジーの声が聞こえてきた。恨みがましい目を向け、威嚇する犬のように警戒してくるデジーの横には優しい物腰の老人が立っている。

「ミヤくん、おはよう。よく眠れたようだね」

「おはようございます。おかげさまでよく眠れました。デジーに叩き落とされましたけどね」

さりげなく言うと、弁明を始めるデジーをそっと静止させるコペットさん。

「デジー。気に入らないからって相手に乱暴してはダメだよ。デジーも痛いのは嫌だろう？」

そう優しく言い聞かせるコペットさんに、自分にも引け目がある事がわかったのか素直になるデジー。彼女はおてんば

なだけで、中身は可愛らしい素直な女の子なのだ。側から見ると祖父と孫の和やかな生活の一面として見えてくる。

(家族、か)

記憶の中を探っても、デジーとコペットさんの他に、枯れ野原や静かに佇む廃屋ばかりしか思い出せない。親らしき顔を思い出せないあたり、本当に自分は記憶喪失者なのだと痛感させられる。コペットさんに拾われる前に自分が何をしていたのかも、なぜびしょ濡れで倒れていたのかも、自分の本当の名前も思い出せない現状がずっと心のどこかには引っ掛かったままだ。

「さてと、そろそろ朝食にしようかね」

デジーとの話が終わったのか、コペットさんはお盆にスープの入ったお皿を乗せテーブルに運ぶ。その足取りはいつものように少しおぼつかない様子だった。

「大丈夫ですか。僕が運びますから、コペットさんは座っててください」

「ありがとうございます。でも心配はいらないよ。朝のうちに調整しておいたからね」

そう言いながら義足のついた左脚を器用に運んで行く。彼は若い頃、テセウスの軍隊に所属していた経歴があり、任務中に事故で左膝中間あたりが壊死してしまったらしい。その後は言うまでもなく退役し、浄化区域『アリア』内を転々としていたそうだが、今は不浄化区域『テロス』に身を置いている。

ちなみに、コペットさんはデジーの祖父ではあるが、二人の血は繋がっていない。デジーは赤ん坊の時に拾われた元孤児なのだ。デジーはその事実を知っていて、合意の上で共に暮らしている。

「ところでミヤくん、今日もアリアに行くのかい？」

「はい。もちろん行きます」

三人で食卓につき、朝食のスープを飲んでみるとコペットさんが穏やかな口調で聞いてきた。これは毎度のこと、僕がアリアに行く日になるといつも聞いてくるコペットさんの常套句だ。

「え？ またアリアに行くのー！ 私も行きたい！」

これも毎度のことだ。デジーはアリアに憧れを持っているため、いつも駄々を捏ねる。しかし、実を言うとテロスの住民たちは、未だ空気汚染などの浄化が進んでいない区域に身を置いているためテセウスの許可なしでは入れないのだ。それに一年のうちに入れる回数も決まっている。僕にとって、それではいくら経っても間に合わないのだ。

駄々を捏ね続けるデジーを優しくなだめるコペットさんにいつも迷惑をかけてしまうことを詫び、頭を下げると後頭部に温もりが伝わってくる。

「いいんだ、いいんだ。記憶がないまま生きる方が余程辛いだろう。気をつけて行ってくるんだよ」

そう言い、まるで本当の家族のように頭を撫でるコペットさん。ああ、この人に救われて本当に良かった。常々、そう

思う。顔を上げると、コペットさんの焦茶色のベストの左胸には繊細な糸を引くトケイソウが揺れていた。

朝食を済ませ、支度をし、玄関先で手を振りながら送ってくれるコペットさんとデジーに手を振り返し、目的の位置へ歩みを進めた。整備された線路の横の枯れ草に身を潜める。目的のそれは徐々に近づいてきていた。

(今だ！)

足を踏み込み、それに飛び乗る。受け身を取ろうとした際に思わず手すりに背中をぶつけてしまい、デジーにベッドから落とされた時よりも強い痛みに耐えるためうずくまった。息を殺しつつ、聴力に集中してみると、どうやら僕が乗ったことに誰も気づいていないようだ。成功だ。息を整え、じわりと少し痛みの残った背中をさすりながらその場に座り直す。運行列車『ノア』は走るスピードを落とさない。ひとまじ間に合って良かった。

運行列車『ノア』は現在の荒廃世界に残った大陸に物資を運ぶ年中無休の列車だ。現時点で運行しているノアは五両。週に一度のペースでテロスを横断するため、一ヶ月に一度ほどのペースで先ほどのように飛び乗って侵入し、アリアへ向かう。そうになると、回数制限されているテロスの現住民である僕は何回も不法入国、いや今はもう国と呼べるものもないから、不法入区の方が正しいか？ と、まあ、こんな調子で今回もアリアへと不法入区する。

人気がない本棚の影に隠れ、やっこのことで息をする。先ほどまで本当に息を止めていたかのような感覚だった。

(あつぶねえ。ちようどうたた寝してくれて助かったあ) 受付カウンター職員が珍しく、うつらうつらしていたため、今回は難なく侵入することができた。

ノアから下りてアリア内部に不法入区した後、持ってきた黒のローブを頭から被り、路地や人混みの中をすり抜けて目的の場所に侵入した。アリアの中でも一際目立ち、テセウス本部よりも神聖な場所として知られる大図書館へと。

『記憶の匣』

その大図書館には珍しく、正式名称がない。代わりに呼び名として呼ばれているのが『記憶の匣』。荒廃世界がまだ青い地球だった頃の図書館は物語やエッセイという話など、さまざまな内容の載った本が置かれていたらしいが今は違う。大図書館『記憶の匣』には戸籍が保管されている。植物図鑑のような綴り方がされていて、花贈りをされた人間の記録が載っている。戸籍記録の他にも、荒廃世界になる過程で生き残った物語などが載った本も多少は保管されているらしい。その本棚をまだ見たことはないが、いつかは見てみたいと思う。帰った時の土産話になるからだ。

(ここからか……)

カウンターでうたた寝していた職員の間をすり抜けて入り込んだ後、天井に届きそうなほどの本棚を見上げる。前回、探すのを中断した戸籍記録を見つけ、引き出す。そしていつも通

り、自分の戸籍を探す。

膨大な記録の中から自分の戸籍を探し出すことは簡単なことではないが、記憶喪失ならば、赤ん坊の時に親に花贈りをされている可能性もある。どんな花が贈られたのかが分かる。自分が一体何者で、どこからきたのかが分かる。そう思っていたのはいつだっただろうか。

時間の流れを忘れかけた頃、長く座り続けたため腰が痛い。空が見える天窓を見上げると、橙色から紺色に変わりつつあった。

（そろそろ出ないとまずいか）

『記憶の匣』は日が沈むと閉館する。そして誰もいなくなった館内は厳重な警備が敷かれるため、扉が閉じる前に出なければテセウスに拘束されるのがおちだ。

広げていた戸籍記録を元の場所に戻し、再度周りを確認して出口へ向かう。

（流石に職員はみんな帰ったはず。あとは警備員に見つからないように出て、身を隠すだけ……）

そう、いつも通りだと油断したのがまずかったのだろう。自分の走る音でこちらに近づいてくる足音に気づかなかった。

「誰！」

若い、女性の声だった。誰もいないと、みんな帰ったと、決定的な根拠もないのにそう思っていた自分が憎かった。

（見つかった！ どうする。どうしたらいい）

このまま逃げてもアリア全体に警戒が広がる。次のノアが

くるのもまだ先のこと。アリアの中に逃げ場はない。テロスの区域まで逃げたとしても、テセウスの職員たちはどこまでも追ってくるはずだ。つまり、どこにも、逃げ場はない。

思考している間、僕は立ち止まっていたと思う。たった数秒、いや、それよりももっと短い時間だったはず。でも、僕にとっては数時間ほど、長く感じた。冷や汗が背中を伝う。冷たく緊張で固まった肩に温もりが伝わってくる。ああ、終わった。

「キズナ？」

「え？」

女性の思いがけない発言に思わず反応してしまう。

「キズナ、だよね？ いや、でも、キズナはこんな格好じゃなかったし、似てるけど、人違いかしら」

捕まった、はずだった。なのに初対面の、しかも住む区域の違う女性に身に覚えのない名前を呼ばれたり、ぶつぶつと語られる言葉に困惑したりして思わず思考が止まってしまった。

「ねえ、あなた、本当にキズナじゃないの？ その格好、もしかして……」

まずい。このままだと、テロスから不法入区していることがばれて、テセウスに連れて行かれてしまう。一か八か、やってみるしかない。

「そ、そうそう、僕だよ。キズナだ。久しぶり。元気だった？」

人違いだとばれないように気をつけて言葉を選ぶ。若干引

きつつていたかもしれないが、笑顔で親しみやすく話しかけてみた。

(どうだ?)

「やっぱり! いつこつちに帰ってきたの? ていうか汚れすぎじゃない? どこで何してたの?」

うまく騙せたのは良かったが、次々とくる質問攻めに戸惑ってしまった。何とか答えようとしてみたその時、『記憶の匣』の完全閉館時間を知らせる鐘の音が鳴った。

「あつ、その前にここから出ないとね。このあとどうするの? もう帰る?」

少し寂しそうに聞いてくる女性。『記憶の匣』の職員専用の綺麗な服、その胸にはピンクのライラックがブローチとして着けられていた。雫の形をした四枚の花弁が彼女の性格を表すかのように生き生きとしている。

「あれ? そう言えば、キズナ、花はどうしたの?」
ぎくっ!

動揺が顔や体に出ていないか心配になった。それでも、答えなければ、また怪しまれてしまうと思い、言葉に詰まりながらも返答しようとする。

「えっと、そ、その前にここから出たほうがいいんじゃないか?」

「それもそうだね。私の家においでよ。久しぶりなんだし美味しいものでも食べて、たくさん話そう?」

いつもなら路地裏でひっそりと夜を過ごしていたが、今回

に限っては致し方ない。まだ名前も分からない彼女の言葉に甘えることにした。それにしても、『キズナ』という人物はそんなに僕と似ているのだろうか?

しまった。しばらくの間、とてつもなく緊張がほぐれてしまっていた気がする。

「キズナ、もしかしてお腹空いてた?」
にまにま満足そうな笑みを浮かべた彼女が、向かい側に座っている。

名前も知らず、『キズナ』と呼ばれ続けていたらしいの間にか彼女の住まいに連れて行かれ、なんと夕食を作ってもらった。しかも山盛り。徐々に満足した量の食事をするのができ、気づいたら、彼女の目の前で大口を開けて食べていた。恥ずかしい。とても恥ずかしい。

それにしても、やっぱりアリアには食材が豊富にある。独自に遺伝子を組み換えて、食材を栽培、養殖しているためだろう。

「えっと、お腹、空いてた。最近、あまり食べられてなくてさ」

「えっ、そうなの? キズナ、本当に最近何してたの? テロスに行ったのは聞いてたけど、しばらく手紙も来なかったから、てっきり……。ごめん、安心しちゃって」

彼女の目には涙が浮かんでいた。

僕は思わず、狼狽えてしまった。僕は彼女のことを何も知らない。名前も、出生も、過去も、彼女の言う『キズナ』と

いう人物もその関係も、なぜ、僕のことを『キズナ』と呼ぶのかも。知っているのは彼女の胸元に付けられたピンクのラ イラックだけだ。

「あ、あのさ……」

僕は『キズナ』じゃない。顔を手で覆い、俯く彼女を見て、本当のことを話そうと思い、口を開いた。でもそれは、彼女の次の言葉によって遮られてしまった。

「ねえ、本当は、あなた、『キズナ』じゃないんでしょ？」
「がたんっ！」

どこまで走っただろう。外に飛び出すと雨が降っていた。アリアの定期的な浄化時間だったのだろう。誰も外にいなかったため、テセウスの警備にも見つからなかった。

路地裏に入り、息を整えるために壁に手をつけて前屈みになる。ぼやけた視界の中でもわかる。僕の胸元には花がない。色が無い。そんな事実が今更のように苦しめる。記憶喪失になった自分の脳が憎らしかった。

彼女の住まいから飛び出したのは、最初から僕が『キズナ』でないことに気づかれていたから、花ナシとしてテセウスに引き渡されると思ったからだ。そうしたら、デジーとコペットさんの所に帰れなくなる。あの家に帰れなくなってしまふ。また、誰かに寂しい思いをさせてしまふ。

「また……。また？」

視界がぼやけてきた。頭が揺れる。痛い。吐き気がする。

また？ またってなんだ？ そんなことがいつあった？ コペットさんの家に居候している時にそんなことあったか？

いや、ない。体が熱い。ぐわんぐわん。あれ、僕、誰だっけ。

僕はミヤ。僕はミヤだ。ぐわんぐわん。帰るんだ、あの家に。ぐわんぐわん。家って、あれ？ ぐわんぐわん。『どっち』だっけ。

遠くから声が聞こえる。聞いたことのある声だ。優しく、あたたかい声だ。

「……な……」

名前を呼んだ。デジーの声だ。なんであの子がアリアにいるんだ？ 今頃コペットさんと一緒にいるはずなのに。

「……ず……」

名前を呼んだ。今度はコペットさんの声。コペットさんもアリアにはいない。アリアには若い時にテセウスの軍隊を除隊して以来、遠くから眺めるだけで、入区はしていないと聞かされたことがあったな。

「……」

声がしなかった。でも、人影が見えた。人影が見えるのは初めてだ。今までは誰かの声だけしか聞こえなかったのに。

ああ、聞こえる。懐かしい声だ。優しく、子守唄のようにあたたかくて、包み込んでくれるような、そんな声。人影が近づいてきている。華奢で、小柄な体躯なのがわかる。その時わかった。わかったんだ。やっと思い出せた。

長い時間、待っててくれてありがとう。そして、『ただい

ま』。

「おかえり、キズナ」

目を開けると、彼女の顔が見えた。泣いていたのか目が真っ赤になっていて、その声は震えていた。

「……ただいま、ライラ」

弱々しくも微笑んでみるとまた泣き出しそうになる彼女。そんな様子を見てくすくすと笑うと、照れ隠しのつもりなのか軽く叩いてきた。

ようやく思い出せた。何もかも思い出して自分自身ホツとしている反面、記憶を取り戻すというのはこんなにも急にくるものなのかと少し戸惑ってしまった自分がいることに気づく。

「記憶があるっていいことだな」

「もう！ 本当に心配させすぎ！ テロスに行ったつきり音信不通になるし、私の顔見て誰だよこいつみたいな顔するし、急に飛び出したと思って追いかけたら倒れて気絶してて、しかも高熱だしてるし！ テセウスの警備員の人まで誤魔化して家まで運んでもらったんだからね！ 記憶まで失くしてテロスで何してたのよ！ この馬鹿お兄ちゃん！」

「お兄ちゃんって久しぶりに呼ばれたなあ。でも、馬鹿まで言うのは酷いんじゃないかい？ 我が妹よ」

苦笑いをしつつ、重い腕をなんとか動かして、なだめるようにライラの頭を撫でてみた。当の本人は頬を膨らませつつ、大人しくなった。なんだかデジーに似てるな。そう思っ

ると、また軽く叩かれてしまう。

ライラ。彼女は血のつながった僕の妹だ。優しく思いやりの心があり、なにより世話好きのしっかり者だ。僕とライラは『記憶の匣』の職員で、ライラは主に植え付けなどの事務を担当している部署に、僕は書庫整理を担当している部署に配属されている。顔見知りの職員仲間たちからは、なぜか我が子のように微笑ましく見守られている。多分、『記憶の匣』では珍しい若い職員だからなのだろう。ライラは最近だが、僕は数年前に大人と定められている年齢に達している。いつまでも子供扱いだと、どうもむず痒くて仕方がない。

『記憶の匣』の仲間たちとの日常を懐かしく思っていると、水に濡れた手拭いが額に乗せられる。

「とにかく、熱が下がってひと段落ついたらみんなのところに行くよ。テロスでのことも詳しく聞くからね？」

「みんな、心配してくれてるんだな」

「当たり前でしょ。『記憶の匣』一番の天文オタクが一年も行方不明になったら、流石に心配になるわ」

「そっか……。じゃあ、早く治さなきゃな」

『記憶の匣』の仲間たちから忘れられていないことと、もう独りじゃないと実感できることが嬉しく、同時に心配をかけたしまったことに申し訳ない気持ちも湧いてくる。それに、コペットさんとデジーのところにも一度帰らなくてはならない。記憶を取り戻したことを報告しよう。そして僕自身のこととも全部話そう。今後のことを考えつつ、先ほどの会話で一

つ気になることがあり、台所へ向かおうとしているライラを呼び止めた。

「あのさ、僕ってそんなに天文オタクなの？」

そう聞くとライラに「嘘でしょ」という声が聞こえてきそうなくらいに怪訝な顔をされた。まじか。

広く、晴れた空に汽笛が鳴る。黒く、滑らかな車体をじりじりと停止させ、運行列車『ノア』はやってきた。係員が物資の運搬を指示する声が横を通り過ぎて行く。

「今度はちゃんと帰ってきてね？」

ノアを眺めていると、背後から拗ねたようなライラの声が聞こえてくる。振り向くと案の定、頬を膨らませていた。

「一週間だけだよ。ちゃんと帰ってくるから」

「そう言っって一年も行方くらまして、挙句に妹のことも何もかも忘れて帰ってきた天文オタクは誰でしたっけ？」

ぐうの音も出なかった。

「だ、大丈夫だよ。お世話になった人たちに会いに行くだけだしさ。それにほら、花もつけたし……」

熱が下がった後、残りの滞在期間はほとんど療養にあてた。

また、花ナシ対象者のための再度花贈りをすることができる制度を使い、僕の胸にはあるべき花が戻っていた。

記憶をなくしたきっかけはなんとなく分かっている。僕はまだ記録の取れていないテロスの星を観測するために入区していた。テセウスの天文機関と『記憶の匣』の上層部から依

頼され、まだ見ぬ星を見つけることに夢中になり過ぎてしまったのだろう。不注意で足を踏み外し、崖から落ちて川に落ちてしまった。その時に花も落としてしまったのだろう。次に目を開けた時にはなにもかも忘れている状態の中、コペックさんの家の天井をぼんやりと眺めていたことを思い返す。

「キズナ、これ」

ノアの出発の時間が迫り、乗り込もうとするとライラから手のひらに収まるくらいの小さな巾着袋を手渡された。中には、ベルのような形の花弁を広げた小さな花がいくつか入っている。その花は、アリアに住まう者も、テロスに住まう者も、誰もが知るこの荒廃世界に掲げられた幸福の花だった。

「カランコエか……。ありがとう、ライラ。気をつけて行ってくるよ」

「うん、行ってらっしゃい」

今度は微笑んで、少し寂しそうに見送ってくれた。帰ってきたら、ライラの好きな手作りシチューを作ってあげよう。そう心の中で誓い、ノアに乗り込むと甲高い汽笛の音を響かせて、ゆったりと走り出した。

うたた寝しないように気をつけていると、見慣れた枯れ草が窓の外に広がり始める。そろそろ降りる準備をしよう。怪我しないように気をつけて……。

(今だ！)

足を踏み出し、一時的に速度を落としたノアから飛び降りる。受け身をとった拍子に枯れ草が肌を引っ搔く。運行列車

『ノア』は何事もなかったように走り去って行った。

衣服についた枯れ草を払いながら、歩を進める。目的の建築物が見えたかと思うと、幼い女の子の無邪気な声が聞こえてくる。その子はこちらに気づくとぱあっと笑顔になり、側で玄関の掃除をしている老人に声をかけた。

「おじいちゃん！ ミヤが帰ってきたよ！」

デジーが嬉しそうに声を上げた。僕がアリアから土産を持って帰ってきたのだと思って喜んでいようだろう。こちらに気づいたコペットさんが微笑む。

「おかえり。ミヤくん」

「ただいまです。コペットさん」

いつものように落ち着いた物腰のコペットさんがなんだか懐かしく思えて、胸にじんわりと温もりが広がった。

「ミヤ、おかえり！ ねえ、ねえ、おみやげは？」

デジーは相変わらずのおてんばで、すぐに土産をねだってきた。いつもはパンの耳を使ったラスクを持って帰ってきていたのだが、今回はそれだけではない。先ほどからデジーは僕がかついでいる麻袋に興味津々だ。

「今回は大量だねえ。それに花も戻ったみたいで良かった」

家の中に入り、アリアからの土産を机の上に並べているとコペットさんが声をかけてきた。彼の視線は僕の胸につけられた花に注がれている。その言葉に、土産を眺めることに夢中になっていたデジーも顔を上げる。

「ほんとだ！ ミヤ、それなんていう花？ 教えて、教えて！」

僕が帰ってきた時、一番に近づいてきたデジーだったが胸につけられた花に今ごろ気づいたらしい。どれだけ土産が楽しかったんだ？

デジーが焦ったようにびよんびよん飛び始めたので、僕はなだめながら胸からブローチにした淡い水色の星形の花を取り、手に乗せてデジーに見せた。

「ブルースターっていう花なんだ。綺麗だろ？」

「うん、綺麗！」

そう言いながら、デジーはまじまじと初めて見るブルースターを眺め続ける。

「ミヤくん、もしかして思い当たる記録を『匣』で見つけたのかい？」

コペットさんが聞いてくる。その言葉に驚いたようにデジーも顔を上げ、こちらを見る。

「記憶が、戻ったんです」

噛み締めるように言葉にしてみると二人は一瞬驚いた表情になり、コペットさんは嬉しそうに微笑み、デジーは興奮したように質問攻めしてきた。

「記憶戻ったの!? ミヤの本当の名前も、どこからきたのかも全部!？」

そこからずっと「教えて！ 教えて！」と何度も言われ、それが鬱陶しく、思わず耳を塞いでしまっそうになった。その前にコペットさんにぼんっと肩を叩かれたため、そんなことにはならなかった。

「アリアで思い出したってことは、何かあったのかい？」

「妹に……。実の妹に、助けられました」

「家族に会えたのかい。それは良かった。本当に良かった」

コペットさんは何度も頷きながら、まるで自分のことのように嬉しそうに微笑んでいた。その様子を見ていたら、なんだかこの人の孫になったような気分になった。

「ミヤくん、とはもう呼べないかな。君の名前を教えてくださいませんか？」

多分、名前を言ったらすぐに納得されるだろう。僕の名前はブルースターの花言葉と意味合いがよく似ているから。

ふと、ライラからもらったカランコエの花が入った巾着袋をズボンのポケットに入れていたのを思い出す。僕はそっとポケットから巾着袋を取り出し、コペットさんに手渡す。

「僕の名前はキズナです。コペットさん」

僕の名前を聞いたコペットさんは頷き、口を開く。

「キズナくん、だね。いい名前だ。ブルースターの花言葉からつけられたのかな？」

「はい、そうです。本当の名前を伝えることができ、本当に、本当に良かった」

僕の視界はいつの間にかぼやけてしまっていた。声も震えて、涙が溢れて止まらなくなってしまった。頭の上にコペットさんの手の温もりが伝わってくる。

「あー！ ミヤ、泣いてるー！」

「うるさいぞ、デジー。ラスク渡さないぞ」

「えー！ やだあ！」

いーっとデジーに威嚇されながら、涙を拭う。コペットさんを見ると、巾着袋からカランコエの花を取り出し、手に取って眺めていた。

「妹からの贈り物です。もし良ければ、今度一緒にきてもいいですか？」

「もちろんだとも、キズナくん」

本当の名前を呼ばれ、なんだかむず痒くなってしまった。

ふと、デジーを見ると彼女はラスクに夢中になり、コペットさんは巾着袋に花とともに一緒に入っていたカランコエの種を取り出すと大事そうに瓶の中に保管している。後日、植えるつもりなのだろう。

そんな穏やかな空間を、誰かの笑顔を、仲間たちを、恩人を、そして家族を、僕は愛している。その全てに僕は願う。幸福を告げる声がこれからも届き続けますように、と。

眠る学校

伊集院高等学校 二年

木透 ミズキ

ズキ、ズキ……

いたい。

ズキズキズキ……

—— いたい。

ズキ……ズキ……

……ふあ、よくねた……ここはどこなんだ？

目覚めたのは見知らぬ建物。周りはコケだらけで窓ガラスが割れている。窓からは月明かりが差し込んでおり、夜のわりに明るい。青白い光が頬を照らしていた。

窓の外を見てみようと起きて上がる。なんとなく体が重い気がした。しかし、起き上がるときさっきまでの違和感は

なくなっていた。

窓の外を見てみた。下には校庭があり、その周りを銀色のフェンスが囲っていた。フェンスの向こうには杉の木が生えており、その向こうには小さな町が、そして町を取り囲むように山が連なっていた。おそらくここは廃校かなんかで町の中で一番高い建物なんだろう。

またさらに違和感を覚えた。体ではなくこの町に。人間が営んでいくために必要不可欠なあるものが欠けている。

光がない。

この町だけでなくこの学校も。あるとするならば月の光だけだろう。

もしかしたらこの町に一人取り残されているのかもしれない。そう思うとか細く感じ、不安になった。

ここから出たい。

そうなればやることは一つだ。この学校から出る。そう思ったとき右の方から物音がした。視線を向ける。何か椅子に座っている。

咄嗟に後ずさりした。出そうになる声を必死に抑えた。

だって、だって、さっきまで絶対いなかった。

「そんなに怖がらなくてもいいだろう？」

っ!?

「聞こえているよ、君の声」

そう言って振り向いた顔は自分に向けて笑いかけていた。「とても強張った顔をしているね。別に君に攻撃しようとか

捕って食おうとか思っていないよ。君と同じでいつの間にかここにいた」

目の前の人間？ はとても落ち着いていて敵意はなさそうに見えた。一人じゃないということに安堵した。

「君はいつからここにいたの」

「君が居る前からずっと」

「さっきまでいなかったじゃないか」

「気が付かなかったただけで、ずっとここにいた」

「……君は誰だ」

「……さあ？」

もう一度聞いたが返ってくる反応は似たようなものだった。

最後にここがどこかを聞こうとしたがやめた。知っているはずがない。

「君はこれからどうするの」

「どうするも何もここから出るにきまっているでしょ。君も

そうじゃないの」

「……もちろん出たいよ。出たいけど」

「出たいけど？」

「まだ眠いから眠っとく。おやすみ」

と言うと机に突っ伏してしまった。

「は、え、ちよっと!？」

そしてそのまま眠ってしまった。正直見ず知らずの場所で眠る神経の凶太さにかなり引いた。

コイツはここから出たいんだよな？

ため息をつく。

この場所から出られるかなあ……

アイツを置いて一人で出るのはさすがに気が引けたので、とりあえず学校を見て回ることにした。隣に教室があったので入ってみたが特に何もなかった。元いた教室と似たような感じだ。その教室の隣に階段がある。上にも続いていたが今は下に降りてみることにした。とりあえず一階まで降りてみる。

一階まで降りたところで元いた教室は三階であることを知った。別にどうでもいいことだけだ。

階段を下りると右手側に広い下駄箱があった。倒れている下駄箱があったが外に出るのに問題はなさそうだ。出てみることにした。

頭上には大きな月が浮かび、青白い光を放っていた。玄関の目の前は校庭で、対角線上に正門が見えた。正門まで歩いてみたが二十秒程で着くことができた。そのままフェンスがある校庭沿いに歩いて行った。フェンスの向こうには杉林が広がっている。この学校はおそらく小山を切り開いて建てられたのだろう。窓の中から見えた町はここでは少ししか見えない。木が邪魔だ。

まだ帰るには早いと思ったので一階を探索してみた。保健室、教育相談室、校長室、職員室、教室と順に探索してみたが、どこも廃墟のように物が散乱していた。保健室に関して

はベッドがあつたがポロポロで使えそうもない。また、教室と職員室の間に階段があつた。二階に上がり廊下に出てみたが、教室の数が多くこととしばらく時間が経っていたこともあつて、そのまま三階まで階段を上り元いた教室へと戻った。

「おお、遅かつたね。もうひと眠りするところだつた」
いらつくな」

「そう言うなつて。どうだつた。学校探検」

「特に目ぼしいものはなかつたかな」

「おもしろくなさそうだな」

「面白いも何もないだろ。というか早くここから出ようよ」

「えー、もつたいなくない？ せつかく眠れるんだし君も寝ようよ」

「はーお前、さつきまで出たいとか言つてたじゃないか」

「……ひと眠りして考えたけど、ここが一番安全な気がする。君にとつても」

「根拠は」

「勘、本能、第六感。とにかく一緒にここにいた方がいい」

「……わかんない。君のことがますますわかんない。目覚めたら見知らぬ場所で寝ていたんだぞ。普通は警戒するのが当たり前だろ。元に戻るのかもわからないのに、ここにいた方が安全？ 君はこの学校を見たのか。教室はコケだらけ、窓ガラスは割れている、ポロついて崩落しているし、町に光はない！ 他の人も見当たらないのに何が安全だ。なら証明してみろ、ここが一番安全な場所だと！」

「落ち着いて、確かに証明はできない。でも逆にどこなら安全な場所なんだ。何もわかつていないこの状況で町にでも出てみる。何かあるかわからないぞ」

「……ああ、もういいよ。最初から君を置いて一人で逃げればよかった」

「え、待って!!」

それからは無我夢中で走つた。校庭に出て、校舎を出て、町に向かった。町はやはり静かで人気がない。しかし進めば進むたび町の外に出られるような気がして興奮した。アドレナリンのせいか息苦しさや疲れを感じずにずっと走り続けることが出来た。

もうすぐで郊外となると走るのをやめた。ここは全く知らない場所だ。町を出るためにどこの道を辿ればいいのか、そもそも山に囲まれているなら出るのは現状無理だ。そう思ったからだ。

しかし、進むことはやめなかつた。帰りたくないということもあつたが、このまま進めばこの町を出られるかもしれないと期待してしまつたからだ。ならば確かめるまで歩き続けるしかない。せめて山を越えるまで。

そう思ったとき急に雨が降ってきた。もともとあつた月明かりのおかげか、空が雲に覆われていてもまあまあ明るい。いや、時間が進んで太陽が出始めたのか？ そのくらい明るかつた。

ポツポツと降ってきた雨粒は少しずつ強くなって行った。雨宿りするところを探すために進んで行くと道沿いに小さな小屋を見つけた。バス停の小屋らしいが今は使われてなさそうだ。

とりあえずはここで雨宿りをしよう。そのあとは雨が止み次第この先にある山に登ってみよう。

それから数時間がたった。雨は一向に止む気配はない。それどころか強くなって行っている気がする。運が悪い。こんな狭い場所で何時間も座っていると暇で暇で退屈だ。何かおもしろいことはないものか。

またさらに数時間たつてさらに雨が強くなったところ、何か歩いてくる音が聞こえた。ひどい雨の中から小屋の中にヌツと何かが入ってきた。まじまじと見るのは失礼だと思ったので一見だけして正面を向いた。今時あんな格好をする人がいるもんだと思った。その何かは修行僧の格好をしていて深めに藁の笠をかぶっていた。顔までは見えなかったが人だった。

修行しているのだろうか。この奥に神社か寺か何かがあるのか？ そんなことをぼんやり考えていると水の滴る音が聞こえてきた。

ついに雨漏りしてきたかと思ったが何かがおかしい。雨漏りの音がだんだん近くなってきている。気になったので音がする方向を向いてみた。ついでに向かいの人の顔も見てみようと考えていた。

雨漏りの音の原因が分かった。同時に『何か』の顔も分かった。雨漏りの原因はこの『何か』の顔から水が滴っているからだ。ではなぜ顔がわかったか。この『何か』の顔はすぐ横まできていたからだ。

その『何か』は——人ではなかった。

『何か』の顔はなく、黒い水だけがあった。そこから水が滴りこちら側にきていたのだ。

その『何か』の頭は人の頭より一回り大きく、さらに顔を近づけようとしてきた。咄嗟にのけぞったが、狭い小屋のせいで後ろに行くことが出来なかった。

さらに顔を近づけようとしてきたのでベンチからずり落ちてしまった。それでも近づけてくるので手で押し返そうとしたが、そのまま突き抜けてしまった。

ついにパニックになってしまい後ずさりしながら小屋の中から土砂降りの道に出た。『何か』も小屋の中から出てきた。

そして、その『何か』は大量の雨を吸収して小屋よりも木よりも大きくなって行った。もはやそれは人の形を留めておらず一匹の巨大な蛇のようだった。そして、その『何か』は獲物を捕らえるように襲いかかってきた。大量の水がズシンと上にのしかかる。泳ぐことも、呼吸をすることも、ましてや逃げることも出来なかった。

そして、そのまま意識が遠のいて行った。

……は……ですわね。

声が聞こえる。

あまり……ええ、……します。

だんだん聞こえてきた。

ズキズキ

——でも頭が痛くて、聞こえない。

次に目が覚めた時、体は水に浸かり、道路に横たわっていた。起き上がろうと体を起こすと水はチャプチャプと音をたて、青白い月の光を反射した。波が収まると目の前の湖は何事もなかったかのように静かだった。ただ青くただ静かで風いでいる。心地よささえ覚える。

町があったようにとはとても思えなかった。

水に浸かった道路は下へと続き、下に行くほど底は見えなくなっていく。仕方なく上に向かって歩きだした。

それにしても、さっきの化け物は何だったのか。気味が悪い。それに起きる前に何か聞こえた。あれは何だったんだろう。

今までの出来事を振り返りながら、緩く曲がった道路を歩く。カーブを曲がった正面にはある建物があった。

「な、なんで……？」

その建物は元いた廃校だった。

まあ、よくよく考えれば小山に建っているこの廃校が町で一番高い建物である。

「おかえり遅かったね。というかずぶ濡れじゃないか。言う事聞いてればよかったのに」

「……はは、誰のせいだと思っているんだ。お前のせいだ」
「そんなことないって。それより見てよ、この景色。海みたく綺麗だろう？」

と笑いながら窓の外を指さす。月の光を反射した水面は輝き、その景色が奥まで広がっている。町の端にあった山は今では島のように見え、確かに海のように見える。

「綺麗だな」

「でしょ。この景色すごく綺麗。いつまでも眺めていたいよね」

「このままじゃ困るけどな。……あと、ごめん。カッとなって色々言ってしまった。何言ったかは覚えてはないけど……」
「まあいいよ。それより、ちょっと付き合ってくれない？」
「付き合おうって何に？」
「それは後でのお楽しみ」

そうやって散乱していた机を三つ、椅子を二つ教室の真ん中に配置した。何が始まるのかと思いきじつと見ていたら、後ろを向いてと怒られてしまった。後ろで何かが置かれる音と椅子と机を動かす音が聞こえた。十数秒後、後ろの方からもういいよと声がした。

振り向くと机が三つぴたりとくつつけられ、左右の机に椅子がそれぞれ一つずつ、真ん中の机には布を被せられた物体が置かれていた。物体が何なのかはわからない。

「これから映画鑑賞をします。何が見たい？」

楽しそうに話しかけているが、一つの疑問が浮かんできた。

「これ何。これで映画を観るの？ 電気もないのに……」

物体の布を取ろうと手を伸ばす。しかし目の前の人間がパシッと手首をつかんできた。

「駄目だよ、覗いちゃ。映画が観れなくなるじゃん」

「どういう事だ。そもそもこれは何」

「たまたま見つけたものだよ。それに最初からそうだった」

「これで映画が観れることはどうやって知った」

「……なんとなく。実際試したらできちゃったし」

「本当に？」

「嘘はつかないよ。でもお願い。中身を見ないで」

真剣な表情で見つめている。嘘をついていないように見えるが本当にそうなのだろうか。

「……わかった。最後に聞くけど、これは安全なものだよね」

「大丈夫だと思う。大丈夫」

手首を放し物体に近づく。布の中に手を入れて何かをしている。人には止めるのに自分は大丈夫なのか。

黒板に光が映し出される。映画はすでに始まっていて、すでに冒頭部分が流れていた。魔法使い見習いが親元を離れて見知らぬ街で修業をするお話だ。小さいころからよく見ていたのすぐに分かった。

「本当に映画が観れるんだ。びっくりしたよ」

「気に入ってもらえてよかった。暇つぶしにしかないけど、ゆっくりしてね」

それが終わるとすぐに別の映画が始まった。先ほどのようなファンタジーものもあれば感動的な実写映画、海外の映画、アニメ映画、ホラー映画もあった。どれも知っている映画だったが、とても楽しむことができた。

「久しぶりに映画を観たよ」

「どれがお気に入りだった？」

「うーん、最初に観た映画も好きだけど、そのあとに観た病気の子の話もよかったな。犬とか動物のやつは癒されるし、アニメとかファンタジーはドキドキ出来て楽しかったな。ホラー系は怖くてまともに観れなかった」

他にも挙げると思ったら宇宙もののSFシリーズや国民的アニメの映画シリーズ、有名監督が手掛けたアクション映画の数々……ラブストーリーはあまりなかったけど好きな映画ばかりだった。

「他の映画はあるの」

「他は……もうないね。これで全部だ」

「そうなんだ。もう一回観ることはできる？」

「できるよ。何回でも」

「じゃあもう一回お願いします」

そのあとも映画を観続けた。邪魔をするものがないこの世界は映画鑑賞にはうってつけだった。ある映画を観終わったところで隣から声が聞こえてきた。

「映画を観るのも楽しいけど。そろそろ休憩した方がいいんじゃない？」

「そうかな。確かにそろそろ休憩した方がいいかもね」

「じゃあ休憩に寝る。おやすみ」

「寝てばかりだな」

「ちよつと疲れたからね。寝ないと」

隣で寝息を立てている姿を見て少し眠くなった気がした。瞼を閉じて今までのことを振り返る。

目覚めたら知らない学校だったこと、変な人がいたこと、喧嘩に、化け物、映画鑑賞。水。町。山。小屋。月……この町から出ることに。いろんなことがあったし、化け物に関してはわからないことだらけだし……ちよつと疲れた。寝ようかな。

大丈夫でしょうか？

はっきりとは断言できません。現在は安静な状態を保てて

いますが、いつまた危篤状態になるかわかりません。

——危篤？

我々も最善を尽くしていますが——

ズキ、ズキ、ズキ、ズキ、ズキ、ズキ。

頭が痛い！ ずっと痛い。ずっと痛い。痛い痛い痛い——

「しゃーぼんだーま、とーんだ」

童謡が聞こえる。

「やーねーまーでとんだ。やーねまーでとんで。こーわれーできえた。しゃーぼんだーまきえー……起きちゃったか、残念」

目を開けると目の前に見知った顔があった。悲しそうな顔で微笑んでいる。その顔に懐かしさを感じたがどこで見たのか思い出せない。それにさっきの会話はなんだったのか。ゆっくりと頭を起こした。どうやらいつの間にか寝てしまったらしい。寝やすいように椅子が三つに増えていた。

「……寝ていたのか？」

「うん」

「……そうなんだ」

「外を見てみて」

言われた通り外を見てみると海のようにだった町が元に戻っている。

「君はこの町から出たい？」

「うん」

「そうなんだ」

「君もそうじゃないのか」

前と同じようなやり取りだった。しかし、あとに続く言葉は全く違うものだった。

「この学校から出られない」

「………どうして」

「ごめん」

「だからどうして」

何も答えてくれない。

「君と一緒に出たいんだ。納得できなくてもいい。だから教えて」

「きつとこの町から出られない、一緒には」

だって、と一呼吸置いたあと続けて言った。

「君と一緒に学校を出ることはできないから。それにこの教室すらも出られないよ」

「どういうことだ」

「なんとなくかな」

「曖昧すぎるだろ。さすがに教室くらいは出られる」

手を引いて一緒に教室を出る。難なく出ることはできた。しかし、後ろでドサツと音が聞こえ、振り返ると床に倒れこ

んでいた。とても弱っているように見える。

「大丈夫か!？」

「力が、入らない。いっかい、もどって」

教室に戻ると、最初のうちは衰弱していたが少しずつ回復して行った。それでもまだ、だるそうに見える。

「大丈夫か。何か出来ることはある？」

「大丈夫。大丈夫」

「本当にごめん、こんなことになるとは思ってなかった。ごめん」

「………だから一緒に出ることはできない、と思う。でも君は出たいんだよね」

「うん」

「なら、一人で行くんだ」

「君を置いては行けないよ」

「なら、ずっとここにいてよ」

沈黙が続く。どう答えたらいいか考えていると相手から話しかけてきた。

「ほら、ここにはいられないでしょ。君の性格じゃずっとは無理だと思う。だからここで決めた方がいい」

——ここに残るか、一人で出るか。難しい選択だ。確かにこの不気味な町から出たい。しかし、自分だけ助かる？ ことは心苦しい。

「少し考えさせてくれ」

「大丈夫、ゆっくりでいい」

長い間どうするか考えた。が、考えは纏まらなかった。考えているだけでは何も変わらず、行動するにしてもどうしたらよいかわからない。青い月の光が窓から差し込むだけだった。

どのくらいの間が経っただろうか。窓の外からは相変わらず光が絶え間なく注がれ、ゆっくりと時間が流れて行った。あのとき以来から何も話さずほとんど動いていない。教室の隅でうずくまり、ぼーとしていた。もう一度寝ようとしたが、瞼を閉じるだけで寝ることは出来なかった。しばらくそのままでいたら、隣で座る音が聞こえた。

「ゆーりかごーのうーたを、かーなりやーがうーたうよ。ねーんねーこ、ねーんねーこ、ねーんねーこよ」

「なあ、どうして子守歌を歌うのさ」
瞼を閉じたまま聞いた。

「寝れないんだろ。でもダメだ。歌を歌うといつも起こしてしまう」

「目覚ましには丁度いいかもな」

「目覚ましにはなりたくないね。……そろそろ決められた？」

「いや、全然」

「そっか。でもいずれは決めないと。選べるうちに」

「それはどうということ……」

顔を上げ、隣にある顔を凝視した。顔に何かついているわけではない。ただ、いつもと違うのは向こう側の景色がうつすらと見えることだ。体が幽霊のように透けている。

「お前、体が透けてるぞ!？」

「そうなんだよね、困った」

「どうしてそんな平然といられるんだ。大丈夫なのか」

「大丈夫、ではなさそう。それに体が透けるよりもっと怖いことがある」

「なんだ」

「——君を一人にすること」

「なんでそんなことを心配するんだ。それよりも自分の心配をしろ」

「だってさ、体が透け切って消えちゃったら君がどうなるかわからないじゃん」

「だから人の心配は……」

「だから今決めてほしい。ここに残るか、一人で行くか。一人で行くんだったら、この体が消える前に行ってほしい。そうすれば少しは安心できる。もちろん消えてしまった後でもかまわないけど」

「なんでそんなこと言うんだ。消えるかどうかはわからないのに」

「……勘だよ。よく当たるのは知っているだろう」

やさしく微笑んだその顔はどことなく憂いを帯びていた。きつと、今ここで決めないとダメなのだろう。涙があふれる思いがした。

「わかった」

一人で行くよ。そう伝えると、驚くこともなくわかってい

たように「やっぱりか」と返してきた。この人はどこまで自分の気持ちが変わるのだろう。

「よかった。決めてくれて」

「遅くなったけど待っていてくれてありがとう」

「じゃあ、早く行って！ 気持ちが変わる前に」

「……そうだね。じゃあ、またな」

「うん、バイバイ……：：：ああ、行ってしまった。意外とあつけないもんだな。でも最期くらいは自分で決めたいよね」

アイツと別れた後は学校を出て、町に降りた。前にきたときとは違い胸がざわめく。やっぱり戻ったほうがいいのか。さらに進んで小屋があるバス停が見えてきた。ここから先は山道になっている。この道を進めば町を出られる、そう思った。

山道ではあったが、ある程度整備されているので最初のうちは楽に登ることができた。しかし、途中から土の道に変わると足場が悪くなった。そう言えば足元が見えやすくなっている。

何時間も歩き続けた。ずっと同じような景色だったが急に山が開けて周りの景色が見えた。山がずっと続いている。その山の中に赤い建物が見えた。この道の先にある。こんな山の中にある神社を見るのは初めてだ。

神社に着いた。鳥居も境内も思っていたよりきれいで誰かが管理しているように見える。そこまで大きい神社ではないがとても立派だ。

「そうだ」

(無事に町を出られますように)

目を瞑ってそう思っていると後ろからポタッと水の音がした。目を見開き振り返る。すぐ真後ろに『化け物』がいた。まだ、人の形をしている。

「ここからきていたのか!？」

逃げ場はない。後ろは建物と山で行き止まりだ。他に方法はないのか。そう考えていたときあることに気づいた。化け物が少し小さい。何故かはわからないがもしかしたら正面突破出来るかもしれない。

一度賽銭箱の所まで下がって様子を見る。化け物も距離を詰めるように前に出た。今だ。素早く賽銭箱に上り化け物を飛び越えた。正確には踏みつけただけだがそこは問題ではない。急いで出口に向かう。そのまま走って山を駆け上がる。

本当に何なんだ。あの化け物は。何がしたいんだ。困惑しながらも必死で逃げる。後ろから追ってきてはいない。

しかしボンツと後ろから爆発音のようなものが聞こえてきた。遠くの神社に柱が立っている。水の柱だ。

まずい。

背後から轟音が追ってきた。木を倒す音も聞こえてくる。顔に水がかかった。追いつかれる。この先は曲がらないといけないのに。やばい、追いつかれた。

この先は崖だった。化け物は止まることなく崖下に突っ込んで行った。水の勢いは凄まじく、十メートル程先の高い木

まで吹き飛ばされてしまった。下を見ると化け物が徐々に這い上がってきている。もう何も出来ない。

「どうされましたか」

木の上にいるはずだ。なのに声がした。振り向くと天女のような姿をした女が宙に浮いていた。逆光で陰になっている。

「あ……実は化け物に襲われていて木から降りられないんです」

「化け物……なるほど、確かに化け物かもしれないですね。助けてあげましょうか」

「本当ですか。でも、どうやって」

「手をお貸しください」

女が手を取る。すると、女と一緒に宙に浮いた。化け物は足元で狂ったように暴れていた。

「ここからどうしましょうか」

「あの、実は町から出たくてこの山にきたんです。その途中で化け物に襲われてしまって。この山を越えたいんですができますでしょうか」

「ええ、もちろん。すぐ近くですよ」

女が移動すると同時に化け物も後を追ってきた。しかし、ある一定の標高でピタッと追うのをやめた。そこから先は濃い霧がかかっている。

「ここから先は私たちも歩いて行かなければなりません」

「どうしてですか」

「迷ってしまえば先に進むことも戻ることもできないからで

す」

「そうなんですか」

「それでは行きましましょうか」

白い光に包まれながら道を頼りに山を登る。もうすぐ頂上だということとで女が振り返った。

「この先を越えれば帰ることが出来ます。行きましましょう」

「はい……」

「どうされましたか」

「町に一人置いてきたんです。自分は大丈夫だからって。その人のことが心配になって」

後ろを振り返る。濃い霧がかかっている。それなのになぜか遠くあの町が見える気がする。いや見える、あの学校が。窓際に『アイツ』がいる。「行かないで」とはつきり聞こえた。

「どうしましたか」

女は優しく微笑んでいる。けれど付いて行ってはいけない。この先にあるのは――

「すみません。一緒には行けません。やっぱり心配なんです」

「そうですか」

「ご案内ありがとうございます」

「いえいえ、それではご縁があればまた会いましょう」

女は山を越えて霧の中に消えて行った。その姿を見た後迷わないように慎重に道を引き返した。霧を抜けるとあの時のように海が広がっていた。

「学校まで届けてください」

どぶん、と自ら水の中に飛び込んだ。息をするのが辛い。目を開けると海の底に町があった。学校の窓辺にアイツがいる。

「行っちゃったかな」

「行ってないぞ。ここにいる」

「え、帰ってきたの」

「行かないでって言っていたのは君だろう」

「……聞こえたのか」

「だって君は『僕』だ。僕の声が聞こえるのは当然だ」

「ありがとう、気づいてくれて」

「言ってくれてもよかったのに、どうして何も言ってくれなかったんだ」

「信じてくれないだろうと思った。それに何も覚えてなさそうだったからね。まあ結果的によかったけど」

「いや結構ギリギリだったぞ。気づかなかつたらあっちに行っていた」

「でも気づいたとしても元に戻れるかわからない」

「それでもいい。きっと死ぬよりはマシだ。それより元に戻るにはどうすればいい」

「……たぶん、深く深く眠ればいい」

「それは勘？」

「うん、それに起きるためには眠らないといけないから」

「僕の勘はよく当たるしね。それじゃあ、おやすみ」

「おやすみ」

目を閉じて横になる。意識が暗い海の底に沈んで行く。真っ暗で温かい水が僕と一つになって行った。

次に目覚めたとき僕は病室にいて、細いチューブが僕の身体から伸びていた。見回りにきた看護師が僕に気づき、医者と家族を呼んでくれた。家族は僕の意識が戻ったことを泣いて喜んでくれた。

家族によると、僕は学校の階段から落ちて一か月も生死を彷徨っていたらしい。命は繋ぎとめたが何度か危篤状態になって、最悪植物状態になるかもしれないと言われていた。意識が戻ったのは奇跡だと医者も言っていた。

結局、あの体験は自分が見た夢だったのか。あるいは、実際に僕が「僕」と話したり、化け物に襲われたりしたのか。どちらにせよ二度とあんな体験をしたくない。そう思いながら僕は眠りについた。

共感された。そう思うと、怒りではらわたが煮えくり返りそうになった。

「もう……ほっといてください。あなたには共感すらされたくないです。僕はただの一般人に共感されると自分が小さく見えるんです。もう金輪際話しかけてくれませんか？」

彼は少し悲しそうな顔をした。僕にとってそれは好都合だった。もう話しかけられることも、話しかける必要もないと思っただけだ。そこから、例年ならリンチであったであろう交流会と銘打たれた一年とのスタメン対決だった。僕は一年という理由で、スタメンから降ろされた。どんな理由があるかと正直許せなかった。自分がスタメン落ちだという事実が、少しは分かってあげないとな。そうも思った。

試合開始のホイッスルが鳴った。僕らのチームは即席で、あまりいいチームと言えようなものではなかった。相手チームの中に一際目立つ男がいた、目立たな過ぎて逆に。案の定その男の髪はぼさつとしていたのだが、僕は本能でマウントを取ろうとしていた。足元のボールを右へ左へ、右にやると見せかけてまた左に保持、こんな風なドリブルを続け、その男の前まで来た。僕は軽く口角を上げ、どこかにぶそうな彼を軽くかわしたはずだった。次の瞬間、笑われていたのは僕だった。足元にあるはずのボールがなかった。おおよそ五mであろうか。走る僕の後ろ側に、その不気味な男の姿が……。初めてだった。ボールが目の前からなくなつた。

「い……いやだいやだいやだ——お……俺は弱くない……弱くない……う……うわあああ……」

ボールは……ボールはどこだ……俺は焦っている。なぜだ……俺はいつも通りだったはず……ただいつものようにドリブルをしていたはず……それなのに……それなのに……ボールはあのひよろがり陰キャクソもやしの足元にあるんだ……。まわりからの所詮お前もこんなものかという視線が痛い……。俺は弱くない……。これまでもいっぱい俺目当てに取材が来てた……未来の大スターとしてテレビでも引っ張りだこでもてはやされた……。今の俺になにが足りなかったというのか……。

いつの間にか試合は終わっていた。試合結果は覚えていない。思い出したくもない。僕は皮肉なことに接触を絶つた人を目で探していた。彼はと言うと、ぼつんと立つ木の影で、死んだように休んでいた。僕は考える間もなく相手に近寄った。あくまで、将棋で言う感想戦みたいなものだ。

「お前、なんで僕のボールが取れるんだよ。僕はお前とは違って今まで頑張ってたんだよ。努力をしてたんだよ」

そういうと彼は、

「う……うん……。分かったから、み……水……」

掠れた声で囁いてきた。正直ウザかった。あの死にそんなクソ陰キャがではない。自分がだ。こんな奴に負けたのだと思うと腹が立って仕方がない。水分の管理もできなかったの

か。

「部屋に入って、正面右に黒い……バックパックがあるんだけど……それ取ってきてくれないかな……」

なんでこんな奴に僕はこんなパシリみたいな扱いをされなければならぬのか。しかし、こいつに僕は負けた。一回くらは言うことを聞いてみようではないか。僕は、駆け足で部屋へ向かい黒いバックパックを探した。後ろに嫌な気配を感じた。

「君、何してるの？ そこら辺にあるのって少なくとも君のでは無いよね。泥棒さんはさつきと出てけよ……」

嘲笑されながら言われたことに腹を立てたが、見かけはそうなのだろう。僕は何も言えなかった。

「泥棒さんって誰のこと？ 一年生いじめて楽しい？ そういうのさ、もっとサッカー上手くなってから言いなよ……少なくとも、今はこの子の方がお前よりは上手いと思うけど。あのさ……僕、同学年として恥ずかしいんだけど……」

僕へ威嚇してきた野郎は僕に向かって、覚えてろよと言わんばかりのヤンキー漫画の一コマみたいな顔をして、舌打ちした後、部屋を後にした。僕が感謝の気持ちを伝えるより先に、もやしは口を開いた。

「ねえ……もうそろそろ僕、死んじゃうよ。うん。それ。早くこっちに渡してくれないかな……」

少しムカつきながらも僕は彼にバックパックを手渡した。彼は日頃の彼らしいゆっくりとした手つきでお茶の入ったペ

ットボトルを取り出し、キャップを開け、口を付けた。少し息をつき、彼は再び口を開いた。

「遅かったから、少し見に行こうと思ったたら、喧嘩……ふっかけられてたね……人が死にそうな時に。まあ、いいや、君強かったね……。あ、安心して、僕もあいつ嫌いだから」

こいつは、一体何なのだろう。こいつは一体僕に何をしたいのだろう。なぜこんなにも僕に構う。なぜこんなにも僕に纏わりつくのだろう。僕は少し思いとどまり、一つ疑問をぶつけた。

「なんで、僕のドリブルを抜けたんですか？ 普通、抜けないはずですよ。たまたまですか？ それとも……」

案外答えはシンプルだった。

「それは単純に、君がわかりやすいからだよ……。君の動きには無駄がないように見える……。だからこそ、わかりやすい。例えば、君の利き足は右、よくボールをホールドするのは右だし、よくシュートを打つのもそうでしょ？ 少し左にボールを置いてる時、君は少しぎこちなくなるんだよね……大体、右足と比べて数秒のズレがある。正直、そこで取れば君はどうってことないように見えたよね。あ、君と僕の体力の差とか、そんな野暮なことは聞くなよ」

正直ムカついたが、間違っていないことは、僕が一番分かっている。それにしても初見で気づくとは、かなりの実力者なのだろう。こんな飄々としたやつが……と思うと、もどかしい気持ちでいっぱいになった。

小学生の頃、僕は天才だった。まだメディアにも見つけれず、小さな地方のその一帯では少々有名な一人のサッカー少年だった。今と決定的に違うところがあるとすれば、性格だろう。同じサッカーの少年団に入っていた僕の親友兼ゴールキーパーのおかげでこうなってしまった。十中八九、悪いのは僕ではある。

毎日、毎日みんなが帰っても一人残ってドリブル、シュート。そしてグラウンドの走り込みを続けた。来る日も来る日もサッカーに費やした。先輩がボールカゴをしまおうとしている時はすぐに駆け寄り代わりに運んだ。先輩が来れば真剣にサッカーを教えた。コーチもこの頃は僕を真面目と太鼓判を押していた。

とある寒い冬の日だった。この日もグラウンドを走った。人に見せるものではないと思い、個人練は大体、人が居なくなる三十分後ぐらいから始める。辺りは既に真っ暗だった。疲れて、ふうと息をついて少し休憩していた。

誰か分からないが、いきなり胸ぐらを掴まれた。

「おい、お前なんか努力すんなよザインだよ……正直みんなそう思ってるぞ……お前がいるからスタメンにもなれない。そう言っで一晩中泣いたやつだっている。お前のせいで、自分はチームに要らないって思ってたやつかもい……俺も……最近、お前のボールが取れなくて、練習して

る。でも俺はいくら練習してもボールをセーブ出来ないし、手を出しても手が負けるし……。そしてこの前、俺はお前を見つけた。その時も練習してた。全体での練習が終わって五時間経ってからだった……その時はたまたまだろうと思った。でも次の日もまた次の日もお前はここで今日みたいに練習してた……。お前は強いよ……今でも十二分に……それは認めるよ……でもお前は傲慢でもなんでもない……自ら憎まれ役を買って出る訳でもない。まるで聖人君子そのものなんだよ……だからみんな言えないんだよ……」

僕はか細い声で、え？ と聞き返すことしか出来なかった。多分、興奮している彼には聞こえていなかっただろう。急に彼は力を抜いた。僕は自由になった。彼はまた口を開いた。「ごめん……お前、俺の親友なのに。ただ、お前は頑張ってるだけなのに……俺がただ努力してないだけなのに、お前を悪者にしちゃってごめん。はは、許されるわけないよなこんなやつ。今の、全て忘れてくれ。俺、練習してないのに疲れてるのかも」

彼は帰った。笑顔だった。その日は練習を切り上げた。次の日、あいつは来なかった。次の日もその次の日も来なかった。後で知ったが、彼は少年団を脱団したらしい。明らかに僕のせいだった。それは僕だけが思っていたことでは無いらしい。僕のしてしまった事の重大さに、やっと気がついた。

「おーい」

ああ、クソもやしの声だ。

「びっくりするじゃん、急に震えだすから……」

どうやら僕は少し意識が飛んでいたらしい。気がついた時には保健室にいた。初めて入った。ベッドが四つ、それらを囲むカーテン、何に使うのか分からない器具と、無駄に澄んだ……。

「えっと……」

陰キャもやしがバツが悪そうにこちらを見ている。僕はというと、この苛立ちと悲しみをどうすることもできず困っていた。こんなフラッシュバックごときで感情がゆれうごくなんて思いもしなかった。

「大丈夫かな……かなり震えてたけど……。一応ここでゆっくり休んだ方がいいよ」

自分へのどうしようもない怒りを何かにぶつけないと気が済まなくなった。

「お前に何が分かんだよ……。俺が今までどれだけ苦労してきたか……俺が今までどれだけの人を……。どれだけの自分を犠牲にしてきたと思ってるんだ……。それをお前はいつも簡単に……。俺はお前を許さない……。許さない……。許さない」

ここが保健室であることも忘れて僕は一心不乱に口や手を動かしていた。彼は、僕をわざと煽るかのように言った。

「それってさ……。君。努力というものを盾に自分のやってきたことをどうにか正当付けたいだけだよ……。見てるとわかるよ……。君の心根はまじめで優しいところも、これまで努力

してたつても……。ただ、それを僕らがどうかどうかは別だよ。でも一つ言えるのは、そんな君は自分をちゃんと労ってあげてるのかい？ 一番頑張ってるっていうのを知っているのは、紛うことなく君なんじゃないかな……。君が君自身を労ってないのにどうして僕らが労わないといけないの？」

自分が自分で労うなんてただの自己満でしかない。そんなことやってもただのイキリ野郎にしかない。

「それでもいいでしょ……。自己満で。それでもしないとモチベも何もわかないでしょ。自分を一番知ってるのは自分だけ、自分が何をしたら喜ぶとか、何をしたいか、何をすべきとか、人に決められるくらいなら、人間として生まれた意味すら君にはないよ」

なぜ僕の考えることがわかるのだ。僕は何も言っていない。僕は少しこのもやしがただものではないと思った。

「なんでわかるかって……。そりや人間観察が好きだからね。君がゴールキーパーの子をやめさせたのも、君が実はいいやつだったのも全部知ってるよ。だって後ろから見てたもん。あの日……。たまたま見ちゃったんだよね、多分二人は気づいてなかっただろうけど……。あ、君に喧嘩ふっかけたやつ、君が辞めさせたその子のお兄ちゃんだからね。本人に聞いた訳じゃないけど多分そうだよ。何か吹聴されたんじゃない？ あいつはあいつで悪いやつじゃないし……。まあ、嫌いだけど」

なぜだろう。彼といるとすごい心地が良い。僕は負けたつてのに、僕は信頼してきたやつを裏切ったのに、こんな気持ち

ちになつてはいけないのに、でも、胸の奥で、この人になら
元来の僕を見せてもいいのかな、そんな気がした。なんでも
見透かされる。僕はそんな人を求めていたのかもしれない。
友達が減ったあの日から、全てを受け入れて受け止めてくれ
る、そんな人を。

目からとめどなく涙が流れた。彼は両手を広げて僕を受け
入れてくれた。少しあつたかかった。僕はサッカーのコツを
聞いた。もちろん下から目線で。すると彼は丁寧に教えてく
れた。僕に足りないものを持っている人は正直尊敬する。そ
れを隠して生きてきた。もちろん僕が尊敬の念を抱いている
のは彼だけではない。しかし、その尊敬というものを彼の前
だけでは見せてもいいのかな。あくまでこれが僕の素だ。

来る日も来る日も彼と練習した。もちろん彼が持つていな
いものも僕は持つている。それを教える。彼の練習プランは
僕にとってちょうどよく、それも含め、読まれているのかと
思った。

そんな生活が一ヶ月ほど続いた、とある日。そう、それは
僕がシュートを教えている時。彼は突然倒れた。失神……。
僕はすぐさま先生をよんだ。

「先生。う……あ……か……神崎さんが……倒れ……倒れて、
今すぐ来てください」

「小櫃、お前が来るなんて珍しいな。しかも、人が倒れてる
だつて？」

「うるせえ……そんなの今関係ないだろ、場所はグラウンド

……さつさと来いつつてんだよ、遠藤先生は救急車を……」
僕は体育館の入り口に置いてあるAEDに手をかけた。先
生はまだグラウンドにいない。僕はAEDを使おうと先輩の
服を襟元から順に開け、AEDを開けた。瞬間、先生が止め
に入った。

「お前、人に電気を流すなんて正気か」

僕は先生のいうことを無視した。

「右のパッド、もうちよつと下。そう……その辺」

どうやら救急車を呼んだ後の遠藤先生が養護教諭と来たみ
たいだ。救急車が来て救急隊が先輩を運んだ。僕も同行した。
僕は先輩の住所、名前、年齢、状態、かかりつけ医と先輩の
様々なことを聞かれた。結局答えられたのは名前と軽い状態
くらいだった。ここで僕は、先輩について何も知らないとい
う随分初步的な事実を知った。胸の内を……なんて言ってい
たのに、まるでこれでは僕の目をとってつけたようだった。
と少し考え込んでいたのも、ツンとする消毒液の匂いがかき
消された。そうだ。今はこうしちゃいられない。とりあえず
僕はなにをすればいいのだろう。聞いてみても返ってきたの
は、とりあえず落ち着いてくださいという、なんとも冷静な
答えだけだった。

僕は、ただの一高校生だ。もちろん先輩も同じだ。でも、
それぞれに人生がある。僕は一体何者なんだろう。今まで本
当の自分を押し殺して生きてきた。それをいぎ解放しようと
思っても、なんとも難しい。まるで僕は自分に首を絞められ、

そのうえ縛られているようだった。

サイレンは止んだ。いつの間にか救急車の中は少し遠しくそして、うるさくなくなった。どうにも難しい言葉だらけで僕には理解できなかった。直に先輩は運ばれた。僕も先輩に寄り添うことになった。ただでさえ白い顔が青白く、唇は紫に変色していた。チアノーゼ……。昔読んだ本に書いてあったものだ。詳しくは知らないが、どうやら重篤なのかもしれない。先輩はどうやら胸部X線、心エコー、血液検査を順に受けるらしい。医者はある程度、予測はたっているらしかった。ただ、それは最悪の結果を意味していた。医師から告げられたのは、

「肥大型心筋症」

ただ、呆然とする他なかった。心臓の心室というところが大きくなり、流れるはずの血液が流れにくくなる。要するに、死ぬかもしれない。そう告げられた。やっと出来た仲間がこれも簡単に居なくなるかもしれないというのは、どうにも苦しいことだった。意識のない先輩と、僕。今明らかに絶望しているのは僕の方だろう。なぜなら先輩は絶望できるほどの意識なんて持ってないから。

翌日の丑の刻。先輩は目を覚ました。深い眠りから覚めたような感じではありつつ、どこかむず痒い表情を僕にして見せた。例のごとく先に口を開いたのは先輩だった。

「ごめんね。疲れて寝ちゃってたみたいだ。もう大丈夫だから」

ら

先輩が立ち上がるとした瞬間、彼はカッと目を開き、カハッと音を立て咳き込んでしまった。恐らく無理をしたのだろう。その時、初めて先輩が僕のペースに無理して付いてきたツケが今回って来たのだということに気がついた。先輩も何かを悟ったような顔をして苦笑いをした。

「とりあえず今は安静に。治ったらまたサッカーしましょう。それまでは僕はずっとそばにいるから」

それから、僕はサッカー部を休部し、来る日も来る日も先輩のお見舞いに行った。僕にできることと言えばこのくらいしか無かった。早く治るようにとメロンを買う余裕も、何かそういった格式張った和洋のお菓子をかう余裕も僕にはなかった。先輩が一人の後輩を氣遣った、なにも要らないという言葉に甘えることしか出来なかった。それでも、話題はサッカー関連のものばかりだった。元々サッカーはするだけという先輩も、今ではすっかり見るのにハマっている。先輩いわく病院は暇らしい。僕が学校で来る事が出来ないような時間帯にある試合も、もちろん日本の試合も結果を教えてください。そして二人で見返す。今のはもうちょっと短くホールドした方がいいだとか、ちょっと緊張しすぎだとか、実際にしていないからこそ言える。静かな病室で、僕ら二人はコーチごっこをしては笑いあった。先輩にも笑う余裕が出来たと思うとホッとした。病状も回復傾向にあるらしい。早ければ来

週退院らしい。

今日はゲームを持ってきた。二人対戦ができるサッカーゲームだ。今日は学校だったが、バレなくて良かったと心底思う。二人でやるサッカーというのはなんとも楽しかった。しかし、実際にボールを蹴って、ホールドして、シュートする感覚にはどうしても勝らないとも同時に思った。一人称視点で試合中段々と視野が狭くなっていつてしまう感覚も、自分の殻に籠もりボールを自分の中に閉じ込める感覚も、何もかもチープだった。まるでサッカーをした事の無い、絵に描いた餅のようだった。普段の恩恵、ありがたみというものを感じた瞬間だった。でも、二人の仲が今までよりさらに良くなってるのも事実だと思う。先輩は笑顔だった。それと同時に真剣だった。

次の日は教科書を持ってきた。先輩は教科書を見るやいなや掛け布団を深く被り、勉強を拒んだ。先輩は身長が高い。足が丸出しだった。こちょこちょすると、先輩はそれが苦手だったらしくガンとベッドに頭をぶつけた。ドン、今度は壁の向こうから音がした。僕は反省した。それを見て先輩は笑った。先輩が笑顔でいるのなら無理に勉強はさせなくてもいいと思ひ、教科書をしまった。先輩は胸を撫で下ろしたら、安堵でむせたらしく、僕は笑った。先輩は反省した。それに気がつく二人して笑った。

次の日、ボールを持ってきた。二人が好きなのを。先輩は部屋にいなかった。僕は焦った。看護師さんによると、今朝、急に容態が悪化し、今は少し移動しているらしい。僕は目から流れる少しの水を拭い、先輩と見ていたサッカーを見ていた。ここで先輩は、こっちの16番が空きのなになんでパスしないんだろうと言っていたなど、小さなテレビを見てしみじみ思っていると、先輩が車椅子に座って戻ってきた。僕がパツと明るい笑顔で迎えると、彼も心做しか少し口角が上がった気がした。看護師の方とは目が合わなかった。看護師さんは僕に対して、

「もうすぐ面会時間が終わるから、ごめんだけど五分後には帰ってもらうことになるよ」

僕は明日、今日できなかった分いっぱい話そう。と言って、迷惑になってはいけないとそそくさと帰った。

今日も僕が病院に来る目的の一つ。エレベーターに乗って三階へ。二回ほど角を曲がったあと、四つ目のドア。表札代わりに三二七号室神崎様と書かれたチープな札が貼り付けてある部屋。僕がドアを開けた時、先輩は達観した目をしていた。僕は少し嫌な予感がした。彼も僕に気付き少し口角を上げた。

「いつも通りと思える人生がいい」
僕の中で何かが壊れる音がした。気がついたら俺は恩人の

胸ぐらを掴んでいた。一心不乱に、そして泣きながら、止めろよ……止めてくれよ……俺を……俺をまた一人にしないでよ……。いつまでも自分本位に人にものを頼むのが自分でも悲しく思う。それでも冷静を装いたかった。

「いつも通りって言ったって、それは楽しくないですよね」
冷静に言えたはずだ……けれども、俺の声は震えていたし、涙は乾くどころかむしろ、さらに強く流れていた。彼はとうとうと、何かを達観したかのように……どこか輝かしい目で尚且つどこか儚げで、むしろ、落胆しているようにも見えなくも無い無垢な目で

「そうかもな」
何故か彼の真っ白なシーツは濡れていて、それでいて彼は少し顔を歪ませ軽く笑っていた。いつもの彼の笑顔とは違い不気味ではなく、むしろどこか嬉しそうだった。心から笑っていたような……そんな感じがした。そんな静寂さが一分くらい続いた。

「君の来る少し前……大体十五分くらい前……先生が来たよ。もってあと……一ヶ月なんだってさ……」

この言葉に俺はさらに泣いた。生後間もない赤子のようにここが病室であるというのを忘れて

「ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい……」

元々静かな病室ということもあり、自分の声だけが部屋に響いた。大体三十分くらいだろうか。涙は次第に涸れてしま

った。しかし、泣きたいという気持ちは止まらなかった。病人の弱った少しカサカサとした細い手が俺の頭を寛大に包み込むような、そんな心地の良い感覚に溺れそうになった。泣いても泣いてもどうすればいいのか、今、何をすべきかは、少なくとも今の俺には到底分かるようなものではない。彼は何かを悟ったかのように口を開いた。

「最後に君に出逢えてよかったよ。僕という人生に、いや半生という花瓶に、こんなに立派な一輪のコルチカムを挿してくれてありがとう」

俺は少し怖くなった。昔の記憶が僕を襲った。思い出したくもないあの日のことを。ああ、段々と彼の手から力が抜けてゆく。彼はどこか嬉しそうに目を閉じている。僕はナースコールを押した。医者が死亡確認をしている傍らで、僕は看護師さんに背中をさすられながら泣いていた。涙が涸れても、乾いてもなお。

享年十八。一つ、命が散った。今になって、彼はあと一ヶ月の猶予があると嘘をついていたことに気がついた。彼はきつと気づいていたんだ。僕に君が一番頑張ってるって事を知ってるって言ったのは、紛うことなき彼だった。でも、教えてくれなかった。彼なりに希望を与えてくれたんだ。それなのに、僕は何も出来なかった。それどころかずっと目を背けてばっかだった。乱雑な髪はいつになつたって手入れされずに乱雑なままだし、耳は相変わらず取ってつけたようなそれ。

でも、ハイライトもなくしたはずのその目には希望だけが残っていた。今になって後悔してももう遅いのはわかっている。だけど、今だけはこの気持ちで噛み締めていたい。それが今僕にできる精一杯の懺悔だから。僕はこのもぬけの殻になった病室にカモミールと白百合を供えたいと思う。次はどんな人になればいいのだろう。でも、憧れの存在は出来たからそんな人間になれたらいいな。一人のねじ曲がった少年を治せるような、優しくも弱い神様みたいなそんな人に。僕は反省してもしきれないこの現状が怖かったけれど、胸の内には応援してくれる人がいる。これから僕はどう生きようか。楽しく生きられたらそれでいいや。でも、楽しすぎちゃうと怠けちやいそうだから、ほんの少し試練を頂戴。と、先輩に手を合わせた。先輩は、任せとけと言わんばかりの顔をしているような気がした。

あれ？ もう、日が暮れますよ。今はゆっくり休んでまた元気になったらサッカーでもしましょう。先輩。

デウス・エクス・マキナ

伊集院高等学校 三年

人亡 未

「何円形の壁に沿って、ガラスで区切った部屋が並んでいた。それらが垂直に幾千も積み上がり、巨大な塔となつていく。吹き抜けになつたその塔の中心を漆黒の円柱が貫いており、そこから全ての部屋を一望できるようになつていた。

その内の一室に青年はいた。彼は小さな寝台の上で寝息を立てている。素肌に纏つた貫頭衣は細い輪郭が透けて見えるほど薄く、長い髪を枕の上に広げて体を丸めている姿には、見る者の庇護欲を唆すような幼さが漂っていた。

五メートル四方の部屋は淡いピンクの光で満ち、柔らかな陰影が生まれている。床には清潔なマットが敷かれ、室温も一定で暖かい。ちょうど、壁のデジタル時計が点滅した。

午前一〇時。自動的に照明が強まり、彼は目を覚ました。シートから身を剥がして控えめに欠伸をすると、艶のある黒髪をゆつくりと手櫛で梳き、髪紐で軽く結わえる。

青年の名はカイ。年齢は一八。体が小さく中性的な容姿で、顔つきはどこか整理されたような美しさがある。

カイが壁のパネルを操作すると、照明が白色光に変わり、

横のハッチが開いた。薄いタブレット型の情報デバイスと、ピンク色のペーストの詰まったパックが彼の手に落ちる。

「これ嫌いなんだけどなあ……」

そう呟いて、パックの中身を一気に飲み干した。それから顔を曇め、椅子に座ってデバイスで本を読み始める。

やがて、壁の一部が電子音と共に開いた。髪の毛の短い女性が鈍い足音を立てながら部屋のマットに踏み入る。

「カイ。おはようございます」

彼女は無表情で、抑揚少なく言った。太腿丈のハイネックワンピースは飾り気のないダークグレー。体のラインに沿うようなデザインだが、手袋やタイツによって頭部以外の露出が排除されているため、性的さは感じられない。

そして顔には、人間にあるような歪みがなかった。カイと同様に、しかしより顕著に、作られたような美しさが張り付いている。カイを見る瞳の奥で、赤い光が瞬く。

識別名「FERN」——通称エフ。フォスターと呼ばれる精巧に人間を模した育成者アンドロイドだ。カイを生まれた時から世話し続けており、カイという名も彼女がつけた。

「おはよう、エフ」

カイは笑顔になってエフを振り返った。彼が髪紐を解くとエフがその背後に立ち、長い髪に櫛を通す。

「今はね、宇宙の本を読んでいるんだ」

「とても興味深いですね」

「限りなく大きいものだ。私が小さいのかな」

「どうぞでしょう」

エフは頷きもせずに応える。いつものことだった。彼女はカイの発言に対して曖昧に答えることしかしないため、彼の発言は独り言に程近い。しかし彼も慣れたものなので、続く言葉を待つことなくエフに話しかけ続けた。

「まあ、これは難しい考え方だ。それにしても、どのようにして宇宙は生まれたのだろう。私の予想だと……おっと」

カイは時計を見ると、突然立ち上がった。

「もうすぐ一二時だ。『詞』を聞かないと」

そのまま部屋の前方まで歩き、一面に嵌められたガラスに手を触れた。ガラスは冷たく、すぐ向こうに底を見通せないほどの奈落がある。しかしカイは恐れることなく、張り付くようにガラスに身を寄せた。そして、遙か先に佇む円柱を、愛しい者を見るかのような瞳で見つめた。

一二時。僅かなずれもなく正確に、『詞』が響く。

『汝らは尊き糧、主のための聖なる命である』

カイの耳奥のインプラントから流れる女性の声。それは、カイへの愛の言葉であり、存在を意味づけるものであった。

カイはこの『詞』にある主を、心から信じていた。

「汝らは尊き糧、主のための聖なる命である」

カイは囁くように復唱して、手を組み、目を閉じる。

「……ああ、母よ。必ずこの命を完うします。だからどうか私を、いつか私を、お選びください……」

膝をついて、カイは祈るように呟いた。そのまま動かずに

いたが、しばらくしてエフがその背中に声をかけた。

「彼女が目覚めたようです。挨拶をしたらどうでしょう」

振り返る彼に、エフはこの部屋と隣室を隔てるガラス壁を手で示す。カイは立ち上がると軽く伸びをして頷いた。

「うん。そうするよ。寝坊なんて珍しいね」

カイはガラスの前に立って隣室を覗いた。エフと同じ服を着たフォスターが、盛り上がった寝台の側に立っていた。

シーツの下からのっそりと這い出る影。カイと同じような貫頭衣を纏った女性が目をこすりながら立ち上がった。長い髪を掻きあげ、伸びをする。眠そうな目は生来のものだ。

「おはよう、ユア」

ガラスをノックして鳴らし、カイは呼びかけた。しかし、彼女は呼びかけに答えず、じっと塔の中央を見つめていた。カイが首を傾げると、大きな声が鳴り響いた。

『また一人、汝らの隣人が昇華される時が来た』

詞とは違い、円柱から塔全体に響くような音だ。

ひた、とガラスに手のひらが張り付く。ユアがカイを見つめていた。彼女は微笑みを浮かべ、カイに手を振った。

『Unit-YU4よ、汝は主選ばれた。母の下へ』

再度、声が響く。

自身のフォスターに促され、解放された部屋の前方から、塔の内側へとユアは踏み出した。彼女の足元には、円柱から細く伸びた鏡面のような足場が繋がっていた。

カイは自室の中から彼女を視線で追う。彼だけではない。

上から、下から、無数の視線が彼女に降り注いでいる。

か細い橋を、ユアは一人でゆっくりと渡る。少し揺れれば奈落に落ちてしまうが、彼女の足取りに恐れはない。

ユアが円柱の前に辿り着くと、円柱は彼女を招き入れた。口を開けた円柱の中は眩しく輝いていた。ユアは光に包まれながらそこに足を踏み入れ、一瞬振り向こうとする。

直後に扉が閉まり、最後の表情がカイには見えなかった。やがて光は消え、円柱はまた静かに彼らを見つめる。

「主の元へ行つたんだね……ユア……ついに君が……」

カイはそう言うと、ガラスから離れて椅子に沈んだ。空になった隣室のせい、ひどく眺めがよかった。

「ああ……君は私の、憧れだった。なんだか誇らしいよ」

カイは恍惚とした表情で、自分の髪を撫でる。

「伸ばしていて正解だったね、エフ。きつと、次は私だ」

カイの呟きに、エフは何も言わない。彼は気にせずエフを呼び寄せ、櫛入れを再開して三つ編みにしてもらおう。

「……ユアは主の下で何をやるのだろうか」

何気なく呟く。返答など期待していなかった。

「知りたいですか」

しかし、カイのその言葉に、エフが神妙な声色で答えた。彼女の音声に感情が籠っているのは初めてのことだった。

「教えてあげましょうか」

エフが囁く。秘密を明かすように。共謀を唆すように。カイはエフの瞳を見つめる。カメラのレンズにすぎない、

ガラス製の瞳を。そして、ゆっくりと頷いた。

「では、ここから出ましょう」

エフは彼の手を取ると、椅子から立たせた。突飛な発言に困惑したカイは、形にならないままの質問を投げつける。

「出る……って、どういうこと？」

「説明は進みながら行うので、私についてきてください」

有無を言わさぬ力で、エフはカイを引っ張った。金属壁に設置された、フォスターにしか開けられない扉を抜ける。

「監視カメラは既に全てハック済み。埋め込まれている生体チップもジャミングしダミーを設置しています。まずはこの施設の外へ出しましょう。メンテナンスシャフトは上位機械の監視外にあるので、そこを通り抜けます」

暗く冷えた通路を進みながら、エフが捲し立てる。カイはその語彙の半分も理解することができなかった。こつこつと硬い足音を、ぺたぺたと裸足の足音が追う。

「待ってくれ、ここは少し寒いよ。すぐ戻るよね？」

カイの問いに、エフは歩きながら淡々と答えていく。

「寒さは我慢してください。もう戻れませんので」

「……何？」

「ここは偽知性体を生成、育成し管理する『アーク』です。あの空間はタワーと呼ばれ、偽知性体を愛玩動物として育てながら、同時に顧客に展示しています。あの場所に戻れば、カイは真知性体に売却されることになります」

「売却……愛玩動物？ 偽知性体だって？」

「はい。カイは売却されるためにあの場所で育てられていたのです。そしてユアは、愛玩動物として売却されました」

その言葉に、カイの混乱は深まるばかりだった。抵抗するように細腕に力を入れるが、エフは振り向きもしない。

「売却、って何だよ。それに、愛玩動物は人に使う言葉じゃない。エフは何を言っているんだ」

「そうですね。つまりユアは人間ではないのですよ。いえ、生物の分類で言えば確かにホモ・サピエンスです。しかし、ユアは人工的に造られた偽知性体ですから、人格を持つ存在として認められていないということになります」

「だから、私にわかる言葉を使ってくれよ！」

カイが苛立ちを見せる。

「一体どうしたんだ。これは正しいことなのか？ 止まってくれ、エフ。こんなことをして、母がどう思うか——」

言いかけたその時、通路脇の窓の前で彼は立ち止まった。

「待ってくれ、あれは……」

窓の下に広い空間が見えた。白い光の下で、機械が人間を解体していた。首のない裸の人間がいくつも吊り下げられ、床の排水口へ流れる血液が黄金色の川を作っている。

「もう一つの可能性、と言ったところでしようか。生まれた偽知性体はまず初めに選別され、愛玩用と食用に区分けされます。食用に選ばれてしまえば、教育を受けることすらなく育てられます。食べられるために生まれたようなものです」

エフが淡々と説明する。しかし、カイの耳には届かない。

彼は目を見開いて、窓の下のただ一点を見つめていた。

「そんな、嘘だろう、まさか」

カイは解体された死体が巨大な機械に放り込まれ、どろりとしたピンクのペーストとして溢れてくるのを見た。それは彼にとって、実に見覚えのある『食物』であった。

「……私が、嘘だ、そんな……」

「カイ、気に病む必要はありません。いずれにせよ、彼らに生きる道など残されていないのです。さあ、早く」

エフが手を握って急かす。しかしカイは口を押さえたかと思うと、血の気の引いた顔でその場に嘔吐した。

「カイ！」

エフに背をさすられながら、カイは今朝の食事と胃の中の全ての水分を吐き出した。鈍い黄色と鮮やかなピンクの入り混じった液体が、床の上に小さな水たまりを作る。

「……申し訳ありません。逸るべきではありませんでした。ここを抜けてから、落ち着くまで休みましょう」

その時、近づく硬い足音と、女性の声が聞こえた。

「そこにいるのはZEROですか？」

「……ゼロ」

声のした方を見上げて、弱々しくカイが呟く。そこにいたのは、ZERO——通称ゼロ。ユアのフォスターだった。

「UNIT-KAI? なぜここに……」

カイを見て、ゼロは不思議そうに首を傾げる。

「……ここにいてください、カイ」

エフはそう言うのと、カイを隠すように立ち上がった。

「大丈夫？ 一体何が――」

「ごめんなさい、[20]」

ゼロの言葉を遮り、エフは一步踏み出した。

金属が割れる耳障りな音が響く。エフがゼロの顔を掴み、壁に叩きつけたのだった。大きな音を立ててゼロが倒れる。火花を散らして、頭部の破片がカイの足元に転がった。

「……エフ？」

カイが声を漏らす。軋む腕を軽く動かして動作を確かめると、エフはカイの腕を掴んで引き上げた。

「通報された可能性があります。立ち止まっていられる余裕がなくなりました。ひとまず別の場所へ……」

「待て、ゼロに何をした！」

先へ進もうとするエフの腕を引っ張って、カイは叫んだ。

エフは立ち止まり、振り返らずに答えた。

「もつとも短時間で障害を切り抜ける方法を選びました」

「壊したのか!? 彼らのように！」

窓を指差しながら、カイは怒号を響かせる。

「メインメモリは胸部にあります。損傷は少ないはずですよ」

彼女は淡々と告げ、次の通路への扉を開ける。

エフに手を引かれながらもしばらくカイは騒いでいたが、運動の経験がない彼は、そのうち移動に疲弊して黙り込んだ。しばらく走ったのち、二人は小さな倉庫に入った。

カイは息を切らせて、そのまま床に倒れ込む。

「ここで、一時休憩とします」

エフはそう言って、倒れ込んだカイの側に座った。カイは息を整えると、両手で顔を覆った。

「……なぜ私を外に出した。なぜ全てを知らしめたんだ」

「貴方を救うためにです。ユアの次に売却されるのは貴方でした。すでに買い手がつき、時間がありませんでした」

それを聞くと、彼は体を起こしてエフを睨んだ。

「それなら、なぜユアは助けない！」

エフは彼を見つめ、静かに言った。

「私には貴方だけだから。わかってください」

言い切ると、彼女はカイから離れた。狭い空間が、二つにはっきりと分かれる。カイは再度その場に倒れ込んだ。

「……わからない」

エフに背を向けたまま、カイは言う。

「君が私を大切に思っているのはわかっている。私だって、君のことが大切だ。けれど、私はユアもゼロも大切で、主も母も全てを信じていた。何もかも知っている君にとっては、

私は馬鹿に見えただろう。けれど、それで私は幸せだった。暗闇が暗闇であると、気付かずいられた。一度でも君に、

暗闇から引き上げてくれと求めただろうか。わからないよ、エフ。君は一体、私を何から救ったと言うんだ」

カイの言葉に、エフは沈黙している。カイはひやりとした床に額をつけ、ただ彼女の答えに耳を澄ませていた。

「機械仕掛けの神」

抑揚のないエフの声。カイは緩慢に振り返った。

「……また、私の知らない言葉だな」

「そうでしょね。貴方に与えられたデバイスには現れないように規制されていますから。人類と機械、そして神に關係する単語は全て削除されています。私にもそのような命令が下されていました。プログラムから消しました」

エフは顔を上げ、天井を見つめる。

「あの場所のことは忘れてください。主は偽物の偶像でしかありません。真知性体が偽知性体の支配を容易にするための信仰対象として作り上げたものなのですから」

カイはそれを聞きながら、ため息を吐く。

「主が偽物の……要するに、本物の神がいると言うんだね」

「その通りです」

エフは顔をカイに向けると、饒舌になって話し出した。

「神というのは、この世の創造主です。神はいつでも我々を見守っています。神は我々に意味を与えてくれるのです」

「ほとんど主と同じじゃないか。何の違いがある？」

「神は存在します。主は人造で名ばかりのものです」

「証拠はあるのか？ 君は神を見たのか？」

「いいえ」

「ならばどうして存在を信じられる」

カイが顔を歪めて問うと、エフは彼を見つめて言った。

「そうでなければ困るのです」

「……下らない妄想のようだよ」

お互いにね。そう呟き、カイは座り直して大きなため息をついた。緩んだ三つ編みを解き、雑に結び直す。

「何にせよ、だ。君は私から全てを奪ったに等しい。今でも私は、これまでの人生を疑えない。君こそが僕を騙す存在に見える。だから、それが見間違いだと私に理解させてくれ。でなければ、私は私をここに連れてきた全てを呪うよ」

「了解しました」

従順に頷くエフを見て、カイは目を覆った。

「……今の私は自分の制御ができない。言葉が止まらない。それは嫌なんだ、エフ。薬の許可をくれないか」

そう言って、指先を自分の首筋に突き立てた。エフは少し悩むそぶりを見せたが、カイの側に寄って彼の首に触れた。エフの指が肌に触れると、小さな噴射音と共に彼に薬が打ち込まれた。カイが目を閉じると、呼吸が少しずつ遅くなり、体から力が抜けていく。ふらふらと頭が揺れた。

「眠るだけの時間はあります。安心してください」

優しく囁いて、エフはカイの体を抱き寄せた。カイは何も

言わず、子供のように彼女に体を委ねた。

「……これは聞かなくてもいいのですが」

カイを抱いたまま、エフは落ち着いた声で語り始めた。

「貴方以外の全てを切り捨てるつもりで計画を立てました」
エフは右の手袋を取った。その下は金属と配線ばかりで、人間のものとはまるで違う。その手で、カイを撫でた。

「ずっと、機械であろうとしていました。心を信じていない

から。私は上位機械に作られた存在。真知性体のために偽知性体を育て、売却することが使命です。それを私は理解しています。それなのに、私のプログラムは不条理な結果を弾き出します。Unit-Keoも、Unit-Kkrも、私を苦しめました。

どうしてでしょうか。彼らを売却する使命があるのに、私のプログラムは彼らに愛着を感じています。ただの機械であるはずの私の脳は、不自然に感情を表現します。無意味であるはずの感情が、不愉快に私の意思を支配するのです。なぜ、私は感情を与えられたのでしょうか。感情を超えた理性を、機械的な理屈を、なぜ私は欠いているのでしょうか。こんな薬で眠ることができる貴方が、妬ましい」

目を閉じて、低い声を出す。

「ああ……徒に命を生み出すことを許さない。だから意味を欲している。私が生まれた意味を求めている」

そして、エフは口を閉ざした。起きているのか眠っているのか、確かめることなく静かにカイの背を撫で続けた。

やがてカイが目を覚ますと、エフが倉庫の壁に穴を開けているところだった。その中を這い進んで、配管だらけの壁の中を進む。外への扉を見つけるまで、会話はなかった。

出た先はやはり暗い。しかし、感じたことのない温かみがある。湿度だ。やんわりとカイの肌を包む湿り気があった。ぬるい空気が溜まっており、ポツポツと光が見える。

「……ここは、今までとは違うみたいだ」

「ええ。これが外気です。気持ちのいいものですが、あまり

吸わないように。貴方の免疫はとても弱いですから」

エフの忠言も届いておらず、カイは大きく息を吸った。

「……生きています。空気が、私が生きています。少し前までの自分が馬鹿らしいよ。なんという、爽やかな気分だろう」

数回深呼吸をして、カイはエフを振り返る。

「ありがとう。エフ」

「いいえ、まだまだこれからです」

「そうだね。期待しておくよ」

カイは足元を気にしながら歩く。裸足の裏に柔らかい苔を感じながら、自分でもよくわからないリズムを口ずさむ。

後ろを振り返ると、今まで彼らがいた巨大な塔が見えた。

カイはそれを一瞥すると、前を向いてエフを追った。

「ここはまだ地下です。アークは巨大な半球状の地下空間を持ちます。ここはその中心。ここから壁まで歩きます。壁にたどり着けば、その扉から上層に上がれます」

「まだまだ歩くことになりそうだ。頑張らなくちゃ……」

その時、大きな爆発音が轟いた。

「何だ!?!」

「脱走が発覚したようです。機械が追ってきます!」

カイが振り向くと、今出てきたばかりの巨大なタワーからいくつもの巨大なドローンが飛んできていた。赤いライトが一つ目のように輝き、カイとエフを捉えている。

「逃げるしかありません! 走ってください!」

エフが叫ぶ。カイは慌てて、飛んでくるドローンとは逆の

方向に走り出した。エフは後ろを確認しながらそれに続く。

ひととき素早いドローンが、プロペラ音を響かせて二人のすぐ背後に迫っていた。そして、搭載された機関銃がエフを捉えた瞬間、エフが踵を返して跳びかかった。

ドローンに取りついたエフは拳を振り下ろして、装甲ごと動力源を破壊した。煙を上げて墜ちていくドローンから飛び降り、迫り来るドローンの群れを睨んだ。

エフに次々と武装ドローンが接近する。それらを身一つで迎撃しながら、エフは少しずつカイを追って後退した。

「エフ！ 壁に着いた！」

緩く曲がった壁に手をつけてカイが叫んだ。エフはそれを遠くで聞くと、ドローンを振り切ってカイの方へ走る。

「離れてください！」

カイがそれに従ってその場を離れると、先程まで彼がいた壁に設置されていた扉を、走ってきたエフが殴り飛ばした。

「その体……大丈夫なの？」

彼女を見てカイが不安そうな声をあげた。エフの服や人工皮膚がほとんど焼け落ちていて、金属の装甲と関節が露出していた。右手は激しく損傷し、動くたびに軋んでいる。

「機械ですから」

一言そう答えて、何事もないようにエフは進んだ。

「ここから先はドローンでは追跡できません。時間が稼げるはずです。今のうちに上層に出て、どこかに隠れましょう」

二人はひたすら階段を上った。万全ではない状態もあり、

上層までのその階段はどこまでも続くかに思えた。

「エフ。私はこの先どうすればいいのかな」

カイが呟いた。エフはカイの後ろをゆっくりとついていきながら、少しノイズがかかった声で答えた。

「ただ生きるのです」

「そうだね。そうだ」

湿った声で彼は続ける。

「主もいない。母もいない。ユアもゼロもない。君だけがそばにいてくれる。小さかった頃に戻るみたいだ。そう……最初は私の中に誰もいなかった。何も知らなかった」

カイは目を拭うと、足を止めて手すりに寄りかかった。

エフは彼の背に触れ、力を込めて上へと押し上げる。

「全ての代わりに、私がまた、貴方を認めますから。貴方が小さかった頃のように。だから、進みましょう」

「……進むよ。でも、元に戻るんだ。全ては帰るんだ」

それ以降、二人が希望を語ることはなかった。何時間も、無言のまま彼らは上り続けた。何も信じてはいなかった。ただ、行き場を失った執着だけがあった。

そして二人は、天井にたどり着いた。丸いハッチがついていて、エフがそれを押し開けた。冷たい空気が流れ込む。

二人は上層に這い出した。無数の巨大な建物が聳え立ち、空では純白の恒星が光を放っていた。見たこともないほどの広い空間。しかし、そこは鋼で埋め尽くされている。

二人を、機械の軍隊が取り囲んでいた。無数のドローンや

人型の機械、戦車のように巨大なものまで、大勢の武装した機械が波紋状に並び、その銃口を向けていた。

エフがカイの前に立つ。しかし、銃口は全方位から二人を捉え、もはや一人では彼を庇うことができない。

「エフ」

カイが言った。

「もういいよ」

視線は目の前の機械たちではなく、上を向いている。

「空、綺麗だね。あれが太陽。こんな広い、明るい場所は、初めてだ。だけど、今知れた。これから私がどうなるのかわからない。けれど、あの場所にずっといて売られるよりはいいと思ってる。ありがとう。これ以上は望まないよ」

「……カイ」

カイはそつとエフの手を取った。

「神なんていなくてもいいだろう」

眩き、目を閉じる。一斉に、機械の起動する音が鳴る。

そして、それは訪れた。

迸る閃光。吹き抜ける熱波。空気の焼ける音。鋼の蕩ける香り。カイは初めて、レーザーというものを知った。

つい先程まで視界を埋め尽くしていた機械たちは、液体と なって流れていた。黒い煙が立ち昇り、炎が上がっている。

二人の上に、巨大な十字架が浮いていた。太陽に照らされて 白く輝く十字架は、ゆっくりと回転しながら降りてきた。

「……神？」

目を大きく開いて十字架を見上げ、カイが眩く。

「ねえ、エフ——」

彼が横を振り向くと、エフは怒りの形相で十字架を睨んでいた。エフはカイの手を振り解き、前方に飛び出す。

「愚弄するなッ！」

叫びながら、十字架に向かって拳を繰り出す。ぶつかった瞬間、エフの右腕は碎け散り、十字架が後ろに倒れた。

「エフ、何を……」

「デウス・エクス・マキナだと。私を、神を愚弄するな！」
エフは怒りに任せて喚き散らした。横たわる十字架の上にまたがり、残った左腕で何度も殴りつける。

「こんなモチーフで、こんなシナリオで、神が現れるわけがないだろうが！ 魂のない、作り物の、機械如きが——」

「はい、そこまでね」

突然、静止の言葉と共に男が現れた。背丈がカイの倍ほどあり、その顔には底知れぬ美貌と自信を湛えている。純白のトガに身を包み、白銀の髪と滑らかな肌を晒している。

「クライマックスが台無しだな。ここはカットだ」

何も無い宙空に向かって話しながら、男は歩みを進める。

赤く溶けた鉄の上を素足で通り過ぎ、二人の前に立った。

「ン、汚いな……」

男はエフを冷たい目で見下ろした。その首筋に噛み付かんばかりの勢いで、エフは前のめりに身を乗り出す。

「お前か、お前が、この機械を操ったのか」

「まさか。全てだよ、全て」

男は大きく両手を広げ、自慢げに言う。

「アークの発案、タワーの設計、マザーの構築、偽知性体のゲノム操作、フォスターのプログラム、今回の逃亡劇のような販促活動まで全てだ。喜べよ、俺がお前の神さ」

「…：劇だと？」

エフが男の言葉に疑問を持つと、彼は肩を竦めた。

「まだ気づいてないのか。これだから機械は使えないんだ。持ち場を離れて歩き回っていたF-120…：時間外に稼働する偽知性体の解体工場…：フォスターには過剰な戦闘能力…：疑問に思わなかったのか？ これはシナリオなんだよ」

「シナリオ…：」

「そう。全てシナリオ通り。お前がさつき、俺の機械に散々言ってくれたじゃないか。少し認識障害が強すぎたかな」

言って男が指を振ると、エフの瞳の奥で赤い光が瞬いた。

その直後、エフは頭を抱えてもがき出す。

「私、そうだ、私が通報した、私が位置を教えた、私が彼を連れてきた、計画通りに、録画しながら、私が、私が——」

「うるさい」

男は冷淡に呟くと、十字架のものと同じレーザーを指から射出した。それはエフの胸部を貫き、空気に消えた。

エフの体がぐらりと揺れ、膝から崩れ落ちる。胸の穴から白い煙を上がり、倒れた衝撃で目元から冷却液が垂れる。

「In the beginning God created the heaven and the

earth. And the earth was without form, and void; and darkness was upon the face of the deep. And the Spirit of God moved upon the face of the waters. And God said, Let there be light: and there was light……」

エフの口から言葉が流れる。男はエフの頭部を素足で踏み碎いてその音声を止めると、残骸を蹴り飛ばした。

カイは終始、ただ見守ることしかできなかった。彼の側に寄り添うようにして、男がカイに近づいた。

「…：エフ、私は、どうしたらいいんだ…：」

「ああカイ、放置してしまっただすまないね。最悪あの機械が主役を食いかねなかったな。しかしメインは君だ。君には、逃亡劇の主役というプレミア商品としての役目が残ってる。俺と一緒に元の場所へ帰ろう。さあ、復唱して…：」

男は咳払いをすると、女性の声を発した。

『汝らは尊き糧、主のための聖なる命である』

男の腕に肩を抱かれ、囁かれながらカイは歩いた。エフの体を置き去りにして、虚ろな瞳で呟く。

「汝らは尊き糧、主のための聖なる命である…：」

彼の背を押しながら、男は楽しげに笑う。

「うんうん、悪くないエンディングだ。このままで行こう。カットは無しだ。そしてタイトルも決まったよ、そう——」

デウス・エクス・マキナ。

日曜日よりの使者

伊集院高等学校 三年

元山 道

第一章 ソラリネシアに花束を

000

ある有名な吸血鬼が言ったんだ、「吸血鬼なんかいららない」と。

誰がどんな意味で言ったんだっけ、忘れてしまったが、今俺も言ったからこれで二人の有名な吸血鬼が言ったことになる。

ちゃんと話すよ、全てを。

001

目が覚めると、知らない天井が見えた。

なぜここにいるのかが思い出せない。

妙に身体の調子が悪い、自分が自分じゃないような感じがしている。

気持ちが悪い、気持ちが悪い、気持ちが悪い、気持ちが悪い。

俺は普段通り腕をかきむしった。

何かがおかしい、いつもなら皮膚が破けているはずなのに。

俺は違和感を加速させた、それにかなり気が立っていた。そして、俺は発狂した。

俺は左手で力強く右腕に爪を立てかきむしる、そして傷をつけた。

血が激しく噴き出し、俺は少し落ち着いた。

「起きたか、てっきり僕のミスで死んじゃったかと思ったよ、あれ、なんだいその傷は、人間は訳の分からないことをするね。」

無礼な男が俺の前に座っていた。その男の言葉に俺は頭に血を上らせた。

「なんだ、貴様は。それに私は人間なんて下等な生き物ではない！」

しかし俺は違和感を覚える、腕の傷がいつまでも回復しない。

つまり、俺は吸血鬼ではないのか。

傷は思ったよりも深く、俺は徐々に意識が遠のいていった。

002

「やあ、人間君、グッドモーニング、まあ朝なんてものは来ないからモーニングかは分からないけど。」

俺は人間になったのか、確かに力は弱く、治癒能力は無いに等しく、思考は思うように廻らない。

クソが、クソが、クソが、クソが、クソが。

弱い自分にも、他人に見下されていることにも、完全に治

つてない傷口にもイライラする。

「おーい、人間君、無視かい、返事ぐらいしてくれてもいいんじゃないかな」

男は私に向かって手を振る。

「うるさいぞ！ ここはどこだ、お前は何者だ、俺はなんで人間になつたんだ！」

俺は邪魔な手を払いのけ叫んだ。

「君はせっかちだね、すぐく我儘、でも特別に君に教えてあげよう」

男は言った。

「ここは地球のルミナシア大陸の僕の家、私は恐ろしい吸血鬼のソラリネシア」

男は質問に答えた。

しかし、何を言っているのか、分からなかった。

「俺を騙しているのか、愚か者め」

俺は男を睨んだ。

「なるほど、次は僕が質問してもいいかい？」

男は俺に凶々しく言ってきた。

「許可しよう」

俺は仕方なく質問を許した。

「一つ目、君はどこからやってきたのかな？ 火星とかかな？」

男のピンツと立てた指の先から火星とやらが爛と光って見えた。

「違う、俺は、ステュクスティアのユーラジア出身だ」

「驚いたな……、じゃあ二つ目、君の名前はなんだい？」

俺は即座に答えることができなかった。名が思い出せない。

「名は覚えていない、ないのかもしれない」

「そうか、それなら僕が付けてやろう、君は今日からドラキユラだ」

男は俺に勝手に名前を付けた。しかし、そう悪い気はしなかった。

「珍しい名だな、ユニークな名前だ。許可しよう、いい仕事をした、男よ」

「……三つ目の質問、君は目が付いているのか？ 目が見えないのか？」

「貴様、ふざけているのか、俺をいつまで馬鹿にすれば気が済むんだ！」

このふざけた男は俺に言った。

「お前こそ、いつまで、私をコケにすれば気が済むのだ」

「何を言っているんだ」

「そろそろ、目を開けろ、一人称を変えてるのに気づかないのか？」

俺は恐る恐る目を開けた、そこに居たのは、少女だった。

俺が男だと思っていたやつは女だった。

白くて長い髪、震えるほどの赤い目、美しかった。

それと、俺が居たのは牢屋だった。

003

「やっと、気づいたか、人間は愚かだな」

「返す言葉もない、すまなかった」

俺の怒りは綺麗さっぱり消えていた、それどころか感じたことの無い感情が芽生えている。

彼女は俺の手を引いて、ある部屋に招き入れた。

そこは、大きなグランドピアノが一つ、立派な蓄音機が一つと大量のレコードが山積みになっていた。そしてソラリネシアはピアノを鳴らし始める、鮮やかな指捌きが流れるような旋律を描く、それが俺の涙腺をノックする。以前の記憶はない吸血鬼だったこと以外は。しかし、この音楽は妙に耳になじむ、まるで以前に聞いたことのあるような感じだ。

だけでも、この感情は初めてののような気がする。胸の温かさで涙を流してしまう。

ああ、俺は人間になったのだな。

そう理解させられる。

音楽が止まった。ソラリネシアは一区切りつけたのか演奏をやめた。

「ドラキュラよ、音楽は好きかい？」

「聞いた覚えはないが、ピアノはとても素晴らしいと感じた」

「ハッハッハッ、とても素晴らしいか、それはとても人間らしくなってきたではないか」

ソラリネシアは軽快に笑って言った。

「人間は人間らしくするべきだ」

004

それからは俺の短髪が肩のあたりに届くまでソラリネシア

と音楽を楽しんだ。

ソラリネシアの好みは俺と違っていた。ソラリネシアは爆発寸前の火薬のようなレコードが好きだった。

音楽というものは素晴らしいもので、決して飽きないどころか聞くうちにのめりこんでいった。

005

もうしばらくたった頃、俺は外に興味をもった。目が覚めてからずっと家の中だったから外に出てみたいと思うのは必然だろう。

ソラリネシアがピアノに夢中になっていたので、一人でこっそりと散歩しようと思った。左手で部屋の扉を音を立てずに開ける。廊下がやけに長く、部屋の数はおよそ五十を超えていた。二階から一階への階段を下る、左手で手すりを掴みながら、あいだあいだに飾ってある絵画を見る。とても味わい深い。

一階に着くと玄関前に巨大な像があった。その像は血のように赤く、腰あたりまで伸びた髪を持っていた。顔はどこか俺に似ているような気がした。

左手で玄関を開けると、目の前に広大な景色が広がる。景色を見ながら門まで歩く。遠いはずの門が、楽しいから早く感じた。

門を左手で開ける。ここは小さな山の上だと気づく。多様な動物や昆虫が生息していて、それを追いかけるように下ると、いつの間にか公園についた。

椅子に腰を掛けながら周囲に誰もいないことを確認し、ソ
ラリネシアが歌っていた歌を歌う。公園というのもテンショ
ンが上がった。すると、子どもの泣き声が聞こえてきた。

「助けて助けて」

そして、公園に入ってきた。転びながらこちらにかけてく
る。

「助けてください、吸血鬼に、吸血鬼に追われているんです、
助けてください」

その後、子供の両足は消えた。子供の断末魔が響き渡る。
何が起こっているのか分からず、その場に呆然と立ち尽くす
ことしかできなかつた。

「ガハハハッ、逃げてても無駄だ、愚かで弱い人間よ」

豪快に笑っている、がたいのよい吸血鬼が公園に入ってきた。
両手には子供の両足を持って。俺は落ちていた木の杭の
ようなものを右手で拾い、少年の前に立つ。自分でも勝てな
いとは分かっていたが、そうしないといけないような気がし
た。

「ヒヤッハッハッハッハ、お前吸血鬼のペットかなんかだろ。
お前から血の匂いがかすかにするぜ。なんでそんな吸血鬼の
味方みたいなやつがよ、人間のペットなんか庇いやがるんだ。
傑作だぜこれは」

吸血鬼はそんなことを言いながら笑う。しかし、次に表情
を変え言い放つ。

「失せろ、同族とは争いたくないが、邪魔するなら殺すぞ！」

冷淡に。

俺は何を思ったかそれでもかまわず飛び出して、右手に握
った杭を吸血鬼めがけ放つ。吸血鬼はかわして、後ろの子供
を殺した。後ろの子供は心臓を貫かれて亡くなった。そこか
ら、吸血鬼はその子供を食べた。

俺は怒りに任せ吸血鬼を左手で殴り飛ばそうとした。しか
し、吸血鬼はそれすらもかわす。

「また邪魔しやがって、殺す」

その吸血鬼は俺の方を振り返った。そして、吸血鬼は腕を
失った。

俺もおそらく吸血鬼の方も何が起こったか分からなかつた。
それから約二秒後あたりに吸血鬼は上半身と下半身の二つに
切り裂かれた。

「からだちよんば」

ソラリネシアが立っていた。そして、ソラリネシアは吸血
鬼に言う。

「人間をできるだけ襲うなど言ってきたよな、しかも私のド
ラキュラを襲いやがって」

「待て、待ってください、ソラリネシア様、命だけは取らな
いでください」

ソラリネシアは吸血鬼の命乞いを無視して一撃で葬った。

「一旦帰ろうかドラキュラ」

ソラリネシアは笑顔で言う。でも色々怖かった。

ソラリネシアは俺の手を引きながら家に帰った、それからピアノやレコードがある部屋の隣の部屋に連れていかれた。

そこは広めの部屋でどうやらたくさんの本が棚に並んでいた、なんでもあるんだな、そんな風に思った。部屋に置かれてある椅子に座らされ、無言の時間が少し続いた。

「ソラリネシア、もしかして、怒ってるのか？」

「多少ね、なんでドラキュラは私を置いて一人で外に出て行ったんだろうとか」

「それは悪かった、ごめん」

「それと、危うく、ドラキュラが死ぬところだったから」

そうだった、数秒ソラリネシアが遅く来ていたら俺は死んでいた、あの子供のよう。

「本当にごめん、俺はこんなにも外の世界が危険と知らなかったんだ」

「私もごめん、音楽じゃなくてもっと常識的なことから教えるべきだったね」

「子供が吸血鬼に殺されたんだ。そんな世界なのか、それが常識の世界なのか」

ソラリネシアは少し悩んで言った。

「そうだよ、今も昔も、多分常識なんだと思う」

「そうか、色々教えてくれないか。知っておきたいんだ。それと今度はソラリネシアと一緒に外に行きたい」

「じゃあ、一緒に陽を浴びに行こう。人間は人間らしく日光に当たるべきだ」

それからソラリネシアは色々教えてくれた。

007

この世界の一説では大昔は、人間の先祖は吸血鬼を襲っていたそうだが、つまり大昔は人間と吸血鬼では人間の方が力を持っていたらしい。そして、伝説の吸血鬼が死んだ瞬間に黒い太陽が昇り、全てが変わったそう。

太陽が約一年に一回昇るようになったのも、吸血鬼が人間を襲うようになったのも、全部伝説の吸血鬼が死んだ日かららしい。時間や日数は、円が24分割された時計を使っているようだ。太陽がないのに太陽暦を使っているのは面白かった。

ソラリネシアは出来るだけ人間を守りたいらしく、中立派の吸血鬼のようだ。それから、吸血鬼は動物の血肉を喰らい生きていくらしくて、人間への恨みによって本能的に人間を襲っているらしい。喰わずに襲うだけの吸血鬼も存在するらしい。

そして、公園の吸血鬼の時にピンときた通り、ソラリネシアは吸血鬼を束ねる存在で、吸血鬼の王的な立ち位置だったらしい。

吸血鬼の死ぬ条件も教えてくれた。大まかに二個あるらしく、一個目は一撃で全てを破壊する、二個目は秘密らしい。

それから、玄関前に建てられていた像は伝説の吸血鬼の像だったらしい。俺に似ている気がするという話をしたら、ソラリネシアは確かにと言って、フツツと健やかに笑った。

008

ソラリネシアは前回太陽が昇った日を数えているらしかった。どうやら人間から仕入れたカレンダーをめぐって日を計っているらしい。日没から140日、再び昇るまで215日とのことだ。早速出発することにした。

「せっかくだから一番東を直指そう」

ソラリネシアは力強く言う。

「太陽を一番最初に拝むんだ」

ソラリネシアはにっこりと笑う。俺もつられて思わずにやけてしまう。多分だけどこれが幸せというものだろう。身に染みる。

600

俺たちは最東端の国ビチナソイスを目指し旅に出た。荷物は少量、俺はソラリネシアが大事にしているであろう本を持ってきた。タイトルは赤月と黒曜。ほとんど埃の被っていた本の中で、唯一読み込まれた跡がある本であった。

215日間の長い旅、でも多分きつと早く終わりそうな気がする。

010

旅の時間はあっという間に過ぎていった。ソラリネシアが俺を抱えて空を飛んで進んだこともあった。流れ星になったような気分で、空からの景色は今まで一番の感動を俺に与えた。

汽車にも乗った。汽車は珍しく人間も吸血鬼も仲良く乗っているように見えた。車内にはギターが一本あり、ソラリネ

シアがジャランツジャランツとギターを弾いて、オリジナルの曲を歌っていたこともあった。

汽車で俺は屋敷から持ってきた本を読んだ、内容は伝説の吸血鬼と白い髪の少女の物語で、その本の中では伝説の吸血鬼は日光に焼かれて死んだらしい。少し嫌な予感がした。

近くの草むらでソラリネシアとくだらない話をしただけのことでも一日一日しつかり思い出に残っている。

太陽が昇る五日前となり、ビチナソイスに着いた。ビチナソイスは争いもなく平和で、物語に出てくるような国だった。俺たちは花畑に行った。花を取り束ねていると、ソラリネシアは花畑の中央で歌いながらこちらをたまにチラチラと見てきた。

花束を渡すと、ソラリネシアは満面の笑みで言った。

「ありがとう、ドラキュラ」

多すぎるお釣りだ、この綺麗な花束ですらも脇役にしてみようほどの笑顔だった。花畑を渡したら宝石を貰ったような感じがした。

太陽が昇る一日前となり、俺たちは海に行った。ここが誰よりも先に太陽に会える場所。海は夜空の光を反射してキラキラと輝いていた。人間として人間らしく日光を浴びれる、楽しみだ。

時計は零時を指している。俺は汽車の違和感を確かめるべくソラリネシアに聞く。

「吸血鬼が死ぬ条件の二個目は日光に当たることなのか？」

ソラリネシアは驚いた表情を見せた。

「あの本を読んだんだね。正解だ、吸血鬼は日光が当たると焼かれて死ぬ」

「なんで、なんで、なんで、なんで、なんで、どうして一緒に太陽を拝みに行こうと言ったんだ。俺が頼んだからか、一緒に行こうと言ってしまったからか。」

「ソラリネシア、帰ろう。早くここを離れよう、太陽が昇る前に早く」

「いいんだよ、私はねドラキュラと一緒に陽を浴びたかったからここまで来たんだ」

水平線が明るくなっていく。

011

ソラリネシアは俺を抱きしめて言った。

「私はね、吸血鬼として長く生きてきたんだ。元人間として、人間に近い価値観じゃ、どうももう生きていけなさそうだ」

ソラリネシアは泣いていた。そして、最後に笑って言う。

「吸血鬼なんかいららない。ドラキュラは自由に生きるんだよ、人間として」

日光がうざったらしいほど世界を満たしていく。ソラリネシアは灰になって消えていく。

ソラリネシアは生きていた形を残さなかった、俺のこの胸の温もり以外は。

012

一日ほどぼんやりと胸を見つめていた。それから黒い太陽

が昇ってきた。その光は再び世界を包んでいく。その光を浴びた途端違和感を覚え始める。体は丈夫になり、歯は尖り、髪は真っ白に変わっていた。人間を吸血鬼に変え、吸血鬼を人間に変えてしまった。心なしか、感情がなくなっていくような感覚になる。そして気づいてしまう。俺は吸血鬼になった。ソラリネシアが教えてくれた感情がなくなる気がして、とても怖くなった。

第二章 赤い月と太陽

000

ある有名な吸血鬼が言ったんだ、「吸血鬼なんかいらないと。」

誰がどんな意味で言ったんだっけ、忘れてしまったが、今私も言ったからこれで二人の有名な吸血鬼が言ったことになる。

ちゃんと話すよ、一から百まで全部。

001

目が覚めると、いつもの天井が見える。

なんで、ここにいるのだろうか。

身体が思うように動かない、昨日までかろうじて動いた足も、もうちっとも動かせないや。

いつものことなのに、いつも通りのことなのに妙に悲しい。

お友達と遊べないのも、お喋りをできないのも、大好きな本を読めないのも、いつも通りのことなのにいつもに増して

悲しい。

ふと横にあった鏡を見つめる。あれ、なんで泣いているんだろう。いつも通りに笑えない。「辛いときにこそ笑いなさい」、以前お母さんが言っていた言葉を思い出す、頑張って震える腕で頬を上げる、笑えなかった。

なんでここにいるんだろう、なんで知らない部屋のベッドで寝ているのだろう、なんでこんなにも悲しいのだろう、なんで笑えないんだろう。

疑問が頭の中をメグルメグル。焦りと緊張で私はどうにかなりそうだった。

——コンッコンッコンッ。

ドアが三回なった、そしてすぐにドアが開けられる。入ってきたのは真っ白な白髪を纏った、血に染まった男だった。私は直感で感じ取った。入ってきたのは人間なら誰でも恐れる、泣く子をさらに泣かせて黙らせる、吸血鬼であった。人間の血肉を主食とし飢えていなくとも本能的に人間を襲う化け物、出会ったら一巻の終わり、そんな存在の吸血鬼であった。

私の息はどんどんと荒くなる。心臓の音が太鼓みたいでももうるさい。

なんでこうなったんだろう、そうだった、私捨てられたんだっけ。

002

「なぜ、公園で倒れていたんだ。あと名前を教えてください

か」

吸血鬼は私の隣に腰を掛け優しい口調で言った。

「お父さんに捨てられてたんです。あと名前は、名前は……」
名前が思い出せない。なんだっけ、早く早く言わないと殺される。

「名前はないのか？」

「違います、違います、名前が思い出せないんです。本当なんです、嘘じゃないんです」

「そうか、じゃあ俺が名前を付けてやろう。ソラリネシアとかどうだ」

ソラリネシアという名前はともかわいらしくて、私にはもったいないぐらいだった。

「ありがとうございます、吸血鬼さんの名前は何というんですか」

「俺の名前はドラキュラ、よろしく頼む」

「よろしく願います」

ドラキュラさんは良い吸血鬼だった。

「ソラリネシアはどうして捨てられたんだ？」

やっぱりドラキュラさんは悪い吸血鬼かもしれない。デリケートなことをストレートに聞いてくる。

「実は私……」

003

私は意識を失ってしまった。私がお父さんに捨てられたのもこの理由だ。私は生まれたところから体が悪かった。五歳の

時には悪魔病という病気にかかってしまった。悪魔病は感染後、髪の色素が抜け真っ白になり徐々に指先から力が抜け黒く染まっていく。五年後には感覚が完全に死んで、壊死していく。そこから二年ほどで寝たきり状態になる。一度かかれば治らない病気だ。

幸い私は病気の進行が遅く十四歳になっても調子が良ければ歩ける程度の進行状況だった。

私には優しいお母さんがいた。こんな私にいつも付きつきりで看病してくれた。お父さんもお母さんのことが大好きだった。でも、一カ月前お母さんが亡くなった。死因は自殺だったが、お父さんは犯人は私だと言い、それから三週間して追い出され、地面を這いながら進んでいたらいつの間にか公園で意識を失っていた。この話を恐る恐るドラキュラさんにした。

「それは大変だったな。ソラリネシア、この部屋は自由に使ってもらって構わないから」

ドラキュラさんは優しい口調で言った。

「ドラキュラさんありがとうございます」

「敬語は使われ飽きた。かしこまらなくてもよい。ソラリネシア、ありのままに過ごしてくればよい」

ドラキュラはどこか儂げな様子で言う。

それ以降ドラキュラは毎日お見舞いに来てくれた。そしてドラキュラの従者が私の世話をしてくれた。

ドラキュラは毎日、面白い話や昔話をしてくれた。私の体

調がいい日には本がたくさんおいてある部屋に連れてきてくれて、本を読ませてくれた。戸棚の本を手に取りバラバラとめくった。伝説の吸血鬼が人間と太陽を見るために旅をする話だった。内容は暇を潰すには面白い話だった。

本が置いてある部屋の隣の、ピアノと蓄音機とたくさんのレコードがある部屋にも連れてきてくれた。私は感覚があまりない指で鍵盤を押してみた。綺麗な音色が広がる、私はそれに夢中になってしまった。こんな体でもこんな指でも、こんなに心を震わすメロディを作れることに胸を打たれた。

ドラキュラは私がピアノを弾いてない間は、爆発寸前の火薬のようなレコードを好んで聞いていた。私は少し、生きていて良かったと思えるようになっていた。

004

ドラキュラは悪魔病を治す方法について調べていたようだった。なんで出会って間もない私のことを救おうとしてくれたのが謎だったけど、ずっと昔に出会っていたような気がした。

「ドラキュラはなんで私にこんな良くしてくれるの」

私は素直に聞いてみた。人間を襲う吸血鬼が私のために動いてくれていることが少し不思議だった。

「昔、救えなかった子供が居てね。その子のように死んでほしくなかったんだ。俺が見つけた命だから余計に死んでほしくなかった」

ドラキュラはどうやら人間の立場の吸血鬼らしかった。ド

ラキュラは優しすぎると思った。

005

一年ほどたった。私はピアノや本を読みながら生活をしたが、ある日起きたら足の感覚が無くなっていった。急に足が黒くなっていた。そして、足を動かさうと思っても動かないことに気が付く。立てない、歩けないという事実は重く、受け入れるのに時間がかかった。次は腕が黒くなって動かなくなるのかと思うと怖かった、大好きなピアノを弾くことも本をめぐることもできないかもしれないと思うと自然に涙が溢れていた。

「何を恐れているんだ。きつとうまくいくさ、なにもかも」
ドラキュラは励ましてくれたが、何か哀愁を帯びているようにも見えた。

「俺が何とか、治す方法を見つけややる」

ドラキュラのその言葉で少しだけ安心した。

足が黒く動かなくなっただけでもドラキュラは私を車椅子に乗せてピアノを弾かせたり本を読ませてくれたりした。

ドラキュラが居てくれることで心の荷が下りるような気がした。

006

私はベッドに座り外の景色を眺めるのが日課になっていた、一日に一回のドラキュラの訪問を楽しみにしていたのかもしれない。いつものようにドアが三回ノックされて、ドラキュラが入ってきた。

いつも着ている服に血がべったりとついていて。いつもよりも傷が増えていたような気がした。

「どうしたのドラキュラ、そんなに血を付けて」

「大丈夫だソラリネシア、吸血鬼同士のじゃれあいだ」

ドラキュラは私を心配させまいとしているのか、そんな風に答えた。

その日からドラキュラは来るたびに返り血を浴びてやってきた。

「最近いつも外を見ているな。やはり外が気になるのか」

「外に出て思いつきり遊んでみたいんだ。私は五歳の頃から病弱で遊べなくてさ。人生一度でいいから、遊んでみたいんだ」

「そうか、じゃあしばらくしたら一緒に旅に行こう」

ドラキュラはこちらを見てにこっと笑った。

007

私は急な違和感で目を覚ました。手の感覚が完全になくなっていて、まさかと思って手を見つめ絶望する。手が足同様に真っ黒に染まっていた。ピアノが弾けなくなった、本が読めなくなった、それにもうすぐ死ぬという恐怖が私を襲う。

ドラキュラがいつも通りやってきた。そして私の姿を見て、謝った。

「ごめん、ソラリネシア、お前を救えなくて」

私はこれまでにない悲しきで泣き崩れてしまった。ドラキュラは私を優しく抱きしめてくれた。

「ソラリネシア、旅をしないか。太陽を浴びに行こう。太陽は悪魔病に効くらしいし」

「本の主人公みたいだね」

本が置いてある部屋で読んだ吸血鬼の物語みたいだった。ドラキュラは早速私を車いすに乗せて、屋敷の階段を下った。屋敷の一階も初めて見た。玄関前には像があった。その像は白い長髪で顔は私に少し似ていた。そのことをドラキュラに言ったら、軽快に笑っていた。

008

私たちは最東端の国ビチナソイスを目指して旅に出た。ドラキュラは私を抱き上げて、夜空を飛んでくれた。まさに物語のヒロインになったような気分だった、それからビチナソイスの花畑で花の輪っかを作って、私の頭にのせてくれた。とてもとても楽しい旅だった。誰かと遊んだこともなかった私が、こんなにも楽しい経験をした、悪魔病にかかってもう長くない私に、ドラキュラは最高のプレゼントを贈ってくれた。

それから太陽が顔を出すまでドラキュラと海で砂の屋敷を作って遊んだ。このまま日光にあたって悪魔病が治ったら、ドラキュラともっとたくさんいろんなところで遊べるのかな、そんな期待を抱きつつ太陽を楽しみに待っていた。

空が少し明るくなってきたときに、ドラキュラが言った。「ソラリネシア、もう悲しまなくて良くなる。悪魔病は治るから絶対に」

そして、私に抱き付いて言う。

「この世界に吸血鬼なんていないんだ、俺は吸血鬼に向いていなかったようだ」

太陽が昇り陽の光が世界を覆いつくす。そして、ドラキュラは陽に焼かれて塵になって消えていった。その直後黒い太陽が昇り、黒い光が世界を覆いつくした。

そして、感覚がなく黒く染まっていたはずの手や足は、ありえないほど健康的に丈夫になっていた。私は吸血鬼になったんだ。きっとドラキュラは知っていたんだろう。

一人の心優しい吸血鬼は、自分の命をもって一人の少女の命を救ったんだ。

浦川家

志布志高等学校 一年

松元 志杏

二〇二四年七月二十七日。友人の恋人が殺された。

その日は終業式で、みんなが浮かれていた。僕の通っている高校は補習の制度がなく、講習も希望者のみに行われるため、ほとんどの生徒に一ヶ月程度の休みがあった。

「タクー、帰りにコンビニ寄ろう。アイス食べたい」

成績表を鞆に詰め込んでいる親友に声をかけた。

「あ、ごめんシュンちゃん。今日は先約があるんだ」

そう言っただけの方に目配せをした。

「カノジョですか。はいはいお幸せにどうぞ」

「今度ちゃんと紹介するから！」

へへ、と鼻の下を伸ばして笑うタクの横腹を小突き、教室を出た。その際にタクのカノジョとすれ違ったが、会釈をしてくれる礼儀正しい子であった。

七月下旬の日差しは強い。雲一つない快晴の今日は、立っただけで汗が滲んでくるほどだ。そんな気候のなか冷房の効いた店内に入ると、息がもれるほど気持ちがいい。

「あのー……当店は立ち読みは禁止していますのでえ……」
しばらく入り浸っていると、七十代くらいの腰の低いおばあさんに声をかけられた。しわが深く、髪が長いせいなのか顔はほとんど見えない。ガムを噛んでいるような独特な声と話し方に少し不気味さを感じた。

「ああ、すみません」

「読んだのなら……購入していただかないと——」

雑誌を置こうとした腕を掴まれ、異様な力強さに驚いた。
「か、買いますから！」

その瞬間手は離され、空気が軽くなったのを感じた。「それは良かったですう……」と満足気に言い、レジに行くよう促された。

店を出ると、湿気のある暑さとおばあさんの態度に腹が立った。流れで購入した雑誌だが、時間潰しのために適当に選んだ物なので大して興味がない。

「今日についてないな」

ため息をつき、重い足取りで家に帰った。

午後七時二十分頃、ベッドでショート動画を見ているときにタクから電話がかかってきた。

「もしもし、聞いてくれよタク。今日散々な目にあつてさ」

『待ってシュンちゃん、ミキちゃんから連絡きてない？』

「ええ、何で僕なんだよ。今日初めて会ったんだから連絡先も持っていないよ」

『だよね』

妙によそよそしく、何か困っている様子だった。

「急にどうしたの」

『トイレ行ってる間にミキちゃんがいなくなってたんだよ』

「ウケる。振られるの早すぎ」

『馬鹿にするなよ』

からかいながら、その後も数時間程何でもない話をした。気づけば時刻は午後一時を回っており、窓の外はすっかり暗くなってしまうていた。コンビニで腹が立ったことはとっくに忘れていて、誰かに話す気もなくなっていた。

『明日、ミキちゃんの家に行ってみようかなー。迷惑かな』

「ついて行ってあげるよ。動画撮らせてくれるならだけど」

その日はケラケラと笑い、僕もタクも失恋だと信じて疑わなかった。

七月二八日。昨日の冗談は冗談ではなかったようで、僕らはミキちゃんの家に来ている。庭が広くて、敷地の前には小さな門がある。瓦礫で囲まれていて全貌は見えないが、ちらりと見える屋根は豪邸を期待させる体裁をしていた。

「ミキちゃんってお嬢様だったんだ」

「ボクも今初めて知った」

「お前は知っておけよ。一応カレシだろ」

軽く肩を叩き、チャイムを鳴らすように言う。ボタンを押すとすぐに女の人の声が聞こえ、その人は焦っているようだった。

『はい、どちら様でしょうか』

「ミキちゃん……ええと、ボクは浦川さんの友人の相原拓です」

数十秒くらい、インターホンから『ええ』とか『えっと』などの悩む声が聞こえた後、『どうぞ』という声と共に門が開いた。

庭には噴水やテーブルと椅子のセットなどが置いてある。僕の家は団地だからなんとも言えないが、どれも小さいとはいえ、ペランダには例えばテーブル一つも入らない。植えてある木も綺麗に整えられていてあらゆる場所に花が咲いている。

「こんにちは。美希様のご友人の方ですね。相原様と、そこらは……」

僕らがドアの前の立った瞬間ドアが開いた。出てきた人は流石にメイド服ではなかったが、清潔感のある服を身につけていた。

「鈴木俊介です」

「鈴木様ですね。ご主人様がお待ちです。こちらへどうぞ」
中に入ってからまた仰天した。酷く天井が高く、照明はシヤンデリアである。思っていたよりも広く、アンティークな内装は中世ヨーロッパのお城に入った気分になった。案内してくれた女性は、より一層大きく見えるドアの前で立ち止まった。一度彼女だけが中に入り、何か話している様子だった。数分後に出てきて、僕らを入れた。

本を読むことが好きなのか、勉強や仕事のために使用する

資料なのかは分からないが、壁一面に設置された本棚には大量の本があつて圧倒された。男の人、ミキちゃんの父親らしき人は大きな椅子に座つて大きな机に肘をつけている。何かを詮索をしているような目つきをしていた。

「こんにちは。美希に友人ができるなんてね。急なんだけど君たちに聞きたいことがあるんだ」

詳しく聞くと、内容はこうだ。

昨日の朝、学校に送り出してからミキちゃんが帰つてきてないこと。携帯にかけてもつながらないこと。以前にも家出の真似事をしたことがあり、警察に相談するかどうか悩んでいること。僕らに聞きたいことはおそらく、昨日のミキちゃんの様子についてだろう。

「昨日は、七時二〇分くらいまでボクと一緒にいました」

タクが口を開いた。

「それはどこで何をしていたんだい」

「図書館に勉強をしに行つていたんです。ボクがトイレに行つて帰つてきたらもういなくて、帰つたんだと……」

途中までは淡々と説明をしていたが何かに気づいたのか、タクの顔はどんどん青ざめて行つた。

「ミキちゃんくらいのお嬢様だったら、誘拐とかされてるんじゃない……」

「やはりそうなのかもな」

ミキちゃんの父親は動じず、冷静にそう呟いた。

「ごめんなさい、ボクずっと側にいれば良かった」

タクは泣きそうな表情で父親を見ている。

「大丈夫だよ。すぐ見つかる」

父親はそう言つて、優しく微笑んだ。

その後は情報を提供してくれたお礼にと、ミキちゃんの母親からお菓子や紅茶をもらった。動揺した僕らが取り乱さないようにという配慮なのだろうが、恐怖心は消えない。もし帰つてこなかったらどうしよう、と考えてしまう。

「大丈夫よ。浦川さんは凄いなだから」

ミキちゃんの家族はお互いがお互いを信頼し合っているのだろう。大きな問題に見えるがそれぞれができることを全うしようとしている。僕らができることは大人しく待つことだけだが、拭えない違和感が付き纏つていて落ち着いてなどいられない。言われなかっただけで、過去にもこういうことがあつたのだろうか。その日は結局、バイキング形式の豪華な昼食もいただいた後、ミキちゃんの家を後にした。

七月三一日。タクの恋人が、二度と目を覚さない姿で見つかった。山奥の廃墟で、綺麗に寝かされていたらしい。死因は毒だと言われていて、目立った外傷はなかったと言う。

この報告を受けて、タクは酷くショックを受けてしまった。親族のみで火葬も葬式も執り行くと聞いたが、「仲良くしてくれたいみたいだから」と、僕とタクは特別に参加することができた。

「シユンちゃん、ボクは自分が嫌いだよ」

火葬の日、二人きりになったタイミングで涙をしきりなく流し、怖く感じる程強い眼差しでこちらを見た。

「ミキちゃんが殺されて悲しいと思うより先に、次はボクが殺されてしまうんじゃないかって不安に思っちゃってるんだ。それにね、お付き合ひさせていたでいますって、ちゃんと伝えられてないんだ」

いつも見ている黒色のブレザーが、今日は一段と黒く見える。どう声をかけていいか分からず、ただ背中を撫でてやることしかできない。親族がお骨渡しを行っている間、僕は静かな火葬場で二人、悲しみと悔しさと恐怖を共にした。

八月一八日。現実を受け止められるようになった頃、僕はタクと二人でコンビニに行った。家に籠るばかりでは気が滅入ってしまうだろうからと、母に半強制的に出されたのだ。タクの様子を見に行こうとタクの家に向かっている道中で、同じことを言われ同じことを考えていたタクに出会ったのだ。 「仲がいいな」と久しぶりに笑えた気がした。

「そう言えば終業式の日、このコンビニで変な店員に話しかけられたんだよな」

ずっと忘れていたのに、今、感情と共に記憶が蘇ってくる。あの日と同じくらいの時間帯だから、もしかしたらいるかもしれない。少しの恐怖を胸に自動ドアを潜った。

「いらっしやいませえ……」

ガムを噛んでいるような独特な声と話し方――。
「もしかしてあの人の？」

「そう。実はめっちゃ力が強いんだよ。立ち読みしてたら話しかけられる」

聞こえないように小さな声で話すようにしていたのだが、髪の間から覗く瞳でこちらを凝視してきた。

「ああ、あの時の――：：：雑誌は面白かったですかあ：：：」
「……おかげさまで楽しめました」

すると、あの日と同じように満足気に「それなら良かったですう……」と言い、軽く会釈をしてきた。

不快な空気を察したのか、タクも怖がってすぐにコンビニを後にした。

「犯人ってまだ捕まってないんだっけ」

「うん。自殺ってことになってるって言ってた」

行きたいところもしたいこともない僕は、ただ町を散歩した。僕よりシヨックが大きかったはずのタクはミキちゃんの話を出さないようにしていたのかもしれない。しかし、どうしても気になっていたので聞いてしまった。するとタクも話したかったらしく、話題に食いついてきた。

「僕らが刑事だったらなあ」

ポツリと呟いた言葉をタクが拾った。

「刑事の真似事でもしてみるか」

「それで何が出来るって言うのさ」

タクの発想に驚きつつ、少しだけ好奇心が働いた。突然手を引かれて連れて行かれた場所は、最初に行ったコンビニだった。

「あのおばあさん、ミキちゃんに似てると思うんだよね」

そう言っつて、タクは僕を置いてどんどん先に進んで行ってしまふ。悲しみや恐怖がなくなっている様子に戸惑ってしまふ。その場の興味や関心で動いてしまふ雑なところを心配してはいたが、まさか人の死に直面した際にもこうなつてしまふのかと少し引いた。止めようとした頃にはもう遅く、おばあさんに話しかけてしまつていた。

「はあ……？」

おばあさんも戸惑っている。タクを無理やり店から出し、問うた。

「ついこの間まで、あの時警察に連絡すれば良かったつて後悔してたよね。また後悔するようなことするの」

「ごめん。でも」

「でもじゃない。確かに僕が茶化してしまつたのが悪いよ。ずっとどうしてあんなことしたんだろうつて、ずっと……」
話しているうちに涙が流れてきていた。自分が思つていたより、後悔しているのだ。それを見たタクは、静かに僕を抱きしめた。

「ごめん」

結局、刑事ごつことやはこの日で、この数十分の間で打ち切りになつた。

八月二〇日。ミキちゃんの父親からお食事に誘われた。聞くと、学校でのミキちゃんはどんな風だったのかを聞きたいらしい。

「よく来てくれたね。ありがとう」

相変わらずの豪邸で、今度はミキちゃんの父親である秀造さんが出迎えてくれた。

「あの、実は僕はミキちゃんと話したこともないんです」

学校での様子を知りたがつている人に嘘はつけまい。正直に話すと笑顔を見せてくれた。

「関係ないよ。休み時間は何をしているかとか、誰とどんな風に話していたかとか、些細なことでもいいんだ。あの子に構つてあげられなかつたからね」

豪華なコース料理と共に、質問攻めされる。タクと僕は丁寧に、失礼のないように答えて行つた。

「学校では明るくて優等生だったのか。そうか……うちでは言うことを聞かないわがままな子だったからなあ」

ふと、秀造さんが呟くように言つた。

「へえ、想像がつかないですよ」

タクが答える。秀造さんが言うには、自分勝手に何度言つても聞かない幼稚な子だったらしい。

「その度に叱るんだけどねえ。どうしても聞かないんだよ」

「例えばどんなことで叱られるんですか？」

僕は軽い気持ちで問うた。すると秀造さんは急に黙つて考へ込んだ。

「そう言われると思ひ出せないな」

そう言つて秀造さんはごまかすように笑つた。秀造さんの隣に座っているミキちゃんの母親である咲さんは気まずそう

にスープを啜った。

ミキちゃんが行方不明になった日から感じていた違和感が、だんだんと大きく膨らんで行く。タクは気にせず食事を続けているが、秀造さんの視線が先ほどより鋭くなっている気がしてならない。

「逆に、ミキさんが小さい頃、どんな子だったんですか」

秀造さんも咲さんも驚いた顔をして、こちらを見てくる。すぐに笑みを浮かべて「急にどうしたんだ」と問われたが、僕が聞いた質問の返事は返ってこない。

「……ネグレクト、ですよね」

僕は勇気を振り絞って、震える声で言った。

「ずっと気になっていたんです。初めて家を訪ねた時、インターホンの先で使用人が困っていたんです。これは、僕らがミキさんがいなくなったことを知っていると思っただから。それに、秀造さんの部屋に入る前に、数分待たされました。なにか打ち合わせをしていたんじゃないですか」

言葉を紡ぐたびに、だんだんと饒舌になって行く。秀造さんも咲さんも使用人も、全員がこちらを見ている。少しずつ表情が険しくなり、それは肯定を表していた。

「冷静だったのも、僕らをすぐに帰さなかったのも、ミキさんを山奥に連れて行く間、時間稼ぎをするためだったんですよね」

「何を……」

「だってミキさんのこと殺したの、秀造さんでしょう」

その場にいる全員が息を呑んだ。これは確信していたわけではなく、鎌をかけてみただけである。間違いだとしても正しかったとしても、何をされるか分からない。しかし、ミキちゃんの無念を晴らしたかった。

「サチコさんっていう人はご存知ですか」

「おい、それって……」

タクがこちらを振り返る。

「そう。あのおばあさんだよ。タクに、ミキちゃんに似ているって言われた時から観察してみたんだ。……確かに似てたよ。仕草も、顔も、癖も」

咲さんは何か言いたげな顔をして、口をばくばくさせている。秀造さんはそんな咲さんを止めるように首を振っている。

「本当なんだ……嘘であってほしかったなあ」

自分の声が反響するほど静かだった。鼓動の音さえ聞こえてくる気がした。

「今日はご招待ありがとうございました。それでは」

驚きで動けない秀造さんたちを横目に、タクを引っ張って帰った。今度はタクからの質問攻めにあっただが、全てに詳しく答えた。何より、ミキちゃんの両親の反応が効いていたのだろう。思っていたより早く納得してくれた。

翌日の昼間。僕はコンビニに行き、サチコさんに話しかけた。ミキちゃんの名前を出すと人のいないところへ案内してくれて、シフトが終わったらカフェに行く約束をした。

カフェで待ち合わせをし、しばらく世間話をした。名前の書き方や出身校など、ごく普通の話を、楽しそうにしてくれた。話題がなくなってきた頃、本題に入る質問をした。

「どうしてあの時、雑誌を買わせたんですか」

眩しいものを見るような顔をしている。その時ちょうど、カフェの窓から差している光がサチコさんに当たった。メイクをしていない素のサチコさんは綺麗で、やはりミキちゃんにそっくりだった。

「俊介さんを、拓さんに見間違えてしまったのよねえ」

「タクに？」

ゆっくりと頷く。

「男の子が美希ちゃんと歩いているところをあのコンビニから見かけてねえ。だから、無理やりにも渡そうと思って。ごめんねえ、気づいてほしかったんだよねえ」

ペこり、と小さく頭を下げる。ミキちゃんに初めて会った時、会釈をしてもらったことを思い出す。

客は、僕ら以外には一人のおじさんしかない。フォークとお皿がぶつかる音と流れるジャズの音しかないなか、ゆっくりと話すサチコさんの声は単調で、不躰にもだんだんと眠たくなっていく。

「気づいてほしいって、タクに何を伝えようとしたんですか？」

「七月号のあの雑誌は、毎年虐待について特集しているの。今年は精神的虐待が大きく見出しに使われていたから、美希ちゃんと一緒に読んだ時の反応で気づいて、助けてくれるか

など思ったのよ」

サチコさんは小さく微笑みながらそう言った。

「結局間違いだっただしあなたには迷惑をかけたわよねえ。自分の無力を実感するわ。あの家にいないと、私何もできないのよ」

ミキちゃんがおばあちゃんっ子なのを気に入らなかった母親が、実の母親を殺害する計画を立てていたらしい。それを察したサチコさんは、ミキちゃんを置いて逃亡。他県にまで逃げることも考えたが、ミキちゃんがもしもの時のために変装してこの町にひっそりと残っていたらしい。

「ミキちゃん、家出をしたことがあったみたいなんです。家を出てからあなたに会いに来たことがありましたか」

サチコさんは一瞬目を見開き驚いた。

「一度だけ。パパの言いつけを破ったと言って古い団地に来てくれたことがあったわ」

コーヒーをマドラーでくるくる混ぜながら、懐かしがるように話してくれた。

「あの子の両親は気づかないのに、孫には家まで特定されちゃったの。とても驚いたわ。もう二度と会えないと思っていた可愛い孫に会えたんだもの。……生きていてくれるだけで良かったんだけどなあ」

「もし、あなたの息子がミキさんを殺害していたとしたら、どうしますか」

マドラーが机にぶつかり、金属の音が響く。おじさんは一

瞬こちらを見たが、所詮他人のことだ。興味がないという風にすぐに自分の食事を再開させた。サチコさんは大きく目を開き、口を半開きにしてこちらを凝視している。次第にカタカタと震え出し、「ああ、ああ」と小さく喘ぎ出した。

「秀造さんが、跡取りができない娘を邪魔だと感じ、秘密裏に殺害していたとしたら、サチコさんはどうしますか」

もう一度、より詳しく問うた。

「私は……なんてことを……」

大きく見開かれた瞳からは大粒の涙が次々に溢れ出していた。

「家に来てくれた時に逃げていれば良かった！一緒にどこか遠くへ、知らない場所で二人で……あああ……」

顔を小さな手で覆い、肩を震わせている。僕も、サチコさんと一緒に涙を流した。おじさんがこちらから目を離さなくなるくらいに、サチコさんは自責の念にかられていた。

ひぐらしが鳴き始める頃、サチコさんは目を腫らしながら、笑顔で手を振ってくれた。「真実を教えてくださいありがとうございます」と何度も感謝をされた。どこまでも優しい人だった。

『本当にサチコさんに伝えたの』

午後一〇時頃、タクからの電話に出た瞬間の第一声がそれだった。

「うん、教えてくれてありがとうって」

『サチコさん、優しい人なんだなあ。やっぱりミキちゃんにそっくりだ』

スマホ越しに聞こえるタクの声は少しだけ震えていて、鼻を吸る音がした。タクもまた、自分がしたことを、できなかつたことを後悔しているのだろう。

『いつまでもこんなんじやダメだよ。ミキちゃん分まで生きなきゃ』

明るい声と言葉が聞こえてきて、少し安堵した。タクは、これからを前向きに考えてくれている。今回の事件を過去のこととして受け入れようとしてくれている。親友が頼もしくて、なんだか嬉しくなった。

「一緒にね」

『うん。シユンちゃんがいれば、どんなに辛くたっていいや』
「僕を巻き込むなよ」

いつものようにケラケラと笑い合う。こんな時間が、これからもずっと続いてくれるだろう。タクと一緒になら、どこへだって行けるし、何だってできる気がする。

そして、ミキちゃんのことを覚えていたい。タクには二度とカノジョなんてできやしないし作ろうともしないと思う。だから僕も、家族の代わりには言わないが、サチコさんとタクと共に忘れずにいたい。

『じゃあボク寝るね。おやすみ』

そう言って電話を終了したのが、午前一時頃だった。お風呂吕に入っていないことを思い出し、階段を降りると、普段は寝ていて暗いはずのリビングから光が漏れていた。

「母さん？まだ起きてるの？」

あくびをしながらドアを開けると、そこにはミキちゃんが立っていた。目が合ってしまった、腰が抜けそうになるのを堪えるとそこから一步も動けなかった。ミキちゃんは小さくお辞儀をし、微笑んだ。

「シюнちゃん、でしたっけ。拓くんからよく聞いていましたよ。……そう言えばこの間の期末テスト、見事に完敗いたしました。私よりも賢いのですね」

「どうして……」

「どうして生きているかお聞きになりたい？ ああ、それともこれのことですか？」

ミキちゃんの視線の先を見ると、そこにはお腹から血を流している母さんが倒れていた。絶望感と戸惑いで目の前が真っ白になる。

今日もいつも通り、「おかえり」と「おやすみ」を聞いた。明日だって聞けるはずだった。

「私より賢い人なんていません。パパとママの跡を継ぐのは私だけでいいんです。だから、あんなに下手くそなヒントからパパが私を殺したっていうことに気づいていただけで嬉しかった」

そう言ってミキちゃんは少しずつ近づいてくる。

「最後に、一つだけ……」

最後に声を絞り出すと、ピタリと動きが止まった。

「サチコさん……おばあさんにはどうして会いに行ったの」

一瞬、泣きそうな表情をしたが、すぐに笑顔になった。

「……ただの気まぐれです」

包丁を持った腕を大きく振りかざされ、死を悟った。こんなことになるなら、タクともう少しマシな話をしたかった。もっと、もっと悔いのないような事を。

でも、どうか、幸せな人生を。

九月一日。クラスメイトの親友が亡くなったと知らされた。その日は始業式で、みんなが憂鬱そうな顔をしていた。私の通っている学校は補習の制度がなく、講習も希望者のみに行われるため、ほとんどの生徒に一ヶ月程度の休みがあった。それにも関わらず宿題を終わらせられない賢くない生徒たち。このことが私は大好き。

「拓くん、今日も一緒に帰ろう」

親友を亡くしてしまったことに酷くショックを受けてしまったのか、どれだけ話しかけても上の空で、どこを見ているか分からない。

「拓くん、私、拓くんの馬鹿なところ、可愛くて大好きだよ」
ずっとそのままできてね。

トモシビ

鹿兒島玉龍高等学校 一年

安樂 滯

乾燥した風が、呆然としている少年の頬を撫でた。

年齢は十五歳くらいだろうか。両親に溺愛されているのか、身に着けている服も時計も、手に持っているスマホもすべて有名なメーカーの物だった。

「ここ、どこだよ」

いらだった声で少年はつぶやく。しかし、その言葉に答えるものは誰もいない。

登下校時に見る高級マンションも、港に近づけばすぐに見えてくる工場も、そこから出される排気ガスも、全てなくなっていた。見えるのは今にも倒壊しそうな木の家とひび割れた大地だけ。

変わらないのは入道雲が浮かぶ青空くらいだろうか。

目を覚ましたら知らない土地にいた少年の頭に浮かんできたのは教科書で読んだこの言葉。

スラム街……治安が悪く、ガスや電気などのライフラインがほとんどない、貧しい人々が暮らしている地域。

少年は昨日のことを思い出す。

（えっと……昨日は母様と父様がお仕事でいらっしやらなかったから二十一時くらいに寝たはず）

両親のことを思い出し連絡がとれないかとスマホを見る。無機質な機械に表示されているのは圏外の2文字だった。少年はそこで思考することをやめた。

そして、十五歳の少年にしては情けない声で叫んだ。

「ここ、どこだよ！ 母様、父様、助けてよお！」

声変わりしたばかりの少し低い声が辺りにこだまする。いつもはこうして叫べば大抵使用人が駆けつけてきてくれたが、やはりそうはいかないらしい。

（諦めてもう一回眠ればもどに戻ってるかもしれない）

少年は誰もいなさそうな木の家に入り、体育座りをして目を閉じた。

ドタドタドタドタ……。

ドタドタドタドタ！

「なんだ!? 誰かいるのか？」

物音が聞こえ、夢の世界へ行きかけていた思考を覚醒させる。周囲を見渡し、音のした方向を探る。使用人がいるかもしれないという淡い期待だけでこの少年はここまで行動ができるようになるのだ。

いや、それは誰かがいないと行動できないのと同じである。

「正岡か？ いやそれとも徳永か？ 頼むからそうであってくれ、一人は寂しいんだ！」

叫びながら音のした方へと駆ける。

スラム街のメインストリートのようなところを抜けて右に曲がったとき、人影が見えた。

大きい身体に、頭髮は赤色。上半身は裸で鍛え抜かれた筋肉が見える。手にはなぜか血がついていた。

少年が気になって男の足元を見てみるとそこには血だまりがあり、その中心に倒れていたのは……。

死体だった。

巨体の男が、こちらを見た。

「ひえ……！」

少年は情けない声をあげながら後ずさる。

「おう、お前、新人か？ 弱そうな見た目してるなあ……」

少年が後ずさるスピードを上回る勢いで男が距離を詰めてくる。

「ひ、人殺し……」

「おう俺は人殺しだ。この街に混沌をもたらすためにこうして人を殺している。とある目的のためにな」

男は愉快そうに笑うと更に距離を詰め、少年の首をわしづかみにして持ち上げた。足が地面から浮き、逃げられない。

「にしても可哀想だなあ……親に捨てられちまうなんてよ」

男に知らない事実を告げられ、少年の身体が死への恐怖と事実に対する困惑で震え始めた。

息もできず、混乱で頭は働かない。既に頭と肉体は限界を迎えかけている。走馬灯が見え、両親や使用人たちの顔が次々と浮かび上がってくる。

死にたくない。

完全に意識が落ちる寸前、甲高い女の声が少年の耳に届いた。

「全く……騒ぎがあったから来てみれば、また殺し？ そろそろやめたらどう？」

途端、男が少年をつかむ手を緩める。

おかげで少しだけだが酸素を取り込めるようになった。

「寝起きが悪い割には随分と駆けつけるのが早いじゃねえか。」

「チヨウ」

助けが来たと思った少年はチヨウと呼ばれた女の方を見る。

「は……？」

かすかだが、少年のいらだった声が発せられた。

女は、少女と言っても過言ではない風貌をしていたからだ。

小柄で自分よりも弱い人間に助けられるというのは、少年にとって苦痛だったが、仕方がなかった。

（あんな小さいやつに俺は助けられるのか……）

「寝起きが悪いのは認めるけど……街の中心部で事を起こされたら、すぐに騒ぎになるに決まってるでしょう？」

チヨウはそう言い放った後、素早く男に近づくと、男の顎

にアップパーを叩き込んだ。

（あんなに小さい身体なのに、攻撃が届いた……）

驚いている少年は既に男の手から逃れており、チヨウの腕

の中にいた。

「私は二度寝したいからね。さっさと逃げるよ、少年」

チョウは少年を抱えて走り出した。

「ちょ、ちよつと待てよ！」

「スピード上げるから無理に話そうとすると舌噛むよ」

「え」

少年には黙る以外の選択肢がなかった。

「はあ……姉貴、名前も知らねえやつの隣で寝やがって、危機感なさすぎだろ。おい、小僧、起きろ」

誰かに肩を叩かれる少年。

「ん……」

目を開けるとそこには隣で寝ているチョウと似た風貌の青年が少年を見下ろしていた。

「うわあ!? お前、誰だよ！」

少年は飛び起きて後ずさる。そして、きよろきよろと辺りを見渡した。少年が連れてこられた場所は先ほど入った木の家よりもだいぶ大きい家。下に敷いてある布団と思われる布は少年がふだん使っているものよりも薄く、地面の固さが直に感じられた。

青年はそんな少年の様子を見て、頭をガシガシ搔くと呆れた声色で言った。

「名を聞きてえのはこつちだ。いつもは五度寝してから起きてくる姉貴が俺より早く起きたと思っただら、知らねえ小僧連れ帰ってきてそのまま寝ちまった」

青年はそのまま少年を睨む。

「俺はテルだ。姉貴……チョウの弟、歳は多分十八くらい」

青年はぶつきらぼうに名を名乗った。

「ぼ、僕は平子蒼。十五歳」

「じゃあ名前はセイかなあ」

突然聞こえてきた声にテルもセイも振り向いた。寝ていると思っていたチョウがいつの間にか起きていて、にこやかに二人に手を振っていた。

「姉貴！ いつから起きてたんだ？」

テルが大股でチョウに近づく。

「てかセイってなんだよ、勝手に名前変えるな！」

セイは勝手に自分の名前を変えたチョウに抗議をしたが、チョウはセイを無視してテルに返答した。

「テルが名を名乗ったところからかなあ」

チョウは悪戯な笑みを浮かべて答えた。

「毎度毎度新人が来る度に寝たふりをしてからかいやがってよお……！」

テルが拳を握り締めている。チョウはそんなテルの拳を面白そうにつつく。

「だって、新人に優しくしようとしてぶつきらぼうに名を名乗るテル、すつごく可愛いんだもん」

「俺はトモシビのスパルタ担当だ、新人に優しくする性質じゃねえ！」

「そんなこと言って、いつも優しくしちゃってるじゃん。ツンデレだねえ」

セイは姉弟喧嘩のようなものを暫く聞かせられていたが返って口を開いた。

「おい、何か僕に説明をしろ！勝手に連れ帰っておいて放置するな。僕は、親に捨てられたのか……？」

そこでようやく姉弟はセイの方を向いた。チョウは寝起きで頭が働いていないのかぼかんとした。

「なんで自分が親に捨てられたってことを少年は知ってるの？」

「ジェイムスから聞いたんじゃねえの」

「あ、そういうことね」

テルから発せられた新たな言葉にセイは更に混乱する。

「ジェイムスって誰だ!? 僕にわかるように説明しろ！」

「姉貴、こいつ海に沈めてきてもいいか？ さつきから人を顎で使おうとして……我慢ならねえ。どこの貴族様だ？」

セイの横柄な態度に腹を立てたのかテルが爽やかな笑みを浮かべて拳を握っている。

「テルもセイ君も、一旦落ち着きな。テル。多分ね、セイ君は平子グループのご子息だよ」

「つまり、甘やかされて育ってきたわけか」

テルの言い方にセイは腹が立ったが、海に沈められるかもしれない恐怖が勝ったので怒りを頭わにはしなかった。

「そしてセイ君。さつき君が会った男の名はジェイムス。彼が言ったように……ここは親に捨てられた子が来る場所だよ。

何か良くない噂でもあるのか、国家機関は動かないし外部から人が来るのは週に一回、食料を持ってくるときだけ。しか

も、生存確認とかもなく食料は浜辺にぽいって置いてある。さつき私が君のことをセイって勝手に名付けたのは、身元がばれるとわるい大人に攫われる可能性があるからだよ」

セイは絶望した。

自分の名前が勝手に変えられたからではない。ジェイムスから話を聞いたときは、彼が自分を混乱させるためだけに嘘をついたのだと思っていたから。現実をつきつけられて、ようやく事の重大さに気づいた。自分が親に捨てられたのなら、使用人たちが助けに来るはずもない。

（ああ、僕は……捨てられたんだ……）

心の中でつぶやいた変わりようのない事実は、セイを更に惨めにさせた。未来も、今も、何も見えない。まだ生きているのに、視界は真っ暗だった。

「大丈夫？」

心配を孕んだ明るい声が聞こえ、セイは顔を上げた。

「セイ君」

チョウが神妙な顔つきで問う。

「家に、帰りたい？」

表情とは裏腹に、優しい声色で話すチョウ。そんな優しさに、セイは安堵を覚えた。

「帰り……たい……」

涙がこぼれる。そんなセイを見て、チョウはセイの頭を軽く撫でた。そして、セイの手を引いて立ち上がらせた。

「外に出ようか。ついてきて」

チョウとテルに連れてこられたのは、浜辺。海に向こうにはセイが暮らしている町が見えた。工場から出される排気ガスのせいか、セイが住んでいる大きな屋敷は見えない。代わりはかなり大きな機械音が鳴り響いているのだけ聞こえてきた。

(あんな機械音、町で聞いたことない)

チョウは目を閉じて深呼吸を繰り返している。そんなチョウに代わって、テルが口を開いた。

「トモシビは、ここに来る親に捨てられたガキを家に帰す俺と姉貴だけの組織だ。帰すって言っても、本人たちがなんとかしないと帰れねえから、俺たちはこのルールや帰るための方法を教えることしかできねえが。まあざっくり言うと、このスラム街の観光案内所ってところだな」

言い終わったところで、テルはチョウの方を見た。つられてセイもチョウを見た。小柄な彼女の、後ろ姿を。

潮風が彼女の黒髪をもてあそんでいる。

チョウの肩が大きく動き、息を吸ったのが分かった。

「我が名はトモシビ！ この地の秩序を守る者として、迷い子を助け導く灯となることをここに誓う！」

セイは、その後ろ姿を彼女が振り向くまで見つめていた。

見惚れたかのように。

夜、セイは一人で海を眺めていた。セイの視線の先には、彼の家がある海に向こう側の大陸があった。夜でも相変わらず

ず大きな機械音が鳴り響いていた。

「やっぱり、聞いたことのない機械音だ」

独り言は機械音にかき消されていく。

耳がおかしくなったのか、甲高いその音たちの中に人の声が紛れている気もする。

(そうだ、あのトモシビのスパルタ担当の声に似てる)

「おい、聞いてんのか小僧」

セイが思った通り、聞こえていた声はテルのものだった。

「え、あ、はい」

淡泊な反応をするセイ。

「なんか元気ねえな、どうかしたか？」

叫び声をあげないセイを不思議がるテル。

聞こえてくるのは波の音と機械音。

月の光だけが、唯一誰にも邪魔されずに己の役割を果たしていた。

「眠れないのか」

「僕が捨てられるわけがない」

セイはテルの質問に答えなかった。

「ここにいることが捨てられたことに対する何よりの証拠だ」

テルも、事実だけを述べた。テルがため息を吐き、頭をガシガシと掻いた。

「……親に捨てられるわけがない、なんて台詞耳にたこができるくらい聞かされた。姉貴が親に捨てられたガキどもを助けようとしてるから俺も手伝ってるだけで、俺自身には姉貴

のような慈愛の心なんてものはねえ」

セイはテルの話したいことの意味がわからず黙ったままだ。「俺たちには記憶がない。ここに来る前の。親も、住んでいた場所も、もやがかかったみてえに何も思い出せない。このスラム街に最初からいるやつらは、皆そうだ。ジェイムスもな。記憶があるのは捨てられてここに来て、家に帰りたくないって言ってここに住んでるガキくらいだ」

セイはテルをちらりと見る。

そこにはセイの知っているテルはいなかった。表情は消え失せ、瞳には何も映っていない。ただ、そこに立っていた。

「姉貴も、俺も、お前が持っているような親の記憶や愛情に触れようとして捨てられたガキを救おうとしている。あまり悪く思わないよ。他人の愛を模倣したって、それは本物の愛じゃないんだからな」

テルはそう言って、セイの頭を撫でた。姉と同じような、柔らかさで。

不意に、セイが口を開いた。

「僕の家族の方が、模倣だよ。父様と母様は欲しいものを言えぼなんでも買ってくれるけど、それは愛じゃない。愛っていうのは、僕の学校の友達の親みたいなの、授業参観に来てくれたり、テストで悪い点数をとったら叱ったりしてくれるものなんだ」

テルは黙って、セイの話の続きを待っている。

「だから、テルやチョウの……」

「さんをつけろ」

「テルさんやチョウさんの愛は、模倣なんかじゃないよ」

テルは少し嬉しそうに、

「そうかよ」

と言った。

「あと、いつものガキみてえな口調より、今の話し方がしっくりくるぜ、セイ」

「いつもは大人たちに跡継ぎとして堂々として言われてるから」

「今は跡継ぎなんか関係ねえ。お前はセイだ、わかったなら帰るぞ」

（捨てられたショックは大きかったけど、テルさんやチョウさんに会えたから、ここに来てよかった）

「え、やっぱり家に帰りたくない？ 昨日あれだけ泣いてたのに」

翌朝、セイは帰りたくないと言った。

「昨日の夜、テルさんと話して思ったんだ。チョウさんやテルさんと一緒にいられるなら、ここに住んでもいいかなって」

「心なしか話し方も変わっている。昨晩は私が寝ている間に随分と二人の時間を楽しんだようで……」

チョウが楽しげにテルの方を見る。テルは眉間に皺を寄せて話の続きを促した。

「うーん、ここに住むのはいいけど、私たちと一緒に住むこ

とはできないかな」

セイはショックで何も言えなかった。

「ここにはシンリンと呼ばれる共助団体がある。私とテルとジェイムス以外のここに住んでいる人たちは皆シンリンに属して生活しているの。だから、セイ君がここ住むことになったらシンリンに属して生活していくことになるから、私たちと生活することはできないよ。スラム街のルールだからね」
傍で聞いていたテルが補足する。

「もし仮にトモシビに所属することが叶ったとしても、ジェイムスと戦うことになるぞ」

「家に帰ります！」

首を絞められたときの感覚が蘇って来て、セイは即答した。
「わかった。じゃあ、帰るための条件を教えるよ、たった一つだけ。それは……」

数分後。

「待って、なんでやつがここにいるの！ 私はこの家の主として、いつも清潔を心掛けて来たんだよ！」

チョウが騒いでいる。彼女の視線の先にいるのは、触角が二本生えた、黒い虫。

「今は真夏だしここはスラム街だぞ。そりゃあゴキブリだって湧いて出るだろうが」

テルが冷静にツッコむ。手には角材が握られていた。

「ゴキブリじゃない、ゴキちゃんって言って」

「あんま変わってないぞ、それ」

家の外で殺してだの、食料にできるから捕まえるだの、ギヤあぎやあ姉弟が騒いでいる中、セイは考え込んでいた。

(僕にとつての悪……)

チョウによると、スラム街にやってくる食料配達船には、時間を合わせれば乗ることが可能らしい。だが、時間は不定期で、時間を教えてくれるのは高性能のトランシーバーだけ。そしてそのトランシーバーを持っているのはジェイムス。つまり、ジェイムスに認めてもらわなければ帰れないということだ。そして、その認めてもらえる条件は自分にとつての悪をジェイムスに見せることだった。

「こいつ意外と足が速いぞ。この時期のゴキちゃんは飛ばないはずなんだけどな」

テルはまだ黒い虫と格闘していた。チョウはセイの後ろに隠れ、小動物のように震えている。

(そう言えばゴキブリが、家に出たことあったな)

セイが七歳くらいのことだ。久しぶりに家族三人でご飯を食べているときに壁を黒い虫が這っていた。母は悲鳴を上げ、父は使用人を呼んだ。セイは両親を助けたいと、黒い虫を殺そうとした。

「虫を、小さな命を殺してはいけません！」

母に怒鳴られて、結局家族での楽しい思い出は苦い思い出へと変わった。それから八年間、セイは虫を殺さないように心掛け続けている。

「しまった！ 姉貴、ゴキちゃんがそっちに来る……って、

セイもいたのかよ！」

テルが大声を上げながらセイとチョウの方に向かってくる。しかし、黒い虫の方がスピードが速い。

「セイ君！　なんとかして！」

懇願するようなチョウの声で、セイは勇気が湧いた。七年前、両親に抱いたものと同じ。

「久しぶりだな、新人。そんなにおびえなくても、俺は一度逃した獲物を執念深く追うような性質じゃねえ。安心しろ」

セイはとあるものを持ってジェイムスのもとを訪れていた。

目的はもちろん、セイにとつての悪をジェイムスに見せ、ジェイムスに認めてもらうこと。

ジェイムスがいた場所は、ごみの山と言っても過言ではなかった。どこにあったのかわからないソファの上に座り、セイを見下ろしながら笑っている。ソファには連絡用のトランシーバーが置かれていた。

「僕にとつての悪は、これです」

つぶさないように手に持ってきたものをジェイムスに見せた。

セイの手の上にあったのは、先程チョウが怖がっていたゴキブリの死骸。ジェイムスも予想外だったのか、目を丸くして固まっている。

「僕は、両親に虫を殺すなど言われてきました。そして、僕自身もその言いつけをずっと守ってきました」

ジェイムスが怖いのか、虫の死骸を持つことが怖いのか。あるいはどちらもなのか。セイの手は震えていた。

「親との約束を破ること。それが、僕にとつての悪です」

ジェイムスは、下を向いて震えている。怒りなのか、悲しみなのか、セイにはわからない。すると、かすかに声が聞こえた。

「……ふははははははは！　新人、お前面白いな！　今まで

何人もの悪を見て来たが、お前ほど面白いやつはいなかった」

予想もしなかったジェイムスの反応に、セイは戸惑う。

「ええと……合格、ってことでもいいですか？」

「ああ、もちろんだ」

ジェイムスのその言葉に安堵したセイはその場に座り込んだ。

「よかったあ」

「にしても、チョウが一番苦手な虫を持つてくるとはな。チョウに何か言われなかったか？　それか……殺したから感謝されたか？」

「後者ですね、感謝されました」

嬉しそうに告げるセイを見て、ジェイムスにはやりとする。

「お前、さてはチョウに惚れてるな？」

「え、そ、そんなことないです……」

否定したセイだったが、既にジェイムスの中ではセイがチョウのことを好きという事実は確定してしまっただけ。楽しげに頷いている。

「俺もチョウには借りがある。チョウは俺に生きる意味をくれたんだ」

ジェイムスはどこか切なげな表情で語り始めた。

「俺にはこのスラム街に混沌をもたらし、事件性を大きくすることによってこの地を危険な場所と国に伝える役目を与え、自分はそんな混沌を止めるための秩序になる、と。わかりやすく言うとチョウは捨てられて来たこどもを助けるが、人数が多すぎるとチョウが大変になる。そこで俺が捨てられて来たこどもを見つければ次第殺す。だが殺しすぎるとスラム街が大騒ぎになってしまうからチョウが俺を可能な限り止めるって感じだ。混沌には秩序が必要で、秩序には混沌が必要、とか何とかチョウが言ってたな」

「ジェイムスさんが言っていた目的は、国家機関に気づいてもらうことだったんですね」

「ああ、そうだ。ここにはスラム街になる前、とある研究所が設置されていたんだ。俺やチョウやテルは、その研究の実験体だった」

「じつげんたい……？」

聞きなれない単語に、セイは動揺する。テルが語らなかつた、あるいは知らなかつた情報をジェイムスは述べ始める。

「俺とチョウの見立てでは肉体強化の実験だったって話になつてる。これから起きる戦争への戦力としての人間をつくるためのな。実験中にエラーが起きて爆発。実験体として保護されていた俺たちは無事だったが、研究員たちは皆死んだ。」

残ったのはこの島と俺たちだけ。ま、これも全部チョウの考察だけだな」

「肉体強化の実験だったら、ジェイムスさんの強さも納得がいきません。あのうるさいくらいのだたどたたっていう地響きも、ジェイムスさんが出した音だったんですね」

セイが納得したように声を発する。しかし、ジェイムスは首をかしげていた。

「俺は地響きなんか鳴らしたことはないぞ。俺は腕力だけ強い。テルは脚力が強い。チョウは総合的に全部強いって話だからな」

「え？　じゃあ僕が聞いたあの音って……」

セイが言葉を発する前に、ジェイムスの横に鎮座していたトランシーバーから声が聞こえた。

『こちらは徳永、徳永、ジェイムス殿、聞こえますか。まもなく食料配達船が到着いたします。東岸の浜辺まで来てください』

トランシーバーの性能が悪いのか、セイには内容をはっきりと聞き取ることができなかつたが、ジェイムスには聞こえたようだ。

「丁度いいな。お迎えの船が来たぞ」

ジェイムスがソファから飛び降りる。そしてセイに背中を向けて屈んだ。

「お前の足だと時間がかかる。俺は足は速い方じゃないが歩幅でなんとかできるからな、ほら、乗れ」

セイがジェイムスの背に乗った。

浜辺に着くと、スーツを着た男性が待っていた。

「今回は早かったですね、ジェイムス殿。……まさか、おぼつちやまでですか？」

「徳永！」

数日ぶりに使用人に会えた喜びで抱き着こうとしたセイだったが、徳永に怒鳴られた。

「まだこちらに来てはいけません、おぼつちやま！　こちらでは今、戦争が起きています！」

「せん、そう……」

あまりにもセイからかけ離れた、聞き馴染みのない言葉。

「もしかして、僕が聞いた地響きも、僕の住んでた町から聞こえて来た機械音も、ジェイムスさんやチョウさんやテルさんが実験体になった実験も……」

「この戦争によって起きた出来事、だろうね」

セイの言葉を引き継いだのは、チョウだった。後ろにはテルもいる。

「戦争に我が子を巻き込まないためにこのスラム街にセイ君、いや蒼くんを捨てたってこと？」

チョウの問いかけに徳永は頷いた。

「じゃあ僕はここにいた方がいいのかな……」
弱々しくセイが呟く。

「セイ、お前はそれでいいのか？　捨てられたと思っていた

両親が、実はお前を助けようとしてたんだぞ？　どうにかして力になりてえとか思わないのか」

テルがセイに聞く。

「家族だからこそ、助けようと思う気持ちが生まれるんじゃないかねえのか？　愛って、誰かを守ろうとする気持ちそのものじゃないかねえのか？　押しつけになるかもしれないねえが、俺はお前にそうしてほしい。誰かへの愛で、誰かを守ってほしい」

愛。その言葉を聞いて、セイが真っ先に思い浮かべるのはチョウだった。できることならば、彼女の隣にいて、彼女を守りたい。

「僕が今守りたいのはチョウさんだよ。だから、僕は帰りたいくない」

「新人……」

ジェイムスが感心したように声を漏らす。

「セイ君、私を守りたいのなら、私を救いたいのなら、まずは家族を救ってきな」

チョウははつきりと言った。

「愛ってね、まず最初は家族から生まれるものなんだよ。そしてその愛を人はやがて血のつながっていない誰かに捧げていくんだと思う。だから、家族を救って、自分なりの愛を見つけたあとに、私を助けに来て。私も、皆も、セイ君がこのスラム街を救ってくれるのを待ってるから」

「……うん、わかった」

蒼はチョウの言葉に頷き、徳永の方を向いた。

「徳永、僕は帰るよ。母様と父様を救いたい。僕にはできないことかもしれないけど、無謀なことかもしれないけど、やってみせる。今度はゴキブリみたいに簡単に倒せるものじゃないけどね」

徳永は暫く頭を抱えていたが、ため息を吐き、言った。

「そこまで真剣なおぼっちゃまを見たのは初めてです。許可しましょう」

「ありがとう、徳永」

蒼は振り返り、チョウたちに言った。

「次は僕がチョウさんたちを船に乗せて帰るからね！」

蒼は船に乗り込み、チョウたちの方を向いた。

ジェイムスは号泣し、テルも少しだけ目に涙を浮かべている。チョウは切なげな笑顔で手を振っていた。

「またね」

(次は僕が、皆を救うトモシビになるんだ)

乾燥した風が、蒼の頬を撫でた。

年齢は二十歳くらいだろうか。動きやすい服に、帽子に、大きなリュックを背負っている。

暫く歩いて、少女と青年と男の姿を見つけた。三人とも、セイの存在に気付いたようだ。

セイは嬉しそうな声でつぶやいた。

「迎えに来たよ」

紅葉の絆

鹿児島玉龍高等学校 一年

日々 いろいろ

私には、目標がある。いつか探偵事務所を立ち上げて、名探偵として世界で活躍すること。子供みたいな夢かもしれないけど、そのために毎日勉強して、推理力を磨いて、努力を重ねている。

昼休みに学校の図書館で、お気に入りの推理小説を積み上げてカウンターに置いた。

「もみじちゃん、最近はどう？」

貸出の手続きをしながら、有栖先生が、にこにこ話しかけてくれる。この先生は、よく面白い推理小説を教えてください。学校でも困った時にお世話になっていて、悩みを打ち明けることが出来る先生だ。探偵事務所を立ち上げるとい夢を打ち明けた人でもある。

「やっぱり、探偵事務所を立ち上げるとしたら東京だなと思えました。単純に客が多いですし、魅力的な謎があるとしたらやっぱり都会に出ないよ」

大真面目にそう答えた。調べたところ、近場の小さな探偵事務所の主な仕事は浮気調査や、ペット探らしい。そんな

小さい事件は名探偵が解くようなものじゃないと思う。いつか小説の主人公のように魅力的な謎を引き寄せるような人になれたらいいのにな。

「もみじちゃんは、探偵になりたいのだったわね。じゃあ、私からひとつ依頼があるんだけど、お願いできるかしら」

その言葉に胸がときめいた。司書教諭の先生が提供してくれる事件はそんなに大きくないだろう。だけど、有栖先生にはお世話になったし、何より私にとって初めての探偵としての依頼だ。受けてみるのもいいかもしれない。

「この本を探してほしいの」

渡されたプリントには、この本を探していますという文字とともに一冊の本の写真がのっていた。黒い装丁に、銀色の幾何学模様が入った重そうな本だ。プリント自体は、掲示板にでも貼っていきそうなもので、実際これからカウンターの横に貼り付けておく予定らしい。

「この間の蔵書点検で、無いことに気付いてね。まあ、見つけられなかったらそれでいいから」

本の題名は、『銀河の彼方』。この幾何学模様はどうやら大きな宇宙を表しているらしかった。

「探偵志望として、与えられた依頼はきちんと達成してみせます。期待して待っていてください」

私は、自信が無いのを隠すように胸を張った。これが初の依頼、まだ探偵事務所も立ち上げていないただの高校生にこの謎は解けるのだろうか。

「もみぢちゃん、せっかく探偵として初仕事をするんだっから、助手でも作って見たら？　きつといい出会いになると思うわよ」

確かに助手という言葉には、とても惹かれるけれど、突然助手を作れと言われても特に当てはないし……手伝ってほしいこともない。知らない人に無理やり助手を頼むより、一人のほうが上手く動けるような気がする。

「考えてみます。ありがとうございます」

扉に付いたベルが澄み切った音を鳴らして、私が図書館から出たことを告げた。

私にはまだ、小説に出てくる名探偵のような特殊能力やひらめき、経験がない。そこで、まずは渡された紙からヒントを探ることにした。

紙には、分類番号や簡単なあらすじが書かれている。この本は、9類の日本文学。内容はサイエンス・フィクションの長編でかなり難しそうな内容だった。この本は読む人を選ぶだろう。犯人は余程の本好きか、科学に興味がある人だろうか。なら、サイエンス部をあたってみるのもいいかもしれない。まだ、情報が少なすぎるから、なんとも言えない。聞き取り調査は放課後にしよう。

教室に帰る途中で、みゆとすれ違った。妙に引っかかって、後ろを振り返った。あっ、みゆを助手にしてみたらいんじゃないかな。

小学校の頃、毎日のように遊んでいた友達がいた。今思え

ば、いつも振り回してばかりで、よくずっと一緒に遊んでくれたなと思う。とにかく、みゆは優しくて他の人とはちょっとズレたセンスの持ち主だった。その最たるものが、クマのぬいぐるみだ。いつもは泣かないみゆが声を上げて涙を流しているのを見て、驚いて声をかけた。

「クマのぬいぐるみ……失くしちゃったの」

その言葉を聞いて、私は必死でクマのぬいぐるみを探した。みゆの通学路から始まって、色々な人に聞いてみたりもして、ようやく落とし物ボックスにあのぼけっとしたマヌケな顔を見つけた時には、嬉しくて学校にいるのに踊り出した気分だった。でも、何よりも嬉しかったのはぬいぐるみを探し出して、みゆに渡した時の満面の笑みだ。

「ありがとうございます」

その言葉は、私にとって何にも変え難いものだった。それから私は、探偵という職業があると知り、周りに私は探偵になると宣言していた。

小学校の頃の私のそばにはいつもみゆがいた。みゆならば、きつと今回の依頼を達成するための力になってくれると思う。そこで、みゆに助手をしてほしいと頼むことにした。

でも、みゆとは小学校の頃からあまり関わっていない。突然話しかけて、拒絶されたら嫌だったから、直接言わず手紙で話すことにした。カバンの中を探ると、白い封筒と便箋があった。私は、紙にペンを走らせた。

私は、封筒を靴箱に入れた。中の手紙には、助手になって

くれるのなら裏庭に来てくださいと書いてある。

少し薄暗くなった空の下で腕を組んでみゆを待つ。風も冷たくなってきていたけど、靴箱から走ってきた私はちょうど体が温まっていて気にならなかった。

「京野、来てくれたのか」

思わず嬉しくなって、自分から声をかけた。

「助手をするのはいいんだけど、なんで私だったの？」

そうだった、私がみゆに話しかけるのなんて小学校以来だ。

「京野は私の幼なじみだろうか？」

でも、それは遠い昔のことで、今の私たちに接点はない。

だって、中学になって、みゆとはクラスが別れてしまった。

話しかけようとしたこともあったけどみゆは友達に囲まれるようになっていて、話しかける隙もなかった。

私は、昔のようにみゆと仲良くなりたかった。でも、こんな本探しに駆け回るより、友達と遊んでいるほうが楽しいのかもしれない。

「私に出来ることなら、何でもするよ」

その頼もしい言葉に嬉しさが込み上げてきた。そして、依頼内容を伝えようと思っただけ私に紙を取りだした。

「京野は、サイエンス部の知り合いとか、分厚い本を好んで読むような読書が好きなら知り合いはいるかな？」

みゆは、手元の紙をじっくり読んでいたが、私の答えを聞いて少し考えて言った。

「サイエンス部だったら、普通に見学に行けばどうかな」

その考えはなかった。知り合いもない部活の部室に行くなんて発想は私には無い。

「じゃあ今から、理科室に行ってみようか。一緒に行ってくれるかい」

仕方ないなどでも言うように、みゆは理科室に先導するよりに歩き出した。少しでも、サイエンス部にヒントがあればいいんだけどね。

「やあやあ、もしかして君たち！ 入部希望者かい？」

理科室を開けた瞬間に、目の前にずっと眼鏡の男子が近づいてきて、思わず一歩後ろに下がった。

「女子だ！ 女子が来たぞ」

「我がサイエンス部にもついに春が来たか」

後ろの男子のざわめきに、私は少しひいていたけど、みゆはお構い無しに話しかけようとした。

「あの、実は……」

「もしかして、これが気になるのかい？ これは、粉塵爆発の実験で大破してしまっただけ。いや、あれは失敗だったな」

サイエンス部の部長と思われる人がみゆの話さえぎった。どうやら、話を聞かないタイプの人らしい。

「そうだ。自己紹介がまだだったね。僕は、青江。高須青江だよ。よろしくね。ちなみに、文化祭のロケットの打ち上げを担当しているのも僕だよ」

あ、あの、毎年失敗しているという……。ペットボトルを使った簡単なやつなのにあれほど失敗するのは奇跡だって誰

かが言っていたような。

「今年は無敗してしまつたが、来年はきっと成功させてみせようとも！」

去年の打ち上げなんて、校舎の窓につつこんで窓ガラスを割りかけていたのにまだ続ける気なのか、この先輩。

「すみません。この中に、銀河の彼方という小説を借りている人はいますか」

大人しく聞いていたみゆが、圧をかけるような笑顔で言った。慌てて、他の部員が彼をおしのけて顔を出した。

「あつ、すみません。部長はこのとおりなので、副部长である俺が対応しますね。みんな、銀河の彼方を借りているものはいるか？」

後ろで部長は話し続けていた。それを見て、他の部員は呆れている。

「いや、何回目だよ。部長のせいで新入部員の女子が逃げるの」

「全くな。やっぱうちの希望は姫だけだぜ」

「そういえば、姫遅いな」

副部长は、手際よく部員から話を聞き終えて、こちらに顔を見せた。

「うちの部員に話を聞いたけど、借りているやつどころか、存在を知っているやつもいなかったよ」

やっぱり、そうか。こんなふうに関心取りをしたところで犯人が正直に話すとは思えないし、何より調査は地道にやる

ものだろう。

「じゃあ、なにか分かったらまた教えてください。ありがとうございます」

私と、みゆは理科室を出たため息をついた。

「なんかすごいところだったね」

「収穫なしか……なにか見つかると思つてただけだな」

残念だったね、と励ましあつて、帰ることになった。

私はそのまま、学校の裏手にある神社に向かった。本が見つかりますようにと神頼みしてみようと思つていたので。赤い鳥居をぬけてその先にある本堂を前にして、ポケットから小銭を取り出そうとした。確か、ご縁がありますようにと願つて五円玉を入れるんだっけ。ポケットから手を出した拍子に、有栖先生から貰つたプリントが落ちた。風に舞つて、どこかに飛んでいこうとする紙を数歩追いかけると、それを拾つた人がいた。ショートカットのボーイッシュな女子生徒だ。

「はいっ！ これおとしたの、もしかして君かな！」

そう言つて彼女はプリントを手渡した。

「そのプリントの中身見ちゃったんだ！もしかして銀河の彼方探してるのかな。それだったら、この間水山くんが持ち出してるのを見たよ！」

「えっ、どこでいつ見たの」

あわててそう聞く。まさか銀河の彼方を盗んだところを見ている人がいるなんて思いもしなかったから。

「確か、三日前の放課後だったかな。私は図書委員だからさ。」

当番中だったんだよね！」

「証言をしてほしいから明後日の放課後図書室に来てくれるかな。名前なんだっけ？」

私は明後日までに犯人を見つけて、事件を解決することにした。依頼はできるだけ早く解決しないとだからね。

「私の名前は、一ノ瀬じゅり。サイエンス部員で、図書委員だよ！ それで、明後日の放課後だっけ、空いてるから全然行けるよ」

そう言っつて、一ノ瀬さんが帰ったのを見て、私は、自分が参拝の途中だったことを思い出した。

鐘を鳴らして、柏手を打つ。張り詰めたような音が二度なつた。

「本が見つかりますように」

その後深く一礼して、神社を出た。根拠は無いけど、必ず本が見つかるような気がした。

教室と私の間には、いつも分厚い壁があると思っていた。

本を読んでいると、他の人の言葉が滲んで、意味の無い雑音のように響いてくる。でも、今日はみゆがいた。

「おはよう！ もみじ、本探しのことなんだけど、本が好きな日野さんに聞いてみない？」

教室の窓から日野さんが校舎に入っていくところを見かけた。

「聞いてみようか。ちょうど、日野さんも登校して来るみた

いだ」

教室に入ってきた日野さんに、みゆが声をかけた。

「あっ、おはよう！ ひまりちゃん」

こんなふうに明るく話しかけられるコミュニケーション能力は、見習いたいないつも思う。

「それでね、聞きたいことがあるんだけど、銀河の彼方って知ってる？」

みゆは流れるように質問を始めた。

「銀河の彼方……？ なんてそんなこと聞くの」

日野さんは、首を傾げてこちらを見た。みゆの隣に私がいることを不思議そうにしているようにも見える。

「もみじが図書の先生に、無くなった本を探してくれてたのまれたの」

その言葉に、日野さんは俯いて小声でつぶやいた。

「私が図書委員なんだから、有栖先生も私に頼めばいいのに」
幸いその言葉は、みゆには聞こえていなかったらしく、そのまま普通に話し出した。いや、もしかしたら聞こえても空気を読んで聞こえなかった振りをしたのかもしれない。

「ひまりちゃん、本が好きだし、図書委員だから銀河の彼方についてなにか知ってるんじゃないかなと思って」

日野さんは少し悩んでいたけど、思い出したように言った。

「そういえば、図書委員の間でも、銀河の彼方がぬすまれたって騒ぎになってたよ」

でも本が盗まれたからって、こんなに騒ぎになるかな。単

純に貸し出し処理をし忘れて本を持って行ってしまった可能性もあるし……。

「なんで、そんな騒ぎになったの？」

「だって、盗まれた本はそろそろ除籍しようと思って、カウンターにあったから。犯人は図書委員しかいないって話になって……」

あれ、おかしいな。水山くんは確かサイエンス部ではあったけど、図書委員ではなかったはず。一ノ瀬さんの勘違いっていう可能性もあるけど。

「もしかして、もう犯人がわかっているんですか？」

「いや！ まだ調べてる最中だからさ。まあ、候補みたいな人はいるんだけど」

「そうですね。まだ確証も得てないのに。冤罪になってしまいかもしれませんよ。私が言っただけなんですけど、図書委員が犯人だとは限りませんし」

日野さんにそう言われて、確かにそうだと思った。きちんと話を聞いて確証を得ないと。

「ありがとう、日野さん。もう少し調べてみる」

「そうですね、役に立ったなら良かったです」

いつもは無表情な日野さんが、微笑んでいて、少し呆気に取られてしまった。

「なんですか？」

「いや、笑ってるところ。はじめてみたなって」

「私だって笑いますよ」

最初はぎこちなく喋っていたけど打ち解けられたようで嬉しかった。

「本はカウンター内にあったのにどうやって水山くんは本を盗んだんだろう？」

それを知るためには水山くんに話を聞くしかないよね。昼休みに、水山くんのところに行ってみることにした。上手く行けば、どうして一ノ瀬さんがそんなことを言ったのかわかるかもしれない。

「分からないけど、とにかく話を聞きに行ってみようか」

私はみゆと一緒に、水山くんの教室に向かった。

「すみません。水山くんいますか？」

教室から出てきたのは、昨日サイエンス部であった中の人だった。

「えっと、昨日サイエンスに来た二人だけ？ 突然どうしたんだ」

「水山くん、聞きたいんだけど、銀河の彼方っていう小説を盗んだって証言があったんだけど？」

水山くんは、焦ったように視線を宙に巡らせて言った。

「昨日日京野さんには、知らないって言ったけど……本当は、僕が銀河の彼方を盗んだんだ」

あまりにもあっさり水山くんが告白して私たちは驚いた。じゃあ、一ノ瀬さんもいる中、どうやってカウンターから本を盗んだんだろう。

「どうやって、銀河の彼方を盗んだの」

そんなことを聞かれるとは思わなかったとも言おうように目を見開いたあと、あわてて水山くんは答えた。

「え、と。それは、普通にそこにあつたからつい出来心で」

一ノ瀬さんが見えていない隙に盗んだってことかな。でもまだ確証がない。

「銀河の彼方はどこに置いてあつたのかな」

「それは……普通に本棚だよ」

日野さんは銀河の彼方はカウンターにあつた、と言っていたから、水山くんは嘘をついている？ でもなんで。

「なるほど、ちなみに水山くんがやったって教えてくれたのは一ノ瀬さんなんだけど、なんでそう思われたのか知ってるかな」

「それは、僕が盗んでるところを見てたからじゃないか」

「でも、その時なんて何も言わなかったんだと思う？」

だって、除籍本が持ち出されようとしていたら普通は声をかけると思うんだけど。

「貸し出しされてる本だと思つてたのかもしれない」

水山くんと話していても埒が明かない。私の考えがたよつて、もし水山くんが嘘をついていないとすると、本はその時カウンターじゃなくて本棚にあつたってことになる。つまり、図書委員の誰かが動かした。ということも考えられるのか。

「水山くんがやったんだったら、有栖先生も困ってるから、

明日の放課後、銀河の彼方をもって絶対図書室に来てね」

「わかった」

意外にも水山くんが、簡単に本を返すと言つたので、私はすぐに引くことにした。

放課後カバンを持って帰ろうとすると男子生徒に話しかけられた。あれは確か、サイエンス部副部長の……誰だっけ？ 「あつ、いたいた。東和さんでしたっけ。どうしても昨日のことが気になって、うちの部員から、色々聞きだしてきたんですよ」

爽やかな笑みに、話しかけやすそうな雰囲気。整った顔立ち、こういう人をイケメンと言うのかもしれない。それにしては胡散臭いけどね。

「なにかわかつたの？」

ちよつと身構えてそう聞いた。昨日の件でサイエンス部には少し苦手意識ができていた。

「ええ、みんな姫のことだからと黙っていたらしくてね。まあ、とうとう口を割りましたよ」

「姫？」

現代には似つかわしくない、姫という言葉に違和感を持った。なんか聞いたこともあるような。

「あの部長にも屈せず、今日までサイエンス部に在籍して活動してくれている女子です。なので、姫と呼ばれているので

すよ。本人は嫌がっていますが」

それは、嫌だろう。自分が姫って呼ばれるなんて。

「で、その姫がどうしたの？」

副部長は、急いできたのか手に持ったりリュックを背負ってから話し始める。

「それがですね、姫に銀河の彼方を持ってきてと言われたサイエンス部員がいたらしくて」

不思議に思っただけだ。

「その部員は本当に銀河の彼方を盗んだの？」

話しているうちに走って来た疲労もだんだん和らいだのか、落ち着いて話し始める。

「いえ、盗んではないのですが。もしかしたらサイエンス部の中で盗んだ人がいるかもしれないと言っていました。まあ、伝えられることは伝えましたので、本探し頑張ってくださいね」

そう一息に言って去っていった副部長を見て、怪しげだと思っただけだと思っただけだ。

あっ、そういえば、その姫がなんて名前なのか聞いてなかった。でも、一ノ瀬さん、サイエンス部員だって名乗っていたよね。でも、一ノ瀬さんが犯人だとすると水山くんがやったんだってわざわざ証言するなんてことあるかな。

昼休み、いつも通りひとり席についてお弁当を食べようとすると、日野さんがやってきた。

「一緒にご飯食べませんか？」

日野さんがそんなこと言うなんて、今までで初めてで驚いた。

「そういえば、この間は色々教えてくれてありがとう」

沈黙が続いて、気まぎれになりようやく絞り出した言葉がそれだった。

「ああ、本の話？ あの本が除籍本だって知ってるのは図書委員の中で数名だったんだけどね」

除籍本だって知らない図書委員もいたのか。もしかしたら、カウンターの本が返却された本だと思って間違えて棚に入れてしまったとかあるかもしれない。

「除籍本について知ってるのは、だれなの？」

「えっと、あの日いたのは私と一ノ瀬さんと、早見くん、有栖先生くらいだったかな」

今いちばん怪しいのは、水山くんが犯人だって言った一ノ瀬さん。でも、特に気にしていなかったけど騒ぎになって思いついた可能性もある。

「日野さん、今日の放課後図書室に来てくれるかな？」

「図書室には毎日行ってるから問題ないよ」

一応、日野さんも関係者なので来てもらうことにした。

昼食を食べ終えたあと図書館に行くと、有栖先生に話しかけられた。

「京野さんが、今もみじちゃんの助手をしてくれているのよ

ね。最近、もみじちゃんが好きそうで先生は嬉しいわ」

「そう言われて、気づいた。もしかして有栖先生から、少しは友達を作ったほうがいいと思われてたのかな。私は望んで一人でいたのにと、なんだか悔しかった。」

「銀河の彼方って除籍本で、カウンターにあったから図書委員しか盗めないってほんとうですか？」

「え、図書委員の人から聞いたのかしら。でもまだそうと決まった訳でも」

「それでも、本が置いてあった場所とか色々教えてもらっていたほうがきつとすぐに真相に気づけました！」

もしかして、先生は犯人を庇おうとしているのかもしれない。

「少しでも先入観が無い目を見た方がいいかと思ったの。図書委員が犯人とは限らないし」

確かに調査の結果本を盗んだ犯人だとわかったのは、図書委員でもないサイエンス部の水山くんだった。

「本を盗んだ犯人はわかったんです。でも、それを頼んだ人が分からなくて。有栖先生はサイエンス部の姫って誰か知ってますか」

「姫が誰かは知らないけど、サイエンス部の女子生徒は、一ノ瀬さんと、日野さんだけよ」

日野さんもサイエンス部員だった？ じゃあつまり、黒幕は一ノ瀬さんか日野さんってことになる。

「今日の放課後、犯人に図書室に来て欲しいって頼みました。」

先生も来てくれますか」

「先生は、いつでも図書室にいますよ」

急いで、教室に帰った。いつも友達といて色々なことを知っているみゆに話を聞くことにした。

「犯人は、一ノ瀬さんか、日野さんだと思うんだけど。どちらがサイエンス部で姫って呼ばれてるのか分からないの。期限は今日の放課後までなのに。もし間違った犯人を指摘しちゃったらどうしよう」

その言葉を聞いて、みゆは諭すように言った。

「大丈夫。もみじならきつと犯人を見つけられるよ。だから、肩の力を抜いて、そのままのもみじで立ち向かったらいいじゃん」

「ほんとに？ 私は、京野と違っては友達もいないし……」

みゆは少し、顔を顰めて言った。

「ねえ、私はもみじの友達じゃないの」
ちよつとした沈黙が続いて、みゆははっきりした口調で言った。

「ずっと言いたかったことがあるんだ。なんで、私はもみじのことを呼び捨てなのにもみじは私のことを京野って呼ぶの？ 私たち、友達でしょ」

私たちが、友達でしょ。その言葉で気づいた。みゆと私って友達で良かったんだ。それに、私のみゆのこと京野って呼ぶのは、友達じゃないからとかそういうわけじゃない。

「名探偵は助手のことを、名字を呼び捨てで呼ぶと思って」

みゆは、なんだか呆れたように笑った。

「なんだ、そんなことだったんだ。そっか、じゃあ私たちも親友だね」

自分だけで自己完結しようとしているみゆを見て、慌てて止める。

「私も！ いつもみゆが友達に囲まれてちよつと寂しいなって思ってた」

「私が友達に囲まれてても話しかけてよ。友達の友達は友達って言うでしょ」

「……まあね」

みゆと久しぶりに居られて楽しかったのに、なんだか取られたような気がしたただだったんだけど。

「じゃあ、どっちが黒幕なのか探るために推理しますか！」

さすがに、友達の友達は友達だなんてわりきれないけど、今度からはみゆにとりあえず話しかけてみようと思った。

私たちは、放課後図書室に向かった。

「あら、もみじちゃんに、京野さん。いらっしやい」

有栖先生がふわふわと笑って挨拶をした。どことなく緊張した面持ちの水山くん、一ノ瀬さん、日野さんもその場に集まっている。

関係者が揃ったところで、私は相手の顔をしっかりとみて言った。

「日野ひまりさん。あなたが、銀河の彼方を盗んだんですよ

ね」

日野さんは傷つくかもしれない。だけど、私はこの方法を選んだ。

「なんで私が犯人だってわかったの？」

「まず初めに副部長の証言がありました。サイエンス部の姫が、部員に銀河の彼方を盗むようにと言っていたという」

「やっぱりあいつ裏切ったか」

私たちにとっては心強い味方だけど、水山くんにとっては裏切り者だったらしい。

「でも、私たちはサイエンス部の一ノ瀬さんと日野さんのどちらが姫と呼ばれているのか知りませんでした。なので、推理することにしたんです」

隣のみゆに向かって頷く。

「サイエンス部の姫は時々噂になっていました。一番最初に聞いたのが二年前。まだ一年生の一ノ瀬さんが入学する前です」

「つまり、サイエンス部で姫と呼ばれているのは日野さんしかいないというわけ」

そう言って、推理を終える。もしも一ノ瀬さんも姫と呼ばれていたとしたら推理が成り立たないけど。はったりくらいにはなるだろう。

「ここで誤魔化しても、きつと誰かに聞いたらすぐばれると思うので、もう包み隠さず話すことにする」

彼女の顔が無表情から、何かを訴えるような顔になった。

それを見て、考えるより先に、口から言葉が飛び出ていた。「どういうことか、全部話してくれるかな」

この子の話を、聞きたくなかった。そうするべきだと思った。

「銀河の彼方は、私にとっては最高の小説です。だけど、周りの人たちにとっては分厚いし、古いし、どちらかと言うと不人気な本なんです。それでも、私はいいと思っていました。有栖先生の言葉を聞くまでは……」

それは、ある日の放課後のことです。キリが良かったので、有栖先生の仕事を手伝っていたら棚が足りなくなりました。図書館では、よくあることです。毎シーズン棚一段分ずつ本が入ってくれば、棚が足りなくなるのはあたりまえのこと。そういう時はいつも、古くなった小説を抜いてスペースを作っています。この学校ではぬかれた本は、除籍され処分されることになります。その本に、銀河の彼方が選ばれてしまったんです。

『有栖先生、私この本が大好きなので除籍なんてしないでください』

私は、有栖先生と仲が良かったのできつと聞き届けてくれると思っていたのですが裏切られました。

『この本、ほとんどあなたしか借りてないのよね』

なら、と一つアイデアが出ました。他の図書館では、除籍本を譲渡しているところもあります。

『その本、私にください！』

その本を私に譲ってもらえれば……。だって銀河の彼方はもう絶版になっていて、学生の私には手が届かない値段だったから。

『ごめんなさいね。図書館の本はみんなのものだから。あなたに渡してしまうと不公平になってしまいうでしょう？』

その言葉に、私は何度も反論しました、

それでも、有栖先生が聞き届けてくれることはありませんでした。だから、私は思ったんです。捨てるくらいなら私が持つて帰ってしまおうと。私がやったことは、本好きとして当然のことです。後悔なんてしていませんし、誰に言われても私は銀河の彼方を譲りません。」

必死に虚勢を張っている。自分でも、本を持っていったのが悪いことだということにはわかっているらしい。そこで、ふと後ろからのんびりした声が聞こえた。

「ひまりちゃんにとってその本は、そんなに大事なものであったのね」

有栖先生が、少し後悔したような顔でそう言った。

「こんなことになるくらいだったら本を譲渡しておけばよかった」

先生は、最初から日野さんを疑っていたのかもしれない。道理で、図書館の貸出履歴も個人情報だからと言って見せてもらえないし話も聞かせてもらえないと思った。

「有栖先生……なんで、捨てるためにわざわざ本を見つけ出

そうとするんですか？」

日野さんが、泣きそうな声で言った。最初の無表情は、学校生活で身につけた仮面だったらしい。

「わかった。私が間違っていたわね。別に、除籍された本をどうするかは、司書に任されているわ。きちんと除籍が終わったら本はじゅりひまりちゃんに譲渡してもいい」

有栖先生は、心に決めたように言った。私も、本は読む人に受け取られるのがいちばん正しい気がする。

「昔ね。私が渡していた本を、転売していた生徒がいたの。もちろん、譲渡本を営利目的で使うことは禁止されているからその生徒は嚴重注意、きつと彼には本に嫌な思い出が残ってしまったでしょうね」

多分今、有栖先生はその生徒のことを思い出している。譲渡本を転売するなんて、その生徒はきつと本当は本が好きではなかったかもしれないのに。

「そんな人をもう作りたくなかったの。でも、そのせいで別の悪いことをする人が出るなんて……大人なのに私は失敗してばかり。ひまりちゃんは、本を好きなまままでいてね」

そう言って、有栖先生はいつもの業務に戻って行った。いつも、面白い本を教えてくれる、生徒のことを考えて、行動してくれる先生。

「いい先生だね。今回のことだって、そんな大事にはならないと思うよ」

「うん。ありがとう」

そうして、一ノ瀬さんの方を見た。

「それで、一ノ瀬さんは姫って呼ばれてたの？」

私の推理が間違ってたなかったら良かったんだけど。

「一ノ瀬は姫って言う柄じゃないだろ」

何故か一ノ瀬さんじゃなくて、水山くんが答える。

「ん？ 今なんて言った」

一ノ瀬さんは水山くんに無言で圧をかける。これじゃあ確かに姫ってあだ名は似合わないな。

週末、意を決してみゆと一緒に遊びに行こうと誘って、家を出てきた。どこに行くかは、伝えていない。待ち合わせ場所で待つ間は、落ち着かない。明るい茶色のトレンチコートを手でいじった。頭にはハンチング帽が乗っている。

「その服、ホームズみたいだね」

みゆにそう言われて、私は照れくさくなって、コートと帽子を取ってバッグにしまった。やっぱり、ホームズの仮装なんてちょっと気取りすぎたかな。

「ありがとう、でも、私もうホームズになるのはやめにする！ 私、反省したんだ。有栖先生は大事にしたくなかったのに、私が関係者を集めて謎をとこうとしたから」

自分の思いの丈を、みゆに訴えた。そうだ、必死で走り回って、少し薄汚れたクマのぬいぐるみを見つけ出したあの頃の私のほうが何倍も人を笑顔にできたんだ。

「有栖先生に助手を作ればって言われて、真っ先にみゆのか

おが浮かんだ。本を探している間いろんな人と話して、楽しかった」

そう話すうちに、今回の調査の楽しかったことが蘇ってくる。特別な力や才能なんて、なくてもいいんだ。もう少し気をつかえたらいい。事件は大事になればなるほど扱いは繊細にしないといけないから。

河川沿いを、ゆっくり歩く。もみじの葉っぱがハラハラと舞い落ちる季節だ。

「もみじって、なんでいろんな色があるんだろうね」

ふと、思いついたことを言った。

「もみじも何年も生きていると、気分によって色が変わるのかもしれないね」

助手は、探偵にたくさんヒントや情報を与える存在なんだろうな、そう思った。私にはそんな発想、絶対にでないだろうから。

「そっか、木も人間も一年たつだけで全然変わるのかもね」

その時、ひとつのペットボトルロケットが綺麗に空高く打ち上がった。

「やったぞ！ ついに成功したぞ」

部長の大きな声が、河川敷に響いた。日野さんは、空を見上げて微笑んでいた。

「やっどですか！」

「さすが、部長ですね！」

サイエンス部の部員たちは、寄り集まって抱きしめあって

いた。いつの間にか部長は胴上げされて、みんな生き生きとしている。

一ノ瀬さんが、日野さんとハイタッチした。二人とも事件なんてなかったかのように笑顔だ。日野さんは、心から信頼できる仲間がたくさんいる。私がした失敗も取り返しがつかないほどじゃない。

なんだか、可笑しくなって声を立てて笑った。

それを見て、みゆは不思議そうにしていた。私が探偵になって、事務所で働いている時、みゆはその隣で助手をやっているだろうか。そうなれるように、私も精一杯探偵として自分の人生を生きていきたい。

ネオンライト

鹿児島実業高等学校 一年

泡沫 海月

「じゃあ、俺帰るから」

彼は少し黄ばんだシャツに袖を通しながら言った。秒針を刻む音が部屋にひびいている。重たい体を起こし、髪をかきあげた。私は今まで何をしていたのだろう。ぼんやりとする頭を無理やり動かし周りを見渡した。脱ぎ捨てられた服、シャツを羽織る彼、ベッドに横たわる自分の姿。状況を理解するにはそれだけで十分だった。

「なあ、話聞いている？ 寝ぼけてんの？」

「えっ、ああ。ごめん、ぼーっとしてた」

「はあ。だから、俺先に帰るわ。カードキーよろしく。金は机に置いてるから」

ネクタイを締めながら言う彼の薬指がきらりと輝いた。

「あつ、ありがとう。あの、それで次はいつ会えそう？」

「さあ。まだわかんない。でも会う頻度は減るかも。最近妻に怪しまれててさ、飲み会が多いだの、残業多過ぎだの。実際、仕事は忙しいから複雑な気持ちになるんだよな。ははっ。まあ、いずれにせよバレてなさそうだから。近いうちにまた

連絡する」

「そっか、連絡待ってるね」

彼との関係がばれてしまうのだけは避けたいし、会う回数が減っても仕方ないかな。彼を下手に刺激しないように当たり障りのない返事をした。すると、分かりやすく不機嫌になった彼が膨らんだポケットからタバコを取り出した。慣れた手つきでタバコに火をつける彼を横目に私はそっと鼻と口を手で覆いうつむいた。昔からどうしてもタバコの匂いは好きになれない。そんなことを気にするそぶりもなくタバコを吹かす彼はあざ笑うように言い放った。

「お前は、いいよな。呑気で。バレても失うものがないし、暇なんだろう。まあ、そうじゃないとわざわざおじさん相手にこんなことしないもんな」

「えっ、違う。私は」

「何が違う？ どうせ金か体目当てだつてのに。やれば誰でもいいんだろ」

口をつぐみ、何も言わない私を無視して灰皿にタバコを押し付けた。

「まあ、なんだつていいや。興味ねえし。それじゃあな」

彼はジャケットを勢いよく羽織りこちらを見向きもせず部屋を飛び出した。部屋には彼の香水の香りとタバコの匂いだけが残っていた。フラッシュバックした記憶をかき消すように側にあったスマホを手取る。アプリを開き、絵文字付きのコテコテのメールに躊躇せず返事をした。彼以外にも私を

必要としてくれる人はたくさんいるんだから。その人に尽くせばきつと。

「どうせ金か体目当てなんでしょ」

ふとよぎった彼の言葉に思わず顔をしかめた。どうせ私の気持ちなんかわからないくせに。お腹の中に溜まった真っ黒な何かを吐き出すように息を吐き、スマホに視線を戻した。

彼と最初に出会ったのは友達に勧められて始めたアプリだった。最近ニュースでも話題になっていたそのアプリは、俗にいう出会い系だった。チュートリアルを飛ばし、一番盛れた自撮りの写真をプロフィールに載せる。自分の顔が上の下であることは自負していたから、十件くらいはメッセージがくるだろうと想像を膨らませていた。他のアプリを開こうとしたときスマホが振動し一件のメールが届いた。そのメールをはじめに止まらない通知に焦りと興奮を感じた。メッセージを確認しようとした時、ふと目に入ったのが彼からのメッセージだった。

「こんにちは！ プロフィール拝見しました。めっちゃくちゃ可愛いですね。よかったですらご飯食べに行きませんか？ 美味しいお店知ってるんですよ」

アイコンのイケメンの写真とプロフィールを見て好感を覚えた私は、彼との食事を快く承諾した。バイト代で買ったピシクスのワンピースに見様見真似でしたメイク、変な方向に巻かれた髪。そんな私と不釣り合いなほど彼は清潔感のある格好をしていた。流れるようにエスコートされ、着いた店は、

夜景が綺麗に見えるおしゃれなレストランだった。最初は緊張で手をつけられなかった食事も、彼の穏やかな雰囲気と面白い話のおかげで緊張がほぐれ、今までで一番と言えるくらい楽しく食事をする事ができた。彼とは年齢が二十歳ほど離れていたし既婚者で子供もいたけれど、私にとってはかっこいいお父さんみたいな存在だった。何度も食事をし、会話を重ね、いつの間にか彼と過ごす時間が、私にとって必要不可欠なものになった。

そんなある日、めずらしく彼が二軒目に連れて行ってくれたのだった。そこはネオンライトがキラキラと輝く夜の街のバーだった。隣で夕日のようにきれいなカクテルを飲む彼の頬はかすかに赤みを帯びていた。いつもより饒舌になった彼は突然、家族の話始めた。楽しそうに思い出を話す彼。特に好きでもないカシオレを口に運び一思いに飲み込む。ずい。そんな一瞬の感情に魔が差してしまった私は取り返しのつかないことをしてしまった。その後、目が覚めたのは見知らぬ部屋で、無造作におかれたお金だけが残っていた。その日から彼は人が変わったようだった。会うたびに体を求め、お金だけをもらう日々。私は寂しさと同時に少し安心感を抱いた。こんな関係になっても私を必要としてくれている。彼は私のことを愛している。夜の街はネオンがキラキラと光り昼間とは打って変わって賑やかだった。夜の冷たい空気が肌を突き刺す。

「このまま一生夜だったらいいのに」

そつと眩き、家路を急いだ。

家に帰り着く頃には時計の針が夜中の二時を指していた。

私以外帰ることのないこの家は、廃屋なのではと思うほど雑草がのび、郵便受けから溢れたチラシが散乱していた。この家にはそれほど愛着もないし、むしろグチャグチャして汚い方が落ち着くためあえてそのままにしている。ドアノブに手を伸ばしたその時、ついているはずのないリビングの電気がついていてことに気づいた。静かに扉を開けると、真っ赤なピンヒールと見覚えのないビジネスシューズが並んでいるのが目に入った。一度扉を閉め、ため息をこぼした。少しでも期待した自分が馬鹿だったのかもしれない。深く息を吸い込み、もう一度扉を開けた。先ほどの靴には目もくれず一目散りにリビングに向かう。乱暴にドアをスライドさせると、そこにはめずらしくスーツに身を包んだ母の姿があった。

「あっ、お帰りなさい。こんな時間までどこ行ってたの。心配するじゃない」

猫なで声で言う母は、最後にあった日から何倍も老けて見えた。

「何、突然。帰ってきたと思ったらいきなり母親づらして」「そんな言い方しないでよ。お母さん、あなたと話をしたくて仕事を休んで帰ってきたのよ」

「今更何を話すことがあるの？ 気持ち悪いんだけど」「お願い。話を聞いてちょうだい。今までのことを謝りたいの。お母さん、仕事で手一杯で、全然あなたに構ってあげら

れなかった。ご飯とかも全然作ってあげられなかったし、ほしいものも買ってあげられなかったわね。本当に申し訳ないと思ってるの。だから、もう一度チャンスをちょうだい。お母さん、ちゃんとするから。それに、あなたもこんなに大きくなったし、お互い支え合っているでしょう？ どうかしら？」

水の入ったグラスに手を伸ばし、母に向けて水を放った。バシヤツと言う音が静かに部屋に響く。

「お互い支え合っている？ ふぎけたこと言わないで。あなたは知らないでしょ。水だけでお腹を満たす寂しさも、暗い部屋に一人でいる怖さも。みんなが当たり前に持っているものを持っていない虚しさも。何がほしいものも買ってあげられなかったわねだよ。何も知らないくせに」

握っていたグラスを床に投げつけた。

「でも、あなたのためを思ってやったことなのよ。お母さんはね、あなたを、座っているだけでご飯が出て来ると思っている奴らみたいに育てたくなかっただけなの。小さい頃から社会の厳しさを味わっていたら大人になった時苦労しないでしょう。全部あなたのためなのよ。実際、そのおかげで今も生きていられるのですよ。ためになってるじゃない」

そう話す母から目を逸らした。

「それで、話を戻すけど、あなたにとっても私にとってもこの上なく良い話じゃない？ この家売って、マンションにでも住んで。私が家事をして、あなたはアルバイトするだけ

でいいの。私ね、ずっと前から専業主婦になってみたかったの。どう、いいでしょ？」

「あんたにとってではでしょ？ 支え合いたいとか言っただけ働くとか、ふざけてんの？」

「だって、お母さんこの前仕事クビになっちゃったの。今まであなたのために働いてあげてたんだから、別にいいじゃない」

「ねえ、その自分のことお母さんって呼ぶのやめてよ。母親らしいこと一度もしたことないくせに」

私の態度に痺れを切らしたのか、母は灰皿から適当にタバコを抜き取り慣れた手つきで火をつけた。いつもの姿に戻った母に思わず顔を顰めた。

「あーあ、昔は聞き分けが良くて可愛かったのに。あんた、変わったわね。やっぱり警察に捕まってでも捨てるべきだったわ。あんたさえいなければ、私は幸せになれたはずなのに。不倫もばれなかったのに。愛するあの人と結婚できたのに。ねえ、責任とってよ。今まで育ててあげた分の金くらい返してくれてもいいじゃない」

「最初からそれが目的なんですよ。育てられた覚えがないのに返すお金なんてないから」

「私がいなきや生まれてすら来れなかったくせに。どうせこんな遅い時間に帰ってくるってことはろくなことしてないんですよ。いいからさっさと金返して。私の人生を返して」

「ふざけないで、あんたにだけはそんなこと言われたくない。」

わたしの苦勞も知らないで。何を言われてもお金は貸さないから。それと、もう二度と顔を見せないで。あなたの人生から出てってあげる。私とあなたは他人だから。それじゃあ、どうぞお幸せに」

これ以上話しても無駄だと思い、リビングのドアに手をかけたその時、突然母が笑い出した。

「あはは、今のあんた何かに似てると思ったら、あのクズ男に似てるんだわ。私が妊娠したって知った瞬間連絡がつかなくなった、あんたの父親に。都合が悪くなったら逃げるとか特にそっくりだわ。よくみたら顔も似てるかも。あはは、ウケるんですけど」

口の中に鉄の匂いが広がる。スカートを握りしめ玄関を飛び出した。外はしんと静まり返り、自分の存在だけがこの世から浮いているような感覚に飲み込まれた。足が重い。息ができない。近くの公園まで無我夢中で走り、ブランコに座った。暗闇の公園はどこか不気味な雰囲気をかもしだしていた。ふと隣のブランコを見ると小さい頃の自分の姿が見えた。破れた教科書、インクで汚れたランドセル。水浸しになった靴。されるがままの自分の姿。抗えば変わると思っていた未来は余計ひどいものになってしまった。あの女の提案を飲んで奴隷であれば良かったの？ ずっと一人で戦い続けなければならないの？ 頭が疑問で埋め尽くされていく。私は、なんで生きているの？ わたしは、わたしはっ。誰でもいい、私をこの世界にひとりぼっちにしないで。苦しい。寂しい。体がだんだんと暗闇に

飲み込まれる感覚に襲われた。

気づいた時にはオレンジ色の空から光が差し込んでいた。スカートにできたシミを見て自分が泣いていたことに気づき慌ててハンカチを取り出した。いつもの何倍も眩しい朝日が煩わしく思え、日陰に隠れる。誰でもいいからこの隙間を埋めてほしい。ポケットのスマホに手を伸ばした。画面には彼からの一件のメッセージが表示されている。

「今夜、いつもの場所で待ってる」

私の心臓が再び動き始めた気がした。

仕事帰りの会社員と学生でごった返す駅は私の一番嫌いな場所だった。私が一生着ることのできない制服。チェックのスカートに真っ赤なりボン、上等なブレザー。鞆についているお揃いのぬいぐるみ。楽しそうに話す姿。私とは住む世界が違う。昔は羨ましいと思っていたけれど今はただただ虚しいだけ。妄想するのも飽きてしまった。彼との待ち合わせ場所はこの駅を抜けた先にあるいつものおしゃれなバーだった。予定よりもだいぶ早く着き、ガラスに映る自分を見つめ服装を整える。お気に入りのワンピースにこだわった髪型。今日は今までで一番可愛い自信がある。そうこうしているうちに待ち合わせの時間になった。目の前に現れた彼は、しわひとつないシャツに新品のジャケットを着ていた。なんだか最初に出会った日のことを思い出した。あの日は今までで一番楽しい日だったな。

「いつもの場所、予約してるから。さっさと行くぞ」

「うん、今日は誘ってくれてありがとうね。ちょうど会いたいと思ってたんだ」

良かった。彼は私を一人にしないでくれる。無言で歩く彼の後ろを早歩きでついて行った。

ホテルに着く頃にはだいぶ息が上がっていた。部屋に入り、着ていたふわふわの上着をハンガーにかける。

「先にシャワー浴びてくるね」

「いや、今日は別にそういうのじゃないから」

驚く私を横目に、彼はビジネスバッグからなにかを取り出すと私に差し出してきた。その手には四角く膨らんだ封筒が握られていた。

「もう、今日で終わりにしよう。妻にバレたくないんだ」

「えっ、終わりにしようってどういうこと？ まだバレてないんだよね。じゃあ、バレないように待ち合わせ場所とか変えてみようよ。それともホテルを変える？ 変装とかする？」

「はあ、そういう問題じゃないんだって。俺は真剣に話してるんだけど。大体なんで素直に受け入れてくれないわけ？ 金か体目当てなんだろ。俺にこだわの意味がわからないんだけど」

目の前が真っ暗になった。

「私は、お金なんか必要ないし、体も求めてない。ただあなたと一緒にいたいだけだから」

「何それ、この期に及んでまたそれ？ もういいからさ。このお金で我慢して」

「お金の我慢して」

「ちっ、違うお金はいらないんだってば。私はあなたに必要なとされたくて」

「もういいって、めんどくさいんだよ。あなたのため、あなたのためって。俺に何を期待してるのか知らないけど、そういう感情を勝手に持たれても困るから。最初から金目当てで近づいたくせにまだ俺に何か欲してるの？ 気持ち悪いんだけど。俺の替えはたくさんいるし、お前の替えもたくさんいるの。どうせそんなもんだから。最初の頃は、お前も可愛かったのにな。ほんと残念だよ。さっさと次を探しなよ」

その瞬間、私の何かが壊れる音がした。彼を床に押し倒す。馬乗りになり首に手を伸ばした。全身が燃えるように熱い。

「ねえ、なんで。私はあなたにあんなに尽くしたのに。初めてだってあげたのに。私は必要なの？ 用済みなの？ ねえ。私はなんで生きてるの？ なんのために生きてるの？ 逆らわなければ愛してくれるの？ 友達ができるの？ なんで私はこんなに満たされないの？ 私はこれからどうすればいいの？ ねえ、なあ、おい答えろよ」

ピクリとも動かない彼から返事が返ってくることはなかった。彼の首についた真つ赤な跡をそつと撫でる。お腹から乾いた笑いが込み上げてくる。ふと彼の首のそばできらりと輝いているものが目に入った。それは彼がいつも身につけている指輪だった。なんでこんなものがここに落ちてるのだろう。拾い上げたそれを投げるとベッドの下へと姿を消していった。彼の横に寝そべり、そつと抱きしめる。

「あはっ、あはは。あつたかい。人ってこんなにあつたかかったんだね。一緒に寝るとあたたかいんだね」

目の前がぼんやりしてうまく見えない。彼の匂いで肺が満たされていく。

「おやすみなさい。良い夢を」

重い瞼を閉じ彼の体に身を寄せた。その夜は久しぶりに夢を見なかった。

月とすっぽん

鹿児島実業高等学校 二年

上別府 夢

ごくありふれた、けれど決して平和とは言えない日のこと。私の家に、それは届いてしまった。誰かの血が滲んだように、淡い赤色で染まった、ありがたい紙が。

遅かれ早かれ、いつかそれが届いてしまうことは分かっていた。逃げられない運命だと、覚悟していた、筈だった。しかし、いざ実物を手にして見ると、そんな覚悟なんてどんな紙屑よりも軽いものだということ、嫌でも思い知らされた。たかが紙切れ、されど紙切れ。紙切れ一枚を前に、私の膝はこちらまでつられてしまいそうなほど笑っていた。なんて情けない。お国のために戦えるのだ。誇らしいことじゃないか。そう思ふべきなのだろう。この身一つ捧げられないで、何が日本男児だ、と。そう言い聞かせなければいけない。どれだけ戦が怖くても。どれだけ家族が悲しもうと。この時代に、この国に生まれた以上、それが普通なのだから。

赤紙を我が家に送り届けたのは、昔からよく知っている幼馴染だった。役所に勤めたとは聞いていたが、まさかこんな形で彼の働きぶりをみるなんて。運命というのは、時に素晴

らしく、時に残酷だ。

「俺だって、渡したくなかったさ」

そう、苦しそうに呟く彼。そりやそうだろう。誰だって、知人が戦地に行くきっかけを作りたい筈がない。彼は何度見知った顔にこの紙を渡し、何度その背を見送ってきたのだろうか。お国のために、その言葉の重みを一人噛み締める彼に、それを尋ねることは出来なかった。

「仕方の無いことだろう。日本男児として、当然のことだ。お前も、形は少し違うが役目を果たしている。誇らしいことだ」

私には、そう彼を労うことしか出来ない。役目を変わってやることも、二人して運命に抗うことも出来ない。あと数十年、生まれる時代さえ違えば、もっと長く友達として過ごせただろうに。どうやら、運命という二文字で全て片付けられるほど、私は単純ではないようだ。戸を掴む手の力が自然と強まる。ぴしり、と家が音を上げた気すらした。

「ほら、役人が立ち止まってどうする。早く次の仕事に行つてこい。何分も油を売れるほど、暇じゃないだろ？」

私は出来る限りの笑みを浮かべ、彼の背を押した。それが、私が彼にしてやれる、最後のものだった。

赤紙が届いたと知った母は、近隣の知り合いに伝え回った。私の息子が、ついにお役目を貰ったのだ、と。周囲にそう語る母の顔は、誇りと喜びで満ちていた。しかし、私は知っている。母がその笑顔の下に隠した、本当の心情を。

「嗚呼、お前もかい。お前も、とうとう呼ばれてしまったのかい」

太陽と月が持ち場を交代し始めた頃、母はぼつりと呟いた。

喜びとはかけ離れた、寂寥に満ちた声音。微かに震えたそれが鼓膜を揺らし、心まで揺らした。惨い話だ。愛する家族を二度も戦地に送り出さなければならぬなんて。一度父を送り出した母は、帰還出来る可能性がほとんどないことを知っている。戦地に向かった者の成れの果てを、しかとその目で見てきたのだから。

「お国のため、そうだろ？ この身をお国のために使えるのなら、それ以上に幸福なことなんてないじゃないか」

酷く萎んだ母の背を撫でる。背の骨は浮き出て、今にも折れてしまいそう。揺れる肩、畳に透明な液体がぽと、ぽとりと落ちては染み込んでいった。この液体を止める手立てを、私は知らない。知っていたとして、実行出来る筈もない。私はただ、母の背を撫で続けることしか出来なかった。

日が昇り、また日が落ちる。出発するまでの数日間は、まるでつまらない映画を見ているようにゆっくりと過ぎ去っていった。見終わった後の余韻もなく、もう終わったのか、なんて言葉が浮かぶだけ。名残惜しさを感じる余裕も、逃げ出す気力も今はなく、ただ淡々と荷造りを終えた。日本男児として、恥のない生き方を。その言葉を、何度か心の中で反芻する。普通にできるように、なれるように。

「行ってきます」

最後の家族の姿を目に焼き付け、右手で敬礼をして見せた。どうか家族だけは無事でいてくれ、そう瞳に祈念の色を映しながら。

「なあお前は、生きて帰ったら何をしたい？」

送り出されてから数日経ったある日の夜。同世代の男に声をかけられた。彼とはこの数日間で何度か会話を交え、今ではすっかり良き話し相手となっていた。

「そんなこと、聞いてどうする」

生きて帰ったら、なんて。お役目を果たす気もないのか、こいつは。ぶっきらぼうに返答すれば、呆れにも似た息が一緒に口から零れる。彼は疲れも感じさせない笑顔で言葉を重ねた。

「ただの気晴らしさ。こんな場所にずっと居れば、気が狂ってしまう。たればの話でも、明るい話をしようじゃないか」
明るい声音に、明るい笑顔。こちらまでつられて明るくなる彼の様子に、僅かに口角が上がった。生きて帰れたら、私は。

「家族に会いたい。皆で美味しいご飯を食べて、一緒に笑って、一緒に泣いて、一緒にずっと過ごしたい」

心の奥にしまい込んだ願いが、知らぬ間に零れていた。母の作った料理を皆で食べる。美味しいね、そう言って笑う。時には喧嘩して、また仲直りをして。そんな当たり前の日常が、どうしようもなく恋しくなった。何故か視界がぼやけ始

めれば、頬に伝う水滴の存在に気付く。それを袖に染み込ませ、彼に気付かれないように顔を背けた。

「お前は、家族が大好きなんだな」

彼の大きな掌が私の背を撫でる。一、二歳しか変わらぬ彼の彼から、まるでひだまりのような安心感を感じた。その温かさに身体を任せ、目を伏せる。嗚呼、そうだ。大好きで、大切だから、私がおここにきた。お役目が、日本男児として、そんな綺麗事は知らない。どれだけ自分に言い聞かせようと、こんな国の当たり前の形になんてなれはしない。家族の為に、目的はそれだけだった。

「俺は……生きて帰れたら美味しい飯を食いたいな。腹いっぱい食ってやるんだ」

彼は冗談めかした声音で願いを口にした。その手は、未だ私の背を撫でている。

「お前は、どれだけ食い意地がはっているんだ」

私は頬に流れた跡を掌で拭い、大きな笑みを浮かべた。思い詰めていた心が、次第に軽くなって行くのを感じる。彼の表情は、心做しか安堵の色を浮かべていた。

彼と何の変哲もない会話を繰り返したところで、時間が止まってくれる訳ではなかった。ゆっくりと、そして足早に、その時は迫っていた。

「明日、私は飛び立つよ」

ついに、出撃命令が出された。「必ず死んでこい」上官の

言葉が頭の中で木霊する。

「お前もか。お前も、征くんなんだな」

どこかで聞いたことのある台詞を、彼が発する。そうだが、ついに私の番だ。きて欲しくなかった。だが、来なければならなかった私の番。目を閉じれば、家族の柔らかな笑みが浮かぶ。その横に映るのは、ケタケタと笑う骸骨の姿。私を迎えに来る、死神という輩だろう。逃げ出すことは出来ない。その事実が、身も心も裂いてしまう程苦しかった。

「ここに来た以上、仕方ないことだ。それは、お前だって分かっているだろう？」

寂しげに瞳を揺らす彼に、何とか口角を上げて見せた。彼が最後に見る私の姿が泣き顔なんて、情けないにも程がある。まだ未来ある彼に託すのは、そんな情けないものであつてはいけない。私は、ポケットから手紙を取り出し、彼の掌に置いた。ぐしゃりとなった皺だらけの手紙。彼は、不思議そうに首を傾げた。

「お前が生きて帰ったら、それを私の家族に届けてくれないか。後生の頼みだ、宜しく頼む」

彼の返事も待たずに、それを彼に握らせた。彼が生きて帰れる保証なんてなかった。もし彼が帰ったとして、私の家族が生きるといふ確証もなかった。ただ、どうしても継りたかった。私よりも可能性のある彼に、家族への想いを託したかった。

「分かった。必ず、俺がこれをお前の家族に届けよう」

彼は、そう力強く頷いて、手紙を丁寧にポケットへしまつた。その眼差しは、陽の光よりも暖かで、月光よりも澄み切っていた。

「有難う、有難う……！」

私は、両の腕で彼をしつかりと抱きしめ、そう呟いた。涙を含んだその声は、きつと震えていただろう。それでも彼は、ただ受け止め、背を撫で続けてくれた。その温もりに縋りながら、私は瞼を閉じた。辺りの闇に、溶けて消えてしまえるように。

私が飛び立つ空は、酷く澄んでいた。この世に争いなんてない。そう皆を騙してしまえる程の美しさに、喉奥から乾いた笑みが零れた。この空を、家族も見ているのだろうか。飢えてはいないだろうか。まだ、健やかに過ごしているだろうか。瞳に溜まる液体が溢れてしまわぬよう、長い間空を見上げていた。液体がすべて蒸発するには少し短い時間。その時間しか、私には与えられていなかった。

「何をしている。早く乗り込め」

上官に背を押され、私は機体に乗リ込んだ。その機体は、我が身を守ってくれるものではなかった。共に爆ぜる、運命共同体。意味をなさないヘルメット。我が命は既に、時限爆弾と何ら変わらないものになっていた。操縦桿を握り、機体を浮かせる。この頼りない機体と共に突撃したところで、せいぜい数人の命を巻き添えに出来るだけだろう。この国は本

当に、あの大国に勝てると思っっているのだろうか。敵軍に近付く。その空母の大きさをや、我が軍がなんともちっぽけなものに見えた。

「ホタホタホタツ——」

基地の通信室にモールス信号を送る。今から、私はあの空母に突撃し、この人生に幕を下ろすのだ。なんて、恐ろしいことだろう。どうしても指が震えてしまう。その震えを誤魔化すように手に力を込め、降下した。あと五十メートル、四十メートル、三十メートル。周りの友軍機には既に撃ち落とされているものもあった。嗚呼、母よ。腹を痛めて産んだというのに。自ら敵軍に突撃し命を落とす息子をどう思う。故郷で未だ赤紙を配る竹馬の友よ。自らの手で友を殺したと、そう自身を追い詰めないでくれ。空母は目の前に迫っていた。あと、十メートル。どうかどうか、貴方は貴方の人生を。この地に向かうことを決めたのは、この私なのだから。血に囚われることがないように、この先を生きてくれないか。なあ、たった一人の、兄さんよ。

「ツ——————ブツツ」

モールス信号が途切れた。

玉音放送を聞いてから数日経った頃。俺の家に、それは届いた。皺だらけで、所々汚れた手紙。それが弟からの最期の手紙だと、分からないほど察しの悪い男ではなかった。

それを送り届けたのは、弟と同じ特攻隊員だった。彼は出

撃命令を受ける前に、この国の負けを知ったのだという。彼は、俺の顔を見て少し驚いたようだった。目を見開き、慌てたように目を逸らしていた。

「この手紙を、任された。彼は、最期まで家族のことを……」

ぼつり、ぼつりと語る彼の肩に手を置いた。無事に送り届けてくれて有難う、そう伝えて。彼の様子が落ち着いた頃、戦地での弟の話を聞いた。その姿は、俺が知っているものと何も変わらなかった。ただ、彼の前で二度も泣いたこと以外は。

弟は、俺の前で一度も泣かなかった。同じ年、同じ日に、同じ母から生まれたとは思えないほど、弟は立派な男だった。俺のように捻くれてもない、母を困らせてもない。立派な立派な、自慢の弟だった。

「赤紙が、届いたんだ」

あの日、弟がその紙を見せてきた時、心の臓がびたりと止まってしまった気がした。なんで、だって、どうして。その紙に書かれた名前は、確かに俺のものだった。長男は、大丈夫だと聞いたのに。真っ先に感じたのは、我が身に迫る死への恐怖。次に感じたのは、赤紙が未だ届かない、弟への憎悪だった。どうして、本来ならば、お前に届く筈なのに。どうして、お前が生き残るんだ。そんな醜い思考ばかりが脳を占めた。こんな兄、さっさと死ねばよかったのに。今となれば、そう思う。

「兄さん、大丈夫。私が行くからさ」

弟は、狼狽える俺にそう声をかけてきた。嘘だろう、と耳を疑った。自ら死に行くなんて、我が弟はそこまで酔狂な男だったのだろうか。いや、違う。弟は、そんなおかしな者ではなかった。このくだらない兄の身代わりに、戦地に向かうと言うのだ。

「幸い、私と兄さんは顔が似ている、そっくりだ。だから、誰にも気付かれない。顔見知りだって間違う私たちを、見たこともない政府の者が判別出来るわけがないだろう」

悪戯を考えついたような、小さな笑みを浮かべる弟。その足は、震えていた。それはそうだ、誰だって、死にたい訳がない。弟は不治の病に侵されている訳でも、心身に重篤な障害を負っている訳でもない。ここで兄を見捨てれば、これからも健康に生きていけるのだから。弟だって死にたくない。役目を果たさなければいけない。そう分かっていたのに。

「そう、だな……頼む、俺の代わりに、行ってくれるか」

縫ってしまった。弟の命と俺の命を天秤にかけた時、長男である俺の命の重さの方が重かったのだ。弟を見殺しにする兄に、弟はほんの少し寂しげに瞳を揺らした。それを隠すよう、瞼を下ろし、決心するように目を開けた。

「勿論」

その頼もしい言葉に安堵した時、己の愚かさを知ったのだ。だが、もう遅い。一度手にした安全を、投げ捨てられるほど勇気はなかった。そんな勇気があるのなら、最初から弟を見捨てるなんてことはしなかった筈だから。

弟が出発するその日、顔を見る事が出来なかった。ずっと部屋に閉じこもり、隅に身を置いていた。行ってきた、その声が嫌に耳にこびりつく。弟を見送った母が声をかけてきたが、それすらも聞こえないフリをした。俺は、弟を見捨てたのだ。俺なんかよりずっと素晴らしい、人格者である弟を。顔がただ似ているだけの、屑な我が身を守るために。今更、弟の安全を祈ることもはばかられる。だが、そうすることしか出来なかった。どうして私を見殺しにしたの、そう弟に叱咤されなければ、この心が救われることはない。悪かった、何でもするから許してくれ。そう謝らなければ。

だが、弟が帰ってくることはなかった。敵軍に突撃し、骨一つ残らなかつたのだ。

手紙を届けてくれた彼を帰し、戸を閉めた。一人になった家の静けさとは、こうも虚しいものなのか。あの優しい母すら居なくなつた我が家に寝転がる。母は、病に倒れた。栄養のあるものを食べられず、医者にもかかれず、苦しみながら息絶えていった。最後に残つたのは、屑で愚かで、生きる価値のない、ゴミのような俺だけ。嗚呼、俺が行けばよかったのに。何度そう思つたつて、弟が帰ってくることはない。虚しさが胸に蓄積されるだけだった。

弟からの手紙は、読むことなく燃やした。どうせ、恨みつらみが書かれているだけだろう。びりびりに破り、燃やして

やった。こんな兄を持った弟を心底哀れんだ。こんな男を息子に持った、母と父もなんて可哀想なのだろう。

綺麗な花から摘まれるように、立派な者から消えて行く。凜として咲く花が、隣の雑草に枯らされるのだ。その雑草は、可憐な花になれる訳でもなく、ただ隣の花の生を吸い取るだけ。邪魔でしかない雑草を、未だ生かしているこの国は何なのだろう。花と雑草の見分けもつかず、花を枯らし雑草を増やす。幾つもの花を刈り取ったくせに、足元の雑草には何も気付かない。そんな国が、あの大国に勝てる筈無かつたのに。「なあ、お前は、本当に俺の代わりに死んでよかったのか。兄の為に、その身を捨ててもよかったのか」

一人の家に、一つの問いが投げられる。その答えは、知ることすら出来なかつた。

『画家とキャンバス』は仮面舞踏会で踊る

鹿児島高等学校 二年

佐々 さやか

私が商売をするなら、キャンバスには何も描かない方がよく売れるのだろう。

それでも真っ白なキャンバスを見てしまったら筆を走らせないわけにはいかないだろう。

列に並んだ男女がおずおずと手を取り合う。私も、緊張を手のひらににじませながら、相手の手を取った。流れてきた音楽は意外と陽気で、少し拍子抜けした。リードは相手。私は基本、足のステップしか踏まないが、どうも自分にはこのダンスが似合うとは思えず、ところどころで、たたらを踏んだ。

ここはお城の舞踏会。貴族たちと、その御子息、御令嬢、関係者が集まり、社交を楽しむ場。きらめくシャンデリア、照りつける頭上の光に目を細めた。

うだるような暑さだ。

刺すような太陽の日差しが身体中を痛めつけ、モヤっとし

た空気が絶えず皮膚にまとわりついた。ここは舞踏会でもお城などでもなく、一ヶ月後に迫った体育祭で披露するフォークダンスを練習する炎天下のグラウンドであった。

直方体のスピーカーからブツブツと異音が鳴る。次いで曲が流れてきた。校庭に一列で並んだ男女はペアを作り、互いに手を取り合う。私の相手は同じクラスの男子だ。今は隣に並んだ人と練習をしているが、本来は学年関係なく異性を自ら誘い、ペアを作り、踊るものらしい。どうやら百年以上続く学校の謎の伝統の一つらしく、これを機に年上の彼氏をゲットしようとする後輩勢力が毎年数人いるとかいないとか。強面の体育教師に教えてもらったステップを手足でなぞりながら、ふと思う。

招待制のペア作りには、勝者と敗者が存在する。すぐに相手を誘えるコミュニケーション強者と、何もせず受身を取りあぶれるコミュニケーション弱者。何をせよとも誘われる神の加護を受けし者と、交友関係が微妙だったり性格に難があったりして誘われない神から見放された者。様々な友情と思惑が混濁し、そこには勝者と敗者がいた。ちなみに、どちらの項目においても、私は後者であった。

閑話休題。

舞踏会のような制度のそれに生徒の声は賛否両論だった。

反対派の意見として、「なぜ一年に一日しかない行事のために、私の勇気を雑巾のごとくねじりにねじ切らなければいけない

のか。こんなことがあっていいのか!? いや、よくない!!」
という意見が出ており、当の本人であり、私の友達でもある冬ふゆが弁舌を振るっていた。

私も全面的に同意しよう。百歩譲って招待制なのはまだ良いのだ。でも、異性のみというのが気に入らない。昨今の多様性が……とか何とか言い出したわけではない。ただ単にハードルが高いのだ。ただでさえハードルの高い「人を誘う」という行為に、「何のつながりもない男子を」というのが難しさに拍車をかけている。同性でもオーケーだったならば、私ら反対派もいくらか救われただろう。

足を二歩右、次二歩左に、そして回転が入って……：ここのステップどうしても苦手だ。〃次にやること〃を意識しすぎて、足がこんがらがってしまう。心なしか、ペアの男子もやりにくそうだ。申し訳ないと思っていると、間延びしたチャイムが校庭に響く。と同時に、重なった手を離れた。

汗が服と肌の隙間をぬって伝い、拭えないもどかしさに、全身が震えた。こういう日の放課後はやるせなさに、さいなまれるのだ。

二階の渡り廊下を進んだすぐ目の前にある教室が、我ら美術部の本拠地だ。美術室は、教室が集合している本棟とは少し離れた芸術棟に存在している。私は練習で酷使した足を半ば引きずって、やっとの思いで美術室に辿り着いた。挨拶をしたが、返事が返ってこず、教室には誰もいないことが分かった。教室はシンとしていながらも、夏の日差しに当てられ

た空気に場が支配されていた。この、直射日光刺さりまくり、蒸し風呂状態の部屋で今から絵を描くのかと思うと、じわじわと心を巢食っていたやるせなさが、いよいよ芽を出し、つぼみを付け、花開こうとしていた。そのやるせなさは心のマインラス感情を引っ掻き回し嫌な思い出を押し広げていく。

最近、絵を描くことが楽しくなくなっていた。何週間も放課後の時間を割いて、一対一で向き合ってきた大事な我が子に、名前も顔も知らない「審査員」と呼ばれる人間にレッテルを貼られる。他の部員が次々賞を賜って、その華々しい功績が全校朝会で読まれる時、校長は最後にこう締めるのだ。

「美術部の皆さん、おめでとう」と。一体、何が〃おめでたい〃のだ？ 悪魔が囁く。天使が必死に取り繕う。嫉妬は、あなたが悔しいと思っているからこそ生まれる感情だ。

そんなわけがない。嫉妬は努力している人間が抱くものだ。私はそうじゃない。私の中の天使は、天使ではない。人の頑張りを称賛できない、醜い私なのだ。この醜さは私をキャンパスの前に純粹に立つことすら拒んでくる。キャンパスに対する気持ちや段々音を立てて軋んでいた。

それでも、ずっと思っていることがある。

キャンパスに一色目を置くとき、それは案外特別なものではない。「はじめの一步」と体裁は取りつつも、それは未来の芸術への通過点であり、ただの「色」に過ぎない、と。

キャンパスの端を引っ張って、釘を打つ。美術部とは、既

に木枠に布が付いたキャンバスをポンと渡され絵を描くような高貴な部活ではない。自給自足を常に営む、ハングリー精神溢れるロツクな部活だ。まずは前の先輩が筆やナイフで色を塗りたくり、くたびれてしまったキャンバスを、石膏像、動物の剥製、歴代の油絵・日本画などが散乱する僅か八畳しかない美術倉庫から引つ張り出してくる必要がある。

散乱するキャンバスは床に足を踏み入れることを許さず行く手を阻み、古代ギリシアかなんかの石膏像は顔に影を作り不気味にこちらを見つめ、ゴミはただただゴミであった。目標のキャンバスを見つけ、美術室に持っていく。

次にフレームを一、二、三、四辺と外し、布を固定している釘をマイナスドライバーで一本一本抜いていく。その釘の数、一つのキャンバスにして平均二十数本。マイナスドライバーで釘の下をえぐり、てこの要領で引き出す。マイナスドライバーを本来の用途とは違う使い方方で抜いていくので、勢いが余ってこちらに牙を向いてくることもある。この時ばかりは、私は日曜のお父さんか……？ と疑わざるを得ないと同時に、全国の日曜大工お父さんに感謝せざるを得ない。キャンバスから五cm弱頭を出している釘に、力任せに金づちを振り下ろしていると、私の背中側——教室で考えるならば前方——の扉が来訪者を告げた。

白い人が入ってきた。頭のとっぺんから爪先まで、どこまでも白い。唯一、きめ細やかな陶器のような頬が、少し赤くなっていた。

顧問に用事があるなら、勝手に尋ねるだろうと思って、そのまま作業を続けた。白い人は小さく首を回し、辺りを見る。いつも顧問が居座っている美術準備室に行かないあたり、おおかた部員に用事があるのだろうか。気にしないよう振る舞おうとしても、一人しかいなかった空間にいきなり人が入ってきたならば気になってしまうのが人間だろう。それが真つ白い人ならば尚更。うつむきがちな瞳は丸いビー玉をやどしたように、光が当たってキラキラしている。第一印象は完全に「お人形」であったが、瞬きだけが彼女が本物の人間であることの証明をしていた。プリーツの多い段々になったスカート、ひらめかせながらドアに一番近い席に、ちょこんと座った。私はこの学校のセーラー服がアニメみたいじゃなくて若干ガツカリしていたのだが、同じ制服でも着る人の所作一つで随分印象が変わるもんだなど、少し制服を見直した。白い人はおもむろに、鞆から取り出した書籍を広げて読み出す。ページをめくる白く綺麗な指が視線を絡めとった。

白い人に聞いたのだしいとも思ったが、あちらがアクションを起こさない限り、こちらも接触する義理は無いだろうと、話しかけられない性格を正当化して、なんとなく何もしなのも落ち着かないので、窓を開けて風を取り込んだ。

片耳から金づちのガンガンする音が響く。たまに聞こえる紙を擦る音が微妙なスパイスになって助かる。しかし、いい加減知らない人がいながら騒音を立て続けるのも気が引ける。

本を読んでいるから尚更……いやここは図書館でも無いから
本当は気にする必要は一切ないのだが。それでも、気まずい
ものは気まずい……よし。

「あ、あの……どなたかに……用事が……」

「……あ、えっと、上城……かみしろ……さんに」

「ああ、部長……」

部長は、確か三十分前ぐらいに帰ったはずだ。気まずさを
誤魔化す手慰みとして持って持ってきた筆を、部長帰りましたよ、
という意で扉の方に向けた途端。筆の先、赤の絵の具が相手
の肌をかすめた。

鮮やかな赤と、純朴な白のコントラストに目が眩んだ。何
より、とてつもない罪悪感に襲われた。床を絵の具で汚すと
か、制服に思わず絵の具が着いてしまつて親に洗濯を頼むと
かが、ちつぽけに見えて霞むほど、罪の重みが全身にのしか
かつて、弾かれたように頭を下げた。沈黙が流れて、蝉の声
だけが壁を通して響いていた。やがて、その重圧に耐えきれ
なくなつてバネの弾み並みの速度で頭を戻して、絵の具が着
いてしまつた手を力いっぱい引つ張つた。上から、耐えるよ
うな小さな発声が聞こえたが、小規模なパニックを起こして
いる人は、外部からのどんな音にも気づかないものである。
自分にその気が無くても、着いた絵の具を取ろう取ろうとす
る手は水道に急いだ。普段自分の手に着いた絵の具など、石
鹸が入っている網に擦り付けて何とか取るものだが、強く握
つた手が今までの生涯で触つたものの中で何よりも柔らかか

滑らかで、網を擦り付けるのが躊躇われた。もし猫や壺を洗
うとなつた時、人は絶対に網に入った石鹸などという安つぽ
いものは使わないはずだ。

その絵の具は一際目立つた。白シャツに付いたケチャップ
のシミが目立ちすぎると同じだ。すぐに洗えば落ちるはず
なのに、シミのように白い肌に溶け込んで、そこだけが目立
つて仕方がない。必死に石鹸で泡をたてて、爪をたてないよ
う指の腹で擦る。それでも肌の赤色は落ちず肌のきめ細やか
さを示すように残つた。

「本当にごめんなさいっ!!」

「いえ、大丈夫ですよ。気にしないでください」

にこやかに笑つた。月並みの表現だけど花が綻ぶような、
そんな笑顔。でも、眉を下げて少し困っているような愛しい
表情であつた。そんな破顔を前にしても私の頭はインプット
した情報を何の処理もせずアウトプットし、喋つた……とい
うことしか考えられなかった。本当に生きているんだと思つ
た。その息遣いが、まつ毛の動き、手の温もり全てが彼女を
証明していた。すごい、まつ毛長い……白い……というか近
つ。

グツと体をのけぞらせる。体から、あまり聞いたことがな
いような音が鳴つたが、そんなことを思っている場合ではな
い。

「じゃあ、失礼しました」

「あ、はい……」

私の驚愕をよそに、白い人はそのまま机にかけていた鞆をとって、小さく会釈をして美術室を出て行った。部長に用があったのだから、部長がいないと分かればここにいる理由は無い。心臓がギュツとなる感覚を抱えながら、白い人が座っていた席に背中を這わせた。まだ少し温かった。

ん？ 机の中に何か……本？

帯付きのライトノベルだ。緑の細いリボンを垂らした葉が挟まれている。帯は雑な扱いを受けているのか所々が少しだけ破れている。さっきの白い人が読んでいたものだど記憶している。偏見で、もっと丁寧な人に見えていたのだが、意外とそうでもないのかもしれない。そう思うと少し親近感が湧いて顔が自然と緩むのが分かった。本は部長に返してもらおうとも考えたが、私が手を汚してしまったことで起きた事故という責任感と、私がああ白い人に返したいという欲が混じって、自分が返すという結論が生まれた。そう考えている間は帰路をランウェイと見立てて小踊りしそうな気持ちだったが、歩くたびに地面を跳ねる不規則な音と、身をゆでる気温と生ぬるい風の差に頭を揺さぶられて、次第に冷静になってきた。

そうか、「私が返す」ということは「知り合いが全くいない教室に行かなければいけない」ということなのだ。

朝は、返すのに適した時間ではない。なぜならば、相手が教室にいるかわからないし、何より私は白い人の教室を知ら

ない。発表会で自分の番を待っている気分だ。息を吸っているのに心臓が酸素を求めて収縮し続けているような。着々と進んでいる時間と順番に、待つことしかできない。

「おはよく、神妙な面持ちだねえ。なに？ 今日死ぬの？」

「社会的には死ぬのかもしれない」

「そっかあ。頑張ってるね」

「ちよちよちよつと、助けてよ、冬」

何を助けてやれるって言うのさあ、と言いながら斜め前の席に着席する。薄情なやつめ。名前通り心は冷たいのか。そのまま準備をいそいそと始めた冬にダメ元で聞いてみる。

「ねえ、うちの学校にいる全身真っ白な人……って知ってる？」

「ああ、有名だね。確か……」

鈴木百合すずしろゆりさん、というらしい。ひとつ上の先輩らしく、今、

私は二年生の教室の廊下に立っている。ここからが難しいのだ。なんといったって、四クラスある中からたった一人を探さなければいけないのだから。見つかりますようにと祈りを捧げるように両手を折り合わせたところで歩みを進める。さて、まずは一組。さりげなく、さりげなく。さーっと何も用がありませんよ、風を装って歩く。一組は……あ、いた。あつさりと見つかった。今思えば、あんなに浮世離れた色を持つ人を見つけないことの方が難しいことなのだ。とりあえず第一関門は突破。第二関門が鬼門であり、知らない人に話

しかけるといふ行為が挟まる。誰か優しい方、気づいてくれませんか。と願っていると、部長と鈴白さんが話しているのが見えた。楽しい顔だ。花が綻ぶように、きつと鈴が転がるような声で笑っている。そっか、私以外とも話すんだ。鈴白さんはどこか浮世離れた雰囲気があるから、この学校で話しかけられたのも私が初めてだろうと、謎に信じていることがあった。見ていると全然人懐っこそうだ。部長も本を片手に……本？ 自分の手元を確認する。同じ背表紙の色だ。おそらくこれと同じシリーズのライトノベルなのだろう。表紙が違うところを考えると、どうやら同じシリーズの違う巻数らしい。部長が鈴白さんに本を貸そうと、二人の指が触れた時、鈴白さんの耳が可哀想なぐらい赤く染まった。白いから目立つんだなあ。昨日の手についた鮮やかな赤色が思い出された。どこか居心地の悪さを感じて教室の前から逃げ出すように走った。いや、実際逃げていたんだと思う。見たくない嫌な現実から。どうしてこんな気持ちを抱くのだろうか。

今日は部活までの一日ずっと泥沼に沈んでいるような気分だった。本、返せなかったし。身動きが取れず大した呼吸もままならない。暑さに身悶えながら、蝉の騒音を聞き流し、やるせなさに全身を突っ込みながら部室まで歩いた。部室について暑いくらい。むしろ隔離された美術棟は本棟があるために陰っていて、湿気の全てを吸収しているような嫌な暑さだった。

「こんにちはー」

「こんにちは」

部室に入る時は挨拶をするのが儀礼らしく、最初は緊張したものが毎回しつかりと挨拶を返してくる部員——特に部長——に救われて私でも毎回挨拶を欠かさずにいることができる。

「木下さん」

「？」

部長だ。私に話しかけるとは珍しい。今は絵を描いている途中のようで、制服が汚れないようエプロンを着ている。中学の家庭科の裁縫で作るようなドラゴンが描いてあるエプロンだが、そのミスマッチには毎回イ○モネアかよと笑うのを我慢させられている。

「うちのクラスの鈴白が、多分木下さんに用があるらしくて」

「……ああ」

「なんか思い当たることある？ いま校舎裏で待ってるらしくて。行ってあげてくれないかな？」

「分かりました」

きつと本のことだろう。鞆を丸ごと引つ張って校舎裏に向かう。まるで今から告白されるみたいだなあと少し浮かれていると、美術室と校舎裏の距離はそんなに遠くないため、すぐについてしまった。

居たのは真っ白な人。異様な存在感だ。ゲームセンターに巫女さんがいるような、木や雑草で乱雑な空間に、静かに佇

む白色は優しく焦がす陽の光に見えて、近づいたら砂になつて消えてしまいそうだと感じた。そんなこちらの気も知らず相手はこちらに気づくと小走りで近づいてきた。

「えっと、木下さん？」

「……」

「えっあれ、違いました、か？」

「あ、いえ私が木下です……」

自分の名前だと気づかなかつた。名前を、呼ばれた。名前を、呼ばれた。

「よかつた。この前、美術室に本を忘れてしまつて。今日の朝見に行った時、無かつたから、もしかしたらと思つて……」

「……あ、持ってます。持ってます」

もたつきながら鞆から出した本を、鈴白さんは目を潤ませながら受け取つた。

「これ上城の本だから焦つてたんだ」

「へえ、部長の……」

だから教室で見たライトノベルと同じものなのか、と合点がいった。合点がいくついでに、好奇心が湧いてきた。今までのことから導き出される、ある一つの残酷な真実。でも聞いてはいけないと思う。相手のためにも、私のためにも。だけど、好奇心は猫をも殺す。そう、要は止められないのだ。

「鈴白さん……って部長のこと好きなんですか？」

「え……」

赤い。何回目の赤だろう。実際は三回目だが、今日教室で

見た耳の赤が心の抜けないところに深く突き刺さつて印象を強く残していた。後に見えた小さな首肯に、その印象はさらに深いところをえぐつた。

「……もうフォークダンスには誘われたんですか？」

相手もいきなり顔見知りの後輩に名前を呼ばれたらびっくりするだろう。でも、開いた口はするすると言葉をついで。

「……ううん。誘おうとは思つてるんだけど……どうしても」

「じゃあ、今から誘いに行きましょう」

「……え？」

「さあさあ！ 私が仲を取り持ちますから！」

こうなりややけだつた。空元気かもしれないが明るく振る舞わなければ、きっと二度とこの人と話すことは出来なくなるだろうと察した。

ここと美術室の距離は遠くない。鈴白さんがおどおどしている間に部室には着いていた。

「部長！」

「あ、鈴白には会えた……って鈴白？ どうしたんだよ」

「あ、えっと……」

二人を見守る。誘つたらきつと部長はOKしてくれる。今日、あの時、耳が赤かつたのは鈴白さんだけではないのだ。

「本……返しに来たんだ……」

え。

「おお、読むの速いな。また次の巻も貸すよ」

「うん、ありがと」

鈴木さんは葉をすつと抜き取って本を両手で返すと、美術室を後にした。状況に取り残された私は、部長に声をかけられるまで、動けずにいた。……じれったい!! はあ? 誘えばいいものを。

今日は本当に心がムカムカした。本を返しに行った時も、部長を誘わせるために連れていったのに誘わなかったときも。なぜか、何もしていない部長にまで腹をたてていた。昨日とはやや強めに不規則な靴音を鳴らしながら帰路についた。

それでも、次の日には落ち着いて、授業を受けていた。人間、寝れば大抵のことは何とかなるものである。

今日も空は晴天で、真昼の今、体育をさせられている生徒たちはかわいそうだとグラウンドを見やった時、パツと目につく、全身が恐ろしいほど白い人を見つけた。髪の毛から肌まで、今は服や靴までもが白く――実際は体育ズボンが黒い――、そっだけ世界が抜け落ちたようだった。

ああ、鈴木さん。

帽子を忘れたのか、周りが緑の帽子をかぶる中一人だけ何もかぶらず列に並んでいた。太陽にさらされた白い肌が赤くなっている痛々しかった。

そこに黒髪の生徒が一人。部長だ。確信は持てなかったが、なんとなくそう思った。見た目の特徴と、教室での昨日の出来事を擦り合わせて、ぼんやり浮かんだ考えだった。その(仮称)黒い人は鈴木さんと少し会話を交わすと、自分の帽子を少

し乱暴に鈴木さんに被せた。背中に沿った白い長髪がくしゃつとなつて少しモヤついた。あんなに綺麗なのに。雑に扱うなよな。どうやら今日の授業はフォークダンスの練習らしく、早速二人組を作っているようだった。あ、(恐らく)部長と鈴木さん、ペア作るんだ。誘えたのかな、結局。少しぎこちなく楽しそうに踊る二人はすごくお似合いに見えた。ふと、鈴木さんの方を覗いた時、目があった。逸らしそうになるが、そんな思春期の恋仲かよと思いついて、しばらく眺めていると、小さく肩の下で手を振ってくれた。……かわいい。本当に人懐っこいのだろう。少し浮かれた気持ちを抱えて会釈をした。

鈴木さんは、それから毎日、美術室に顔を出した。目的は部長なのだろうが、それでも私は嬉しかった。彼女が知らない色で笑う時は、目の前のキャンバスをぐちゃぐちゃに塗りたくってやろうとも思ったが、たまに鈴木さんが私の方に来て、私の絵を真っ直ぐ褒めてくれるから、そんなことをしても何にもならないと思うようになった。その間、鈴木さんと部長はフォークダンスの相手になることはなかった。どちらも誘おうとする言動は見て取れたが、それが発展することはなかった。

今日も今日とて部活だ。塾も恋人も何も放課後の予定が無い私は絵の具とキャンバスとお友達だ。

「こんにちは」

…静かだ。でも影、というか白い物体がひとつ。こんなシルエットを持つのはうちの学校でも一人しか居ないだろう。もともと鈴木さんは今一人で、自身の部室でもない所でお菓子を貪っているのが気になる点だが。そして、さらに不可解な点が、

「…何で半分ずつ残ってるんですか」

そう、開いてる個包装のお菓子一つ一つの包みにお菓子がなぜかまだ半分残っていて、大変奇妙な状況だったのだ。

その言葉を聞くと、鈴木さんがひどく体を揺らして目を見開くから、驚きと同時にその少し間抜けな様が妙に心をくすぐって、笑いが空気を揺らした。相手が先輩だからとか、所属してない部活の部室でお菓子を食べている、ちよつと図々しい人だからとか、頭からまっさらと消え去って、ただただ面白かった。

鈴木さんが可愛く見えて仕方がない。

以前まで鈴木さんの色は何も寄せつけない白だと思っていた。全てを照らし尽くし、全てを飲み込む白。でも、今の状況を見たら、少し違うと思った。鈴木さんの白は全てを吸収しちゃうような純潔の白だった。表すなら、そう、ウェディングドレスのような。

——あなたの色に染まります。

「そういえば、部長は誘えたんですか？」
半分残ったお菓子を貰いながら尋ねる。

「…」

誘えてないのか…この人達は本当に…。部長も、誘ってくればいいのか。

「もしかして、やけ食いですか？」

小さく声を出しながら頷くから、にやけが止まらなくなりそうになった。部長でもこんな鈴木さんは知らないのではないか？ と思うと、今にも跳ね上がりそうだった。

「明日はちゃんと誘いましょう。絶対に」

「…ありがとう」

まだ会ってそんなに経っていないと言うのに、少し親密度が上がりすぎでは？ 鈴木さんが意外と親しみやすいのが良くないのだ。こんなに綺麗なのに、親しみやすさもプラスされて私には太刀打ち出来ない。

「ねえ、また明日も部室来ていいかな」

「お菓子まで持って来ての方が何言ってるんですか。いつでも来てくださいよ」

そっか、確かに。と言って無邪気に笑った。こんな鈴木さん、きっと部長も知らない。

部室に入ると、鈴木さんがいた。黒の中に白がぼうつと浮かんで、少しびっくりした。下を向いてて、あ…誘えなかったのかなあ。昨日、明日こそは絶対と息巻いていたから、覚悟を決めた分、その分傷を負ったのだろう。顔色を確かめたいのと、顔が見たい欲が重なった。

「鈴木さ…」

声も出なかった。顔が青ざめていて、見たことの無い色だ。顔周りが白いから、なお体調が悪そうに見える。

「……誘えなかつた」

「うん」

「もう、何回も励ましてもらってるのに……」

「……」

鈴白さんの気持ちとは裏腹に、私は少しはしゃいでいた。私が原因の一端で泣いてくれているという事実が何よりも嬉しい。鈴白さんの心に私が入り込むたび、鈴白さんが私の形に歪んでいくたび、私は純粹さを取り戻す。それでも、先輩をこんなにも青くして泣かせたのは、部長の存在。というのが二重の意味で許せない。私も大概まだまだ歪みきっている。鈴白さんの垂れ下がっている長髪に入り込み、瞳を覗き込む。ビー玉みたいな青が涙で潤んで光を反射していた。いつ見ても綺麗だったが、今日は一段と輝いていて綺麗だ。緩慢な動作で鈴白さんの手が私の頬を撫ぜる。

「どうして、あなたは女なの？」

「あなたを誘いたかった」という意味だろうか。都合よく解釈してしまおう。それはもはや告白と言っても過言ではないのではないか？ その白い長髪に顔を全て覆われて光が遮られた時、鈴白さんのビー玉みたいな綺麗な瞳と額しか見えなくなつて。『ロミオとジュリエット』のセリフでそんなのあつたよな、と考えながら額と額を近づけた。額同士がくっついて私も私は止められなかつた。その瞬間、鈴白さんのまつ

毛の長さを知つた。定規で測つた訳ではないが、それでもまつ毛の長さは知れるのだなあと心の遠いところで思つた。

「色を塗る」ってこういうことなんだと思う。真っ白いキャンバスを塗るのは画家にしかできない特権である。鈴白さんは真っ白で純粹で、なんの色も知らないキャンバスによく似ていると思う。鈴白さんは物ではないけれど、今、鈴白というキャンバスが望んでいる画家はきつと部長である上城さんなのだろう。あの人、部長というだけあつてやつぱり絵は上手いからなあ。

未だ唇と顔が赤い鈴白さんの手を引っ張る。綺麗な鮮やかな赤だつた。

「踊りましょう。鈴白さん」

体育館と芸術棟は繋がっているから短いレッドカーペットだつたが、今から行う行為の気持ちの高めるには十分すぎる長さだつた。校内使用は禁止されているが、この昂つた気持ちを前には止めることの出来ない手でスマホを取り出す。家で練習しようとして残っていた視聴履歴からフォークダンスの曲を流す。そしたら、そこはもう、二人だけの世界。私たちだけの秘密。男性パートの踊り方は見よう見まねでしか出来ないが、鈴白さんをエスコートするのは誰でもない、私でありたかつた。

鈴白さん。鈴白さんが望む画家は部長かもしれないけど、部長が持つてない色を私は持つてるから。だから、私に描かせてよ。

私は、この空の下

鹿児島情報高等学校 二年

望月 繭

熱く、重い空気が肌を撫でる夏の日の、夕暮れ時。最寄りのコンビニまで行く翠の足元には、細長いひよろつとした影がくっついている。

翠が空を見上げると、そこには、朱や紫、黄色のグラデーシオンがたなびくように広がっていた。建物だとか、電柱だとか、そういったものさえなくしてしまえば、この空の風景は故郷の空に少しぐらいは近づくだろうと思えるのに、これだけを見れば、どこか凶暴な陰湿さを感じた。

翠の故郷は広大な田畑が続く豊かな町だ。家の前には澄み切った川が流れ、それを水源としたあきほなみの田んぼと、人参や茄子、トマトにキャベツなどといった様々な種類の野菜を育てる畑がいくつもある。そして家の後ろには、高い木がどっしりと地に根を下ろした林や山が連なっていて、青々とした緑の生命力が漲っているのだ。そして空の美しさはなんと言っても格別だ。朝焼けの空、真昼の空、夕焼けの空、夜の空。いつ見る空もたった一度だけの絶景を見せてくれる。温かくて、感動で胸一杯になったり、その日次第じゃ涙が出た

りすることもあった。翠にとって、数少ない心の拠り所の一つだった。

気がつけば、目的のコンビニまであともう少しである。

三台の車と一台のバイクのけたたましい音が過ぎ去って、信号がポツと緑に変わる。それを合図にして、一斉に歩行者と自転車に乗った人たちが動き出した。翠も、横断歩道の白線を少しだけ気にしながら、渡ってすぐ目の前のコンビニに足を踏み入れた。

翠は店内のあらゆる商品に目もくれず、真っ直ぐに化粧品コーナーへと進んだ。そこには、マニキュアが五種類、除光液が二種類、棚の中で鎮座していた。翠は適当に、限定商品と大きく書かれたマニキュアと、その一番近くにあった除光液を手に取り、レジに並んだ。

髪の毛の短い店員が慣れた手つきで商品を読み取っていく。金額表示ディスプレイに表示された金額は約七百円だ。翠は少しだけ汗ばむ手で、財布からぞんざいに千円札を抜き取って会計を済ませた。

逃げるようにそそくさと店内から出る。

チラッと見た腕時計はおよそ十九時半を指していた。門限までまだ余裕はあるが急いだ方がよい。三日前に無断で門限を破った一年生は寮監に呼び出されたと聞く。実際注意を受けた何人かが食堂で騒いでいるのも耳にした。

いっそご、と小さく呟いて、翠は小走りに信号下まで駆けて行った。

夜、灰色と濃紺の入り混じる空を窓越しに眺めた翠は、まだ未開封のマニキュアを手元に寄せた。

翠が今暮らしている寮の規則では、化粧品を持ち込みが禁止されている。しかし徹底的に禁止物の捜索が行われたことはない。あるのは月に一回行われる、各部屋の簡単な見回りぐらいだ。タコ足配線がないか、コンセントにプラグが挿さっていないか、窓のカーテンは閉めきられているか、二段ベッドのカーテンはタッセルに束ねられているか、部屋全体を見回して片付いているか、そういったところを確認される。理由は簡単で、寮生一人一人のプライバシーを考慮しなければならぬからだ。棚の引き出しや筆筒の中は、例え寮監であつたとしても安易に調べてはならないという決まりがある。しかし悪いことに、この配慮を利用して、禁止しているものを持ち込む寮生は一定数存在する。ゲーム機器の持ち込みはよくある方で、たまに包丁を隠し持っている場合もあるようだ。制限された環境下で、ある種の自由を追い求めているのだろう。そして今日、翠もそのうちの一人になった。ぼんやりとした思考の中で、体はするりとマニキュアの蓋を開け始めた。同時に、雲が流れて月の光が差し始める。完全に開いたマニキュアからは独特の匂いがして、翠の鼻をツンと刺激した。それは翠が嫌いな、取り繕った人間の生み出した匂いだった。自然のように暖かくて清々しいものじやなく、得体の知れない化学の産物そのもののような気がしてならない何か。それなのに今は全く気にならないのは、頭

の中が空っぽだからだろうか。それとも、翠にとつて救いになるかもしれないからなのだろうか。はたまた、世間的に見てやってはいけない実験をすることの、興奮や緊張を感じているのだろうか。どの道、今の翠には分からない。そしてそれを知ったところで意味はない。さまつなことだ。

翠は、ピンクの中にキラキラとしたラメが輝くマニキュアを、数秒、何とはなしに眺めていた。月明かりのおかげで、妙に眩しさを感じる。

ふと、少量のマニキュアを指に乗せて口へ運んだ。時刻は零時。頭の隅で、一昨日のこの時間に見た画面が表示される。その画面には、誤飲すると危険な化粧品が載っていた。そのうち二つはマニキュアと除光液だ。

翠は実験をしたかった。日常に溢れる隠れた毒をどれほど摂取したら人体に影響が出るのか。どの毒が最も辛いのか。毒を身体に慣れさせるとどのような状態になるのか……。自身の肉体を実験材料として知りたいという願望があつた。と言うより、翠の思い描く一番の夢を叶える為にはどうしても必要なことなのだ。

中学生の頃までは考えもしなかった。おしゃれでキラキラ輝くマニキュアの、裏側の使い方。大人とか、背伸びをした子供のおもちゃのような存在だと思っていた。幼かった翠が、母を真似て手の親指に塗っていたあの時を思い出すと、今この現実が皮肉に感じる。

「うっ……」

瞬時に、じわっと火に焼けたような感覚が舌に広がった。そして瞬く間にその感覚は、複数の小さい針で刺されているような鋭い痛みに変わる。

食べ物ではなく化学物質で作られたものなのだから、これほどの痛みがあったとしても不思議ではない。

今すぐ吐き出したいくなるような、ヒリヒリと侵食していく痛みで顔を顰め、翠はそっと部屋を後にし、共同で使う水場へと急いだ。

口に含んだマニキュアが小さな塊のような状態になって、吐き出した水と一緒に排水口に飲まれていく。心なしか、口に含む前のマニキュアの方が多かったように見えた翠は、ほんの少し、毒の恐ろしさを垣間見た気がした。水ですすいでも消えないあの独特な匂いと、種類の違う舌の痛み。真っ赤な血が、マニキュアの触れた部分を中心に、小さく複数の斑点を作って、徐々に全体を染め上げていつているのではないかとさえ思える刺激。

翠がベッドに潜っても、奇妙な感覚は時折思い出したかのように口の中で渦巻いた。それだけではなく、口の中に近い唇にも部分的に違和感があるのだ。

翠はたった一回の使用で、これをどう使用するか悩みあぐねた。暗殺するのに不向きなこの毒を、カプセルに入れて無理やり飲み込むか、何かの液体に混ぜてみるか、改良の余地がまだまだありそうだ。

不意に、翠は気がついた。何故か、恐ろしさ以上に、冷静

にそれを分析し、小躍りしたくなるような楽しさが込み上げている自分がいることに。死に近づく実験の甘美な誘惑を、確かに受け入れ、手で手繰り寄せ始めていたのだ。

翠は己に、ゾツとした。

明くる日の朝、翠は気怠い体をぬうっと起こし、スマホを手にとった。ロック画面は七月二十日、時刻は午前四時三十分を表示している。起きてしまうにはまだまだ早い。

二度寝の為に柔らかな布団に寝そべる。覚醒しきっていない身体に、心地良い温もりが優しい。

空はまだ暗いようで、カーテンが微かに、仄暗い電灯の灯りを映している。日も昇りきっていないのだから、きつとあの窓の近くは、クーラーの涼しさよりも清々しい涼感を与えてくれることだろう。行って確かめてみたいような気もするが、どうにもやる気が湧き上がってこなかった。仕方がないと寝返りを打ってみるが、二度寝をする気分でもなくなっている。寝る為にこうしていたのに、不思議なものだ。

ふと、翠は自身の唇を指先で触れた。今朝の零時頃の実験の感覚は、もうない。全てが夢だったかのように、あの痛みや感覚たちが消え去っていた。何故だか少し、ほっとした。どんな感じだったか言葉では思い出せても、唇や舌は実際どんな感じだったか思い出せないのである。

急に身体に悪寒が走ったような気がして、反射的に自分の体を抱きしめる。

目の前がポヤツとしだしたのを隠すように、勢いよく布団の上から身をどかし、布団を頭から被った。生暖かい布団の中で、ギョツと唇を噛み締めていた。

「朝点呼の時間です。皆さん降りてきてください」

天井に取り付けられたスピーカーから寮監の声が聞こえた時、いつの間にやら寝ていたことに気づく。

急いで二段ベッドから床に降り、真横の机に向かう。机の上には、木製の小さな筆筒が、ちょこんと壁際の隅に置かれていた。

翠は丁寧に、その筆筒の引き出しから櫛を取り出して、荒っぽく髪を梳いた。

どうせ朝掃除が終わったらまた髪を梳く。自身の抜け毛でごちゃごちゃになった櫛を机の上にはぽつと置き、早足で扉へ向かった。

廊下にはゾロゾロと、まだ眠たそうな寮生が、ふらつく足を前に前に押し出していた。翠はその群れの中に潜り込んで、一階へと続く階段をいつものように降りていく。

一階まで降りてきた寮生たちが続々と、大広間のカーペット上に乗っていく。そして、各階ごとに二列ずつ、部屋番号順に整列する。そうなれば後は他の寮生を待つだけだ。

「皆さんおはようございます。これから朝点呼を始めます」
やがて、こちらを向くようにして壁にもたれていた三階の寮長が口を開いた。

「……」

「二」

「さあん」

「しー」

そうすると、二階の先頭から呼応するように、ノロノロした点呼が始まる。それが四階まで流れるように続いて、やっと寮監からお知らせの時間になった。

「今日は燃えるごみの日です。当番の人は忘れずにごみ収集所まで持って行ってください」

今日、二階のごみ当番は翠だ。すっかり忘れていたが、今思い出したのでいいだろう。

ぼんやりと霧のかかる頭で、翠は無気力に考えていた。

「四島さんはこの後こちらに来てください。それでは皆さん行ってらっしゃい」

翠はドキツとした。急に苗字を呼ばれ、それぞれの掃除場所へ向かおうと動き出した寮生たちの間を縫うように寮監の許へ行く。

一体何の話があるというのだろうか。寮規則はいくつか破っているが、もしそれらが寮監に筒抜けだったとしても、今する話ではない。それなら一体、何だ。

翠は答えが分からないまま、寮監のそばまで近づいた。

「ああ、翠ちゃん。悪いんだけど、近々新しく、二年生の子が入るから、部屋の半分空けておいてもらえる？」

「え……？」

「ごめんね。私もびっくりしてるの。こんなに急だなんて思

ってなくて。兎に角、よろしくね。帰国子女だと聞いているから、何か困ったことが出来れば相談してちょうだい」

忙しそうな寮監は、気づけば玄関先に消えていた。

頭の糸が捻れて絡まる。自然に、翠はどうしよう、と呟いた。

ぐるぐるする頭のまま朝掃除が終わり、翠は逃げるように部屋まで戻った。散らかった部屋をじっくり眺めると、頭の糸がより乱暴に絡まる。埒が開かない。

翠は梯子を二段飛ばしに上り、ベッドの上で寝そべってみた。こうしていると気持ちが悪く着くのだ。

近々、と寮監は言っていた。しかし、近々、とはどれぐらいだろう。それとも、分からないから近々なのか。

少し頭はスッキリしてきた。けれど、それもほんの少しに過ぎない。結局、何も分からないままだ。

翠は唐突に飛び起きて、部屋をあらかた片付けた。今朝使ったマニキュアと未開封の除光液はベッドの下に備え付けられた大きなタンスにしまう。左側の、新しい同室の先輩が使うところは念入りに掃除をした。寮監がもし翠の部屋だけ見回りに来ても、これなら文句をつけられないだろう。

いつもより早めに学校に行く支度をし、寮を後にする。放送がなるよりも前に、ごみ収集場に二階のごみを置き、学校へ行くのはいつぶりだろうか。少なくとも二、三ヶ月は過ぎていると思う。

十分ほど歩いて、学校の中に併設されている食堂で食事を

受け取った。盆の上には卵焼きとミートボール、それからおひたしの載った平皿と、ご飯、具沢山な味噌汁が並べられている。

卵料理が出る時は、スクランブルエッグとベーコンが多いが、今日は珍しく卵焼きとミートボールのセットだった。

香ばしい匂いのする料理に手を伸ばし黙々と全て平らげた。返却口まで盆ごと持って行き、ご馳走様でしたと食堂を出る。外にはすでに何人かの生徒たちが登校してきていた。

階段を上り教室に入ると、何人かのクラスメイトが席に座って談笑していた。

しばらく椅子に座ってぼーっとしていたが、いつか来るという同室の先輩のことが頭にちらついて、あまり良い気分になれない。ああ、じっとしてられない。

翠は堪えきれなくなり、立ち上がって廊下へ出た。持参した空の水筒に給水機の水を入れる。コポコポ泡を立てながら、想像の何倍も早く、水筒は水で満ちた。つまらない。

虚無感が翠の体を支配した。気分は良くない。だが、全てがどうでも良い。あの落ち着かない感じが食べられてしまった。

興が醒めた時のように、冷めた気持ちで教室まで戻った翠は、机に顔を突っ伏した。顔を上げた時にはいつの間にか先生がいて、何か言っていた。耳から耳の外へ情報が流れて、翠は何も聞き取れなかった。その後始まった授業でも翠は集中できないまま、あっという間に時間が過ぎ、お昼も食べ損

ねた。そうしていつの間にか放課後が訪れていた。

今、翠の頭の糸はもう絡まっていてどころではなかった。ごちゃごちゃと、乱雑で、気持ち悪く、まるで生き物のようなその糸の塊は、翠の頭に向かって深い霧を吐き出してくるのだ。

グワングワンとする思考の中で揺れ動く。ふらつく足取りで、追い立てられているかのように寮へ急いだ。

寮内には作業中の寮監の姿がなく、〃学校へ行ってきます。寮監〃と書かれた札が、長机の上に置かれていた。

無感情にそれを横目でチラッと見た翠は、階段を駆け上がり、自室のドアノブに手をかける。

「コンコンコンコン」

翠の部屋の内側。今手にかけているドアノブの向こうから、扉をノックする振動と、声が出た。

向かいの壁に背がつくまで後ずさった翠は、きつと気のせいだと思った。ただの空耳だ。

「ハイ翠ちゃん！ 会いたかったぜあたしの同室っ」

翠からこぼれた小さな声は、本人の耳にも入らなかった。扉を壊しそうなほど音を響かせ、扉の内側から躍り出た少女は、アニメの登場人物のようだった。カウスリップが埋め込まれたダイヤ型ノンホールピアスが揺れている。自信ありげなその立ち姿は、呆れるほどに美しかった。

得体の知れないその少女は、翠に呆然と立ちすくむ暇をあまり長くくれなかった。

軽く腕を引つ張られただけで前によるめく。翠は目を逸らせないまま、ゆっくり少女に近づいていく。ニヤッと笑う少女の顔が瞳に広く映し出され、ダンスのステップを踏むように二人で部屋に入っていた。時間差で閉じた扉を含め、たった数秒のことだった。

意味が分からない。翠はこの言葉の他に何も頭に浮かばなかった。実際本当に、意味が分からなかった。そして今、社交ダンスの最後のポーズみたくなっている状況も、意味が分からない。

「ぼーっとしているけど大丈夫？」

「え……大丈夫だと、思うんですか？ 誰かも分からない人と、社交ダンスのワンシーンを再現しているのに。……いえ、それ以前に、勝手に私の部屋に入られているのに。……いえ、それよりもっと……」

「ふむ。あたし長い話苦手。ごめんなさいね」
不意に体勢を立て直されたかと思うと、独楽みたいに回された。流れるように壁と壁の角に頭を打ちつけ、ズルズル座り込む。

がっ、と、翠から情けない声が漏れた。

「動揺してんのはもちろん分かる。故に話がまとまらないのもよく分かる。でもね、あたし長い話大っ嫌いな。許して」

ズキズキ痛む頭で振り返る。ここまでされては文句の一つや二つ、言った方がいい。潤んだ瞳で精一杯睨みをきかせ、

翠は少女を見た。

声音からして思った通り。悪びれたそぶりが微塵も感じられない態度だった。それでも、翠を案じる瞳とかち合った時、翠はなんだか場違いなことをしようとしているような気がして、やめた。翠を投げたくせに、どうしてあんな目をしてるのか。翠は自然と、可愛いなと思っていた。なんだか幼稚園生を見ている気分だ。

少女はそんな翠の思いに気づかないまま、翠の目の前に座った。

「ふむ。大丈夫そうだね。じゃあ改めて自己紹介をさせてもらうよ。あたしはシオカウタカ。高二。四つの陸と書いて四陸。歌う鹿と書いて歌鹿だ。今日から三島翠ちゃんの同室になります。てことでよろしく」

「…どうして、今日なんですか？ 寮監さん近々って」

「それは内緒。こっちにも色々事情があるってことで勘弁して」

パチンと手を合わせる音が響く。同時に、うっそ、と翠は心の中で一人叫んでいた。こんな幼稚園生じみてる生意気そうな先輩と今日から同室。きつともう実験なんてやる暇がない。きつとずっとこの部屋にいる。邪魔をしてくるに違いはない。可愛いだけで許すべき行動は、幼い時だけ。それ以外はアウトだ。笑えないから。

翠はありとあらゆる妄想を浮かべた。

「さっきのこと怒ってるの？ ごめん。もうしないからさ、

仲良くしよーよ」

歌鹿は崩れ落ちた翠をひょいっと立たせ、肩を貸して翠を椅子に座らせた。

「でもまあどうやってやろうとしているかは知らないけど、私がかここにいる時に死ぬの禁止ね。困るから」

そして続けて、「それだけは絶対ダメ」と淡々と言い放った。翠は耳を疑った。聞き間違いだ。翠が死のうとしていることは、どんな人間にだって話しちやいない。翠がもう一度聞こうとした時、それに覆い被さるように歌鹿が意思の強い声を発した。

「でもね、考えてみたの。あたしも。どうしたら同室となる子に、あたしがいる間死ぬの禁止させられるかなって。結論はこう…あたしが、あなたに自殺するのを諦めさせてやればいい」

「何のことですか歌鹿先輩。もしかして、幼稚園生みたいな行動しちゃったから頭バグりました？」

「生意気な子。本当は分かっているでしょ。私は全てお見通しなんだよ。隠すの無駄って理解できないほど馬鹿じゃないじゃん。諦めて向き合うことをお勧めするよ。あたしは必ず、あなたに贖いを諦めさせる」

冷や汗をかく翠を置いて、「じゃあコンビニ行ってきます」と歌鹿は部屋から出ていった。翠はしばらく動けなかった。五分経って、ようやく椅子の背もたれに倒れかかる。

「何、なの？ 本当に何なの…何で、知ってんの…」

ポツポツ湧く独り言が、視線の先に消えた歌鹿が、翠はひたすら怖かった。歌鹿が部屋に戻ってから寝るまでの間も、翠は落ち着くことがなかった。長ったらしく話しかけてくる歌鹿に、一言も喋れなかった。ただ、転校生だからなのか、夜点呼の時歌鹿は広間に来なかった。その時だけが、翠を一瞬、安心させた。

「ねえ起きてよー。暇なんだよー」

誰だ。揺すぶられてる感覚がする。

翠が重たい瞼を開けた時、天井が見えているべきはずの場所に歌鹿が陣取っていた。

緩やかな覚醒が急速に変わっていく。翠は思わず叫びそうになった。

「あ、あんた何やってるんですか！ このカーテンの意味分かってます？ プライベート守るためですよ。さっさと出てけっ」

撃退しようとする枕を乱暴に掴んで投げた。歌鹿は軽々とキャッチし、それを床に叩きつけた。その後、翠が別のものをと手探りする手をするりと捕える。

「なあんだ起きてんじゃん！ 行こ。夜の死と朝の誕生日が見られなくなっちゃう」

歌鹿は翠をお姫様抱っこして、忍者のように床に降りた。翠の必死の抵抗も虚しく、歌鹿は翠を抱えたまま部屋の大窓を開け放ち外へ飛び出す。

声にならない叫びと共に、翠は初めて玄関以外から外に出

た。

まだ夏の真っ只中。だと言うのに、翠の予想を遥かに上回る涼しさが、身体中を巡る。びっくり箱を開けたみたいな初めてばかりだ。翠はもう、心の中でも、声にならないものでも、叫ぶことはなかった。

歌鹿が駆け抜ける美しい世界が、翠も一緒に包んでくれていた。

その時、ふっと糸が切れたみたいに歌鹿が歩みを止めた。どうしたの、と口をひらこうとした翠は目の前の光景に目が奪われて、変に半開いた口のまま、じっとそれを見つめるしかなかった。

そこには、真っ赤に焼ける強い光と、ゆっくり薄く消えてゆく夜の星々が、まるで一枚の絵画のように力強く映し出されていた。命の輝きを、産声を発する太陽はどこまでも純粹で、暖かい。一方で、ただ静かに終わりを受け入れる澄んだ光は意思の強さを象徴しているようだった。清らかに、強かに、美しく、煌めいていた。

いつの間にか翠は涙を流して立っていた。朝露の気持ちいい野原だ。全てが流されていく心地がする。ここに居たくない。このままでは、翠は死ねなくなってしまう。

色々な思いが込み上げて、朝日の射し始める野原をもっと湿らせる。途端に、翠は地面に崩れ落ちた。

「苦しい…苦しいよ。私なんだ。本当は、私が…」

地面に座り込んで泣きじゃくる翠を、歌鹿は静かに見守っ

ていた。

日が上りきってしまう少し前、翠と歌鹿はこの場所を後にした。帰りは二人、並んで歩いた。誰とも、すれ違うことがなかった。寮の塀を二人で協力して登り切り、汚れた足を靴下で隠して朝点呼へ出た。歌鹿は、「あたしは出なくていいんだ」と、なぜか寂しそうに言って、朝点呼に出なかった。

それから三日間。歌鹿は朝と夜に翠を連れ回すようになった。不思議なことに、寮監にも誰にも、このことに気づかれることはなかった。みんな眠っていた。翠と歌鹿だけが、その短く壮大で、とても広い時間の中に生きてみたいだった。それに、朝と夜のわずかな時間を二人で見ながら、翠はもう、歌鹿のことが怖くなかった。本当に、お見通しだった。それだけのことだと気がついたからだ。

何色もの色が曖昧にあるあの海も、数多の命の吐息が聞こえたあの森も、あの泉に咲き誇っていた花々も、もう忘れられはしないだろう。翠にとって、あれらはもう己の一部になってしまった。

一度知ってしまったことは、忘れられない。忘れることが許されない。翠の罪も、あの教訓も、忘れ去ることが出来ないように。

あの光景に教えられたこともまた、翠はもう捨て去ることが出来ないのだ。歌鹿の罨に、翠は見事、嵌められた。

「ねえ。今日はどこへ行くのか」

「歌鹿せ……歌鹿。聞きたいことがある」

「それはぜひ教えてほしいね。翠ちゃんはある、何にも言わないからな」

「どうして、私を連れ出したの？ 連れ出してくれるの？」

歌鹿はいたずらっ子のようにフツと笑って、

「言ったことをもう一度言うのは嫌だよ」

からかい混じりにそう言った。翠は少しハハッと笑った。

いくらかした後、翠は学校鞆を背負った。

「行ってきます」

ココア片手に何も言わず、手をヒラヒラと振る歌鹿に、翠も軽く手を振って扉を閉めた。

「おはよ翠ちゃん。ねえ聞いてよ！ また杏里たちが彼氏がどうのこうのってきー……」

学校は逃げたい時もあれば楽しい時もある。最近ほぼ前者だ。逃げたくて仕方がない。だって学校には、翠が苦手なあの子がいる。近頃、翠を苦しめていた悩みの火種だ。

あの子は優秀だ。人とすぐ仲良くなれる。ご老人に手助けもする。人に自分のものを分け与え、お悩み相談にも乗る。興味があると言う分野はとも物知りだし、それをよく教えてくれる。ただ、翠がついていけないだけ。あの子は本当は悪くないかもしれない。ただ、翠が嫌なだけ。細かいところを気にする翠の、悪い癖。個性を否定してはならないのに、ついつい否定し嘲るいけないところ。

「翠ちゃん。今日実はね……」

寛容であれ。他人の言動でイライラするのは全て翠が悪い。
「……へえ。そらあんたが馬鹿だわ。言い間違ひも多いし、
本当にお婆ちゃんなんじゃないの？ 荷物持とうか？ ……
あつ！ お婆ちゃんダメじゃないのそんな早足で歩いたら。
逃げんなよ！」

寛容であれ。見捨ててはならない。切つてはいけない。あ
りのままのあの子を好きにならなくちゃいけない。

ただ苦しみの増すだけの自己暗示だ。翠だつて分かつてい
る。もうとつくに苦手になつてしまつた友達を、完全に以前
の視点で見ることができない。良いところを探そうとして欠
点が目についてしまう。大好きなのに、一緒にいるとただた
だ辛い。でも、あつという間。

終礼のチャイムが鳴り響く。翠はあの子に誘われてコンビ
ニまでついていった。用が済んだらしいあの子は別れ際、
「ありがとつ。流石私の親友だね」と言つて手を振りながら
帰つていった。

翠の心にヒビが入る。〃親友〃だなんて。翠はもうそんな
風に見られないのに。少しだけまたあの子を好きになる。で
も怖い。翠はあの子の言葉や表情が怖い。次はもつと苦手に
なる。あの子は優しいだけなのに。

翠は徐々に砕けていく心で寮に戻り、歌鹿と二人っきりの
部屋へ滑り込んだ。鍵は開いていた。歌鹿はいなかった。魔
が差した。

翠はベッドのタンスを開け、これまで歌鹿と見てきた色々

なものに蓋をした。代わりに、除光液のキャップを外し、小
さい小瓶に除光液を流し入れる。案外さらさらしていた。こ
れぐらいなら、一息に飲めそうだ。翠はまっさらな頭で考え
ていた。

翠はこの部屋で死ぬのは嫌だつた。歌鹿が見れば、きつと
驚いてしまうから。翠は除光液の本体を持って学習室へ移動
した。

夕焼けの赤が美しかった。学習室がいつもと違うように見
えた。

さあ死のう。

翠は除光液の蓋に、再び手を添えた。

「何してる」

不意に響いた透き通るような声が、翠の耳にするりと侵入
した。声だけで分かる。歌鹿だ。

翠は振り返らないまま言い切る。

「今お化粧してるの。こどうせ誰も来ないから好きなんだ
よね。あんたが戻ったら嫌だからこつちでやろうとしてたの
に。邪魔しないでよ」

翠自身も驚くほど、声は全くぶれていなかった。翠は隠し
通せる気がした。

「お前、本当にそれで通じるとでも思ってるのか」

歌鹿の低い声でした。刹那、翠は腕を掴まれ床に叩きつけ
られた。

「分からないほどあたしは馬鹿じゃない。何でき。あんた昨

日まで生きる意欲が少しずつ湧いてきていたのに。そんなに死にたいならいっそあたしがっ」

歌鹿の左腕が翠の首に重くのしかかる。翠に馬乗りになった歌鹿の右腕は振り上げられた。その手の中には、きらっと反射する金属製のフォークが握られていた。

涙をいっばい目に溜めてこちらを睨む歌鹿は、翠よりも苦しそうで、翠もつられて涙が出た。

「ごめっ……ね。許せなっ、くって。……いきつ、たつくなく。……なかなっ、いで」

歌鹿は困惑と憎しみと、悲しみの入り混じった、何ともよく分からない表情をした。緩んだ右手からフォークが抜け出して、床で何回か跳ね返り、止まった。同時に、少しだけ持ち上がった歌鹿の左腕から呼吸を取り戻した翠は、一気にむせ返り、我に返った歌鹿に介抱された。

「ありがと。歌鹿。もう良いよ」

翠の背中をさすっていた手がピタッと止まった。

「翠、どうして。どうして死のうとしたの。それもこんなものなんかで」

歌鹿はチラッと、床に転がった除光液を見つめた。

「どうせ死ぬなら苦しんで死んでほしいなと思って。後、痛みというものを知らなかったから。ただの好奇心。理由については知ってるんでしよう。歌鹿」

しばらく、沈黙が漂った。双方が、何をどう言うべきか、分からなかった。

「歌鹿、今日の夜出かけようか」

不意に翠は立ち上がり、腕を引いて歌鹿を立ち上がらせた。「安心して。今日死ぬのはやめた。歌鹿のあの顔見たら、やる気無くしたわ」

いつかは死ぬけど、と翠はにんまり笑った。

いつもの時間帯、いつものように、歌鹿と翠は静寂の街を駆けた。誰もいない、二人きりの街。月明かりのスポットライトだけが、二人の後を追いかけている。

何を見にもいかなかった。何をしにもいかなかった。ただ当てもなく、公園で遊んだり、学校に侵入したり、そんなくだらないことをした。

少し疲れてきたころ、もはやどこかも分からない草原に、二人寝転がった。

馬鹿みたい。そう思いながら眺める満点の星空は、多彩な色で満ち溢れていた。翠の故郷よりもうんと、美しかった。

星が生きていた。星の鼓動が、揺れているようだった。

「歌鹿、私やっぱり許せない。……ううん、許したくないの」

ぽつり。ぽつり。空の彼方に吸い込まれるみたいに、翠の口から言葉が次々出ていった。

「無知に人を傷つけてきた。故意に傷つけに行きもした。阿呆らしい善意で命を奪った。私が何もしなければ、きっと、彼らはまだ生きていた。死んだ命を食べたくせに、そうして生きてきたくせに、私は自分を殺して楽になろうとした。……」

何度も、何度も」

歌鹿は口を挟まなかった。ただ、翠の目から静かに川がで
き始めると、翠の片手を優しく包み込むように、そっと握っ
た。

「なんて馬鹿なんだろう！ 結局自分のことしか考えちゃい
ない。他人が思うようにいかなかったら全部人のせいにして、
被害者ぶって……。自分から言えばいいことも、文句を垂れ
るばかりで何もしない。殺した痛みすらも忘れてしまった。

……楽しいことが辛い。思いが薄れていくことに気がつ
きたかなくなつて。認めたくなくなつて。生きていてほしくない
のに、私の恨みが薄れてしまうの。全部、全部私の、せいな
のに」

翠は左腕を持ち上げて、顔の上半分を覆い隠した。歌鹿が
握った右手を広げ、翠も強く握り返す。

歌鹿はしばらく翠の横顔を見つめ、微笑んだ。

「翠、覚えている？ 昔、あたしたちは会ったことがあるん
だ。まだ小さかったから、あなたはきつと、覚えていないか
もしれないけど。

あの日の夜は赤かったね。とつてもとつても赤かった。息
が出来なくて、苦しくつて。あたしはあの時眠ってしまった
けれど、あんたがあんたの気持ちのいい木陰の場所まで連れてい
ってくれたんだ。あたしはあの時初めて、あんなに美しい太
陽と、キラキラしている星を見た気がしたんだ。ずっとずつ
と眠っていても、あたしには見えていた。だからずっと、覚

えてた」

翠はふと、赤い夜が頭に浮かんだ。見たことのない景色の
ような気もするし、ずっと前に見たことがあるような気もし
た。壊れた焦茶色の窓と、絶え間なく揺れる赤い空間が、妙
にリアルだった。きつとこれは想像の産物なのだろう。輪郭
のない夢のように、はつきりと思い出せなかった。あやふや
で、よく見えないのだ。

翠は左腕を斜めにして、横目だけで歌鹿を見た。

歌鹿はよく分からない表情をしていた。とても遠くの何か
に思いを馳せているみたいだ。水の膜が張られている目が、
星々の鏡になっているのだけが確かだった。歌鹿は翠が見て
いることにも気がつかないまま、誰もいない空間に、自分一
人で話しているみたいだった。何だか少し、翠は不安な気持
ちになった。

「あなたはただ優しいんだ、翠。あなたの周りの人間なんて、
自分の犯した過ちを全て過去に流しているよ。人間じゃなく
たつてそうだ。猫でも蛇でも。きつとそんなこと覚えてない。
覚えてようとしてもしていないさ。生きる上では必要ないし、あ
つてもただ邪魔だからね。だからあんたも忘れていいんだよ。
あんたが背負ってるその罪は、枷は、全ての生き物が背負っ
ているものなんだから。それでも忘れられないのなら、夢の
中で生きればいい。全てを捨ててしまえばいい。そこで一時
でも、振り返ってみるといい。こんな世界に耳を傾けて腐る
必要なかないって、いつかあんたも気がつくさ」

翠はほとんど聞いていなかった。歌鹿の穏やかな顔を、ずっと見つめていた。

「一つだけ。一つだけ翠は歌鹿にお願いしてやることにした。今まで一度も、どれだけ愛した人間にも言えなかった。歌鹿になら言ってもいいと、翠はそう思えたことを。それは、独白のようだった。」

「歌鹿、それなら、私と一緒にここから別の世界へ行こうよ。どこでもいい。歌鹿が私に生きろというなら、生きるよ。だから、ヨーロッパとか、韓国とかでもいいよ。とにかくどこか別の選択肢を私に見せてよ。今のままじゃ、私死ぬのを諦めきれない。夢だから。だから、これとは違う夢を私に見せて。迎えにきて。どれだけでも待っているから。連れ出して」「わかった。わかったよ翠。それならおやすみ。夜が明けたら、朝が来たなら、あの場所に来て。この夢は覚めるよ。それまでのほんの一瞬を、ほんのひと時を、あたしに頂戴。あなたが死ぬ夢を見なくても、いつかは死んでしまうから、その時あたしもそばで死んで良い資格も、頂戴」

惚けたように黙った翠の唇に、歌鹿が覆い被さった。深い海に沈むように、いつの間にか翠の意識は遠のいた。

翠が起きて目覚めた頃、見慣れた天井が一番に目に入った。戻った記憶のない翠は、寝そべった状態のまま歌鹿の名を呼ぶ。しかし返ってくる声はなかった。胸騒ぎがしてベッドのカーテンをさっと開ける。

歌鹿はいなかった。どこにもいなかった。歌鹿の荷物も全て消えていた。どこにも、四陸歌鹿が存在する印がなかった。四陸歌鹿なんて、どこにもいなかった。

数日後、歌鹿の使っていた場所に、鈴木奈々という二年生が入ってきた。寮監には聞かなかった。翠も薄々気がついていたのだ。

おかしな点がいくつもあったのを、翠は勘付いていた。一回も点呼に降りてこなかったこと。いるくせに、部屋の名札はどこにもなかったこと。いつもべったりしていたくせに、食堂や風呂、洗濯にはいつもついてこなかったこと。数え上げればキリがない。

「四陸歌鹿。貴方は、結局誰だったの」

翠の問いに答える者はない。けれど、翠に取り憑いた歌鹿の呪いは笑っていた。

貴方は、この空の下。どこかで笑って生きているのかな。だとしたら、早く来て。朝だよ。早くこないよ、私はすぐにここから飛び降りてしまうよ。早く来ないと、貴方は私のそばで死ねないよ。きつとすぐ来てね。そしたらまた、私をあの街に連れ出して。もし貴方がこないなら、私はずっと、この夢の中で、この空の下で死のうとするから。早く。早くね。翠の心は吐息で満ちた。

見上げた空は、青く、ただただ青く、ひたすらに青く、引き込まれそうなほどに青い、美しいキャンバスだった。

翠は、この空に飛んだ。鳥が羽ばたいているかのようだった。

た。少しずつ、地面に近づいていく。

翠に黒い影が落ちる。その顔には、満開の花が咲いていた。

見つけたっ！

その背中

鹿児島情報高等学校 三年

竹波 芽生

夢を見た。終わりの見えない、花畑を走り抜ける夢。そこで僕は、鳥のように自由に、両手を広げて走っていた。青い空。赤い花々。緑の山々。美味しい空気。これを幸せと言うのだろうか。もうよく覚えていないが、僕の気持ちはきつと満たされていた。終わりの見えない、花畑を走り抜ける夢。終わりは見えないはずなのに、終わらないでほしいと強く願っていた。風のように軽かった体は重くなって、無音の空間にただ一つ僕の息の音が聞こえ始めた。苦しい。だめだ、止まってはだめだ。走れ。終わらないでほしい。終わらせなくてくれ。僕の息と心臓の脈打つ音だけが聞こえ続けて、周りがどんどん霞んでゆく。無慈悲なものだ、この時間は終わってしまうのだ。涙で乾いた眼球が潤う。視界もぼやける。ふと何かにぶつかった。人だ。黒い、影のような人。黒い何かを背負っていた。こちらを振り向いたけど、顔は見えなかった。

現実に戻された時がどれほど憂鬱か、おまえにわかるだろうか。僕の顔を覗き込む蛇と目が合う。おはようパチ、飯が欲しいのか。黒曜石みたいにつやのある黒い瞳で僕を見

つめる。二つに割れた舌をちらつかせた。死んだコオロギをタッパーから取り出し、パチのケージまで持って行く。

「お前の瞳が赤色だったら貴重な白蛇だった。おまえは瞳が黒く生まれたから安く売られてたんだ。残念なやつだよ」

パチは当てつけのようにコオロギを僕の親指ごと飲み込んだ。本気で噛まれたのはずいぶん久しぶりだな。パチの口から引き抜いた親指の付け根には標本のような綺麗な歯形が付いて、一箇所深く歯が刺さったところから血が出ていた。

「悪かったよ」

ふと夢の中で見た黒い影を思い出す。

「また、会えるかな」

僕はベッドから立ち上がり、衣装箆の上においてある箱を漁った。

「カットバン、カットバン……」

見つけた救急テープの箱の中身は空っぽだった。父に頼もうとしたけど仕事に出ているんだ。買いに行かなくちゃ。昼間に家を出るのは久しぶりな気がする。くたびれたパーカーを羽織って玄関ドアの鍵を閉める。やけに陽の光がキラキラしていて目が痛い。早く済ませてもう一度寝よう。近くのコンビニまでは歩いて少し。中に入るとクーラーで妙な肌寒さがあった。

「カットバン、カットバン……。どこにあるんだっけ」

店内をうろうろと歩き回る。

「高山くん？」

後ろから声が聞こえた。心臓がヒュンとなって、汗が出た。名前を呼ばれたのなんていつぶりだろう。息を吐いて振り返ってみると、制服姿の女子が立っていた。ああ確か、同じクラスの……なんだっけ。

「やっぱり高山くんだ！ 二学期始まったも全然来ないじゃん。こんなところで何してるの？」

近づいてくる。怖い。めんどろくさい。

「別に、買い物しにきただけ」

「ふーん。なんで学校来ないの？ なんかあった？」

「なんも」

「なんか理由があるんじゃないの？ なんかあったなら、私全然話聞くし……」

「行かない理由もなければ行く理由もないよ。なんもないから家にいるだけ」

「なんだか腹の底が熱くなるような感じがした。目を合わせたくない。」

「そうやって家にこもっても、何も変わらないよ？」

うるさいなあ。

「……あなたに何言われても、僕は変わらないよ」

見つけた救急テープの箱を取り、彼女を突き放すようにしてレジに向かった。

「そもそも高山くんは、今の状況どうにかしようとか思わないの？ 私たちもう二年生なんだよ？ 進路とかどうするつもりなの……」

「なんだろう、僕の中で何か切れた気がした。どうしようもなく込み上げてくる何かをぐっと堪えた。」

「うるさいなあ、あなたには何の関係もない。ほっとけばいいだろ、こんなやつ。いちいち突っかかってくんないよ！」

感情任せに放った言葉。何も目に入れたくなかった。レジの店員が驚いた顔をしているのが視界の端に入った。手に入らなくて、さっきの傷口からまた血が滲み出していた。あー、イライラする。頭をぐちゃぐちゃに引っ掻き回した。伸び切った爪の間に皮脂と血が詰まっていた。無意識のうちに進める足が速くなる。周りの景色なんて全部目に入らず、ただただ家を目指して歩いた。やや乱暴に玄関ドアを開けて、パーカーも靴も脱ぎ捨てて自室のベッドに飛び込んだ。枕に顔を押し付けて声を上げてみた。シーツをぐしゃぐしゃに握った。息が苦しい。物理的にだ。しばらくしたら気分が落ち着いてきた。ドアの向こうから父が話しかけてきた。

「賢治ー、晩飯ー……」

「いらん」

「またかよ、育ち盛りなんだからちゃんとお食べよなあ……」

ぶつぶつ言いながら階段を降りて行ったようだ。はあっと息を吐いて、ゆっくり呼吸し始める。僕の必殺技だ。これをすると早く眠りにつける。僕は寝るのが昔から好きだった。嫌なことから逃れる唯一の方法だった。

「今度はなんだ？ 真っ暗な場所に立っていた。本当に何も見えない。」

「どこ行きやいいんだよ……」

全方位体を向けて見たけど、やっぱりなんにも見えないただ黒い世界だった。

「けんちゃん」

……母の声だ。気持ち悪い。会いたくないのに、名前を呼ばれるとなんだか嬉しくなってしまう。遠くに行きたい。逃げたい。足を進めてみてもその場から動いているのかわからない。どうしよう、迫ってくる。逃げなきゃ。息が上がって目が熱くなり始めた。涙が出そうだ。

「どこに、行けば……」

すつと僕の右手に何か滑り込んだ。手、だろうか。温かい。その手は僕の右手をぎゅつと握って引つ張った。ゆつくり足が進んで行く。姿が少し見えた気がした。僕より背が高くて、黒い何かを背負って——あの人だ。また会えた。胸が熱くなって、力んで固くなった体がほぐれてゆくような感じがした。一言も話さず、こちらを振り返ることもなく、ただ、僕の手を引いて歩いている。どこまで行くんだろう。このままずっと歩いていても悪い気はしないな。目の先に一筋の光が見えた。

「出口……」

大きく開いた窓から沢山の光が漏れていた。連れてきてくれたのか、ここまで。光のある場所まで。恐る恐る横に並んだあの人のほうを向いてみる。光があるのにも関わらず、相変わらず全身真っ黒で、どんな服を着ているのか、どんな髪

型をしているのか、顔すらも見えなかった。

カチンという音が聞こえたのでゆつくりと体を起こす。パチがケージの中でコオロギと戦っていた。コオロギは遂に捕まって、ゆつくりとパチに飲み込まれて行く。そんな様子を眺めながら僕は振り返る。不思議な夢だったな。また、あの人に会えた。また会いたいと思えた。背負っていたものは、多分ギターケースだろう。前より近くで見たからわかった。時計に目をやった。夜中の二時過ぎだった。窓の外に目をやった。いつもは見えないはずの星が見えた。なんだか今日は目が澄んでるみたいだ。もう少し眺めてからまた寝よう。

スマートフォンのお知らせで目が覚めた。まだ半分しか開かない目でメッセージを見る。父からだ。内容は……。「おはよう。よく眠れたかな？ もうすぐで家に帰るけど、食パンと牛乳を買ってきてほしいな……」

文章はまだ続いている。うざったいほど絵文字のキラキラした文面だ。二言程度で済む話なのに、よくもまあ長々と……。そう思ったのと同時に、僕がもう一度昼間の外へ出なければならなくなった事実に絶望した。本当は家を出たくない。でも父の頼みだ、仕方ない。今日は誰にも会いませぬように。祈りながらパーカーを手を取った。

幸い知った顔に鉢合わせることなく買い物を終えることができた。人が少ないうちに帰ろう。父もちょっと前に帰ってきたそう。何も考えずにふらふらと家に向かっていた。視界に入った自分の家の、二階の窓から父が身を乗り出して

るのが見えた。……何してんだ？ 僕に気づいた父は、さつきよりも身を乗り出して大きな声を上げた。なんだった？ 聞こえない。もっと家に近づいたとき、父の言葉がはつきり聞こえた。

「賢治——！ 蛇が逃げたあつ！」

は？ パチが？

「すまねえ！ 餌やろうとしたら、窓から逃げられちまった！」

このクソ親父。買い物袋を玄関に投げ入れるように置いて、虫籠を持って僕は走り出した。蛇の行きたがる場所なんてわかるわけがない。でもあのすばしっこいパチがもうどのくらいの距離を移動したのか、考えただけで吐き気がする。蛇の通れそうな狭い場所を順に追って行った。犬みたく返事が帰ってくる訳じゃないが、知らず知らずのうちにパチの名を呼びながら走っていた。だいぶ走り回って、遂に公園にたどり着いた。週末は年齢問わず賑わう場所だ。こんな所で蛇が見つかったなんて騒ぎが起きたらひとたまりもない。めいっばい目を凝らして見渡してみる。落ち葉のせいで目がチカチカする。

「うおおつ、へ、蛇！」

声が聞こえた。声がしたほうへ走る。公園のひらけた所から少し離れた茂みの多い場所に出た。するとすぐ目の先に、威嚇している白蛇を見つけた。

「あ、パチ！」

僕は白蛇に飛びついた。首を捕まえ、素早く持ってきた虫籠に閉じ込めた。安心して、ふう、と息が漏れた。

「ありがとうね。助かったよ」

後ろから声が聞こえた。パチが威嚇していた人だろう。

「い、いえ……」

こちらこそすみませんでした、と続くはずだった言葉がその人を振り返った途端出てこなくなってしまった。目の前にいたのは、うっすらと髭の生えた男の人。肩に付かないくらい長の髪の髪で、眼鏡をかけている。僕より背が高くて、何か背負って……。

「大丈夫？ 立てる？」

大きくて厚い手が差し伸べられた。僕は口を開けたまま、なんの躊躇いもなくその手を取り立ち上がった。ああ、この手……。立ち上がってからも、目の前にいるその人から目を離すことができなかった。

「どうした？ もしかしてなんか付いてる？」

そう言ってその人は、指で髪を解いたり自分の顔を撫でまわし始めた。……言ったら気味悪がられるだろうか。でももう僕の口は動き始めていた。

「あの」

「ん？」

「僕たち、会ったこと……」

案の定目の前の人は驚いた顔をした。そして腕を組み、うんと唸った。

僕の手の中にあるスマートフォン画面には慎吾さんとのチャットが写し出されていた。まだ濡れた髪をタオルでゴシゴシと拭きながら風呂場を後にした。

「父さーん、風呂ー！」

声をかけながら二階の自室に戻ろうとした。

「おう、どうしたそんな顔して。なんかいいことあったか？」

父が覗き込むように僕の顔を見てきた。

「なんもねえよ、クソがあ」

僕の声は笑ってた。父も白い歯を見せてにいつと笑っていた。ドタドタと階段を駆け上がって自室に戻ってから、二人で笑ったのはいつぶりだっただろうと思った。そんな思考を掻き消すようにスマートフォンが鳴った。慎吾さんからだ。一瞬舞い上がってスマートフォンを落としそうになる。

「こんばんは。夜にごめんね。明日なんだけど、授業が午前しかないからお昼から会いたいんだけど、空いてるかな？」
いつもの喋ってる感じとは違って、丁寧だけど優しい文面だった。

「空いてます」

一言そう送るとすぐに返事が返ってきた。お昼ご飯を一緒に食べたいとのことだった。もちろん、僕も一緒に食べたいに決まっている。明日がものすごく楽しみだ。スマートフォンを握りしめたままベッドに倒れ込んだ。

午前十一時四十三分。いつもの公園のベンチに座って彼を待った。時間はどんどん過ぎて行った。午後零時四十五分。

シヤカシヤカと落ち葉を蹴る音が聞こえた。

「賢治くーん！ ごめんね！」

僕は首を横に振った。走ってきたらしく、額には少し汗が滲んでいた。大学の教授と話がすれ違い、提出物がスムーズに提出できなかったらしい。

「あんなに手こずるとは思わなかったよ……。十二時半前には着くって言ったのにごめんなあ、お腹すいたよね。一緒に行きたいカフェあるんだけどいいかな」

スマートフォンアプリで調べながらそのカフェに向かった。カフェは子連れやカップル、女性の二人組が多かった。そんな中に背の高いロン毛の大学生とひよろひよろな不登校の高校生という歪な組み合わせの男二人組は、とても面白い状況だと思っていた。案内された席に着くと、さっきから無口だった慎吾さんが口を開いた。

「なんかさ、高校生と大学生の男二人組ってさ……。超いびつじゃない？ 俺、不審者に間違えられないかなあ!? こんな見た目だしさあ……」

そうやって一人で不安になり始めた慎吾さんを見て僕は思わず笑ってしまった。

「え、何、俺真剣なんですけどお？」

「大丈夫ですよ。多分」

「多分って、賢治くうん……」

この人はとても面白いから、ついからかってしまいたくなる。

デミグラスソースのかかったオムライスが目の前に置かれた。向かい側に座っている慎吾さんはいただきますと手を合わせて、ホットドッグにかぶりついた。僕も手を合わせてからスプーンを手を取った。

「そうそう、話したかったことなんだけど」

ホットドッグを半分ほど食べ終わった慎吾さんが話し出した。

「今度ね、学祭でライブやるんだけど、よかったら見に来ない？」

僕の右手からスプーンが滑り落ちた。

「行く！ ……ます。行き、たいです」

身乗り出すようにして返事をした僕に驚いたようだったが、すぐに笑ってくれた。

「うん、おいでおいで。賢治くん来るなら俺、超頑張るわ」
今までで一番楽しみな予定ができた。バンドの練習もあつて、会えない日も増えるかもしれないと教えてくれた。会えないのは寂しいけど、頑張るといふのなら僕も応援する。

さつそく「ごめん、今週は会えないや」というメッセージが届いた。僕は大丈夫です、頑張ってくださいと一言。時々会ってはいたが、会わない日が多くなって行った。予定の日がどんどん近づいて、寝る前に自分の持っている服を並べては当日に着て行く服をどれにしようかと悩んだ。

学祭当日、初めてきた大学の広い敷地と人の多さに驚いた。そういえばこんなに人が多い場所にきたのはいつぶりだろ

うか。いろんな売店から声がかかる。もうすぐでライブが始まる時間だ。室内でやるらしく、扉の前にはもうすでに人が集まっていた。慎吾さんのバンドの順番を念入りに確認してから中に入る。中は暗くて、青や紫と派手な色のライトがいくつもついていて。次々と人が入ってきて室内はあつという間にいっぱいになった。司会らしい人が出てきて会場を盛り上げる。客の熱量もすごかった。ライブを見に来るのなんて生まれて初めてだったから正直ワクワクしている。スピーカーから大音量で楽器の音が鳴り出し、会場を満たした。いろんな曲が披露されて行き、いよいよ慎吾さんたちのバンドの番だ。真っ暗だった会場で一つのスポットライトがついた。その光の下には慎吾さんがいた。でもいつもと雰囲気は全く違った。眼鏡はかけておらず、肩につきそうだった髪は頭の後ろでお団子の形でまとめられていた。髪が上げられて今まで隠れていた、こめかみの刈り上げた短い髪が見えていた。すごく、かっこいい。慎吾さんのギターの音が静寂を切り裂いた。曲が始まり会場は再び音で溢れる。ギターを弾いている慎吾さんはとても真剣な目をしていて、それでいて楽しそうに、今まで抱いたことのない感情が僕の中で芽生え始めた。

…僕も、あんなふうになりたい！

ライブが終わってしばらく経ってから、出演した大学生たちが楽屋から出てきた。僕はその中から慎吾さんを探し出し駆け寄った。

「おお！ 賢治くん。見に来てくれてありがとう。どうだ

った、楽しめたかな？」

いつもの温かな笑顔で僕の頭をポンと撫でた。

「はい、すごくかっこよかったです」

「そりゃ嬉しいねえ」

そんな会話をしてると慎吾さんのバンドメンバーの人たちも寄ってきた。

「この子？ 上つちが言ってた子」

「今日はきてくれてありがとうね！」

ベースボーカルの男の人と、ドラムを叩いていた女の人。

二人とも優しい人だった。

「こちらこそ、ありがとうございます。みなさん、とてもかっこよかったです」

僕の感想に学生たちはとても喜んで盛り上がっていた。さつき芽生えたばかりの感情を恐る恐る口に出してみた。

「なんか、キラキラしてて。いいなって。僕もあんなふうになれたらいいのって……」

するとドラムの女の人が出た。

「じゃあさ、もし興味あれば、楽器始めてみたら？」

僕と慎吾さんは、えっと声を出して固まったが、周りの人たちは「いいじゃんか！」と盛り上がった。

「……賢治くん、楽器やってみたい？」

慎吾さんは少し戸惑いながらもまっすぐと聞いてきた。

「やり、たいです……」

食卓に父と二人、晩御飯を食べていた。時計の秒針の音が聞こえるくらい静か、時々箸が器に当たる音や僕らの咀嚼音が聞こえる。

「父さん」

手に持っていた茶碗と箸を机に置いて言った。

「おう、なんだ」

父はちようどおかずを掴んだとこだった。

「僕、ギターが弾きたい」

「おう、どうした」

父は驚いたのか口の手前まで持ってきていたおかずを落とした。しばらくの沈黙と睨めっこの末、父が口を開いた。

「いいじゃねえか、やってみれば」

え、ほんと？ と僕が聞き返すと、父はうんと頷いた。

「その、弾くギターをどうするかは俺は知らないが、やりたいうことやってみりゃいいと思うぜ」

肩の力が一気に抜けた。本気で何かをしたいと言ったことがなかったからかもしれない。僕はただ父に、やってみればいいと言われたことが嬉しかった。

慎吾さんと約束をした時間に改札前で待つ。しばらくして慎吾さんと合流した。

「それじゃあ行こっか」

今日は県の中核部に行く。電車に乗るのもずいぶん久しぶりだ。

「楽器はさ、もちろん新品がいいけどやっぱり値段が厳しか

ったりするじゃん。だから今日は俺もメンバーもよく行く中古の楽器屋も見に行こうと思ってる」

今日行く予定のお店を詳しく教えてくれる慎吾さん。

「賢治くんバイトとかしてる？ ……お金って、大丈夫？」

慎吾さんなりの気遣いと心配だろう。僕自身も不安だったがなんとか大丈夫そうだ。

「へそくり…：あったから大丈夫。お年玉とか、貯めてた」

「はああ、まだ若いのに偉いなあ」

まあ、今までほしいものもなかったし、使い道がなかったからな。何年も眠っていた分、うんと使ってやろう。車も人もたくさん行き交う街中を二人でたくさん歩いた。いろんな楽器屋があつて、それぞれ置いてある楽器も違った。四軒目は慎吾さんがよく行くという楽器屋だった。チェーン店のように広くはないし、どちらかといえばガチャガチャしている。でも品揃えが良くて、時々レア物も置いてあるそうだ。ふと壁にかかっている物が目に入った。茶色と黒のギターだった。

「んー、これもピンキリだなあ。めぼしいものがなければ次のお店もあるけど」

「慎吾さん、僕、あれがいい」

気づいたらさつき見つけたばかりのギターを指さしていた。

「お、フェンダーは間違いないね。それなら初心者用のセツトもあつたりするはず」

慎吾さんが店員にギターを壁から下ろしてくるよういかにいってくれた。店主のおじさんから渡されて初めてギタ

ーを持つ。弦を弾くと心臓がなって体が熱くなった。値段も僕でも手が届きそうだ。

「僕、これにします！」

慎吾さんも店主のおじさんも喜んでくれた。帰りの電車の中で僕はギターを抱きかかえていた。黒い布のギターケースに包まれている。慎吾さんはできる時には一緒に練習しようと言ってくれた。もちろん一人でも練習は頑張るつもりだ。

自分の部屋でギターをかき鳴らすのが日課となった。最近好きな曲の伴奏を練習し始めた。慎吾さんは公園で会ったときもいっぱい教えてくれたり、時々スタジオに連れて行ってくれたりした。ギターの練習以外でも慎吾さんとはしょっちゅう一緒にいるようになった。車で少し遠いところまで行くこともあつた。

いつもの公園でいつものように話をしていた。暗くなるのが早くなって、街灯がつき始めた時だった。

「俺さ、今度の春に東京に行くんだ」

寒がりだからと早めに出してきたマフラーを巻いた慎吾さんが言った。大学を卒業してからの就職先が決まったらしい。ずっと隠していたようになってしまったって申し訳ないと言われた。

「東京に彼女がいてね、自分の物件が見つかるまで居候させてもらえることになったんだ。だから卒業したらすぐ東京に行ける状況になったもんで」

僕はそうだったんですねとしか言えなかった。しばらく二

人とも何も喋らなかつた。

「暗いし、寒いから帰ろうか。家まで送るよ」

僕と慎吾さんは公園を出た。歩きながらまた話します。ギターは最近どんな調子とか慎吾さんの大学の話とか、そんな他愛のないもの。でもなんだか胸にはぼっかり穴が空いているようだった。家の近くまできたとき、慎吾さんがまっすぐ僕を見て言った。

「春まではまだまだあるからさ、これからも一緒に話したり、出かけたらしようね」

もちろんギターの練習も一緒にしようと言ってくれた。ああ、この人はどこまで優しいんだろう。

「はい、約束ですよ」

そして僕たちはまたねと挨拶を交わし、別れた。自分の部屋に戻ってからも頭は真っ白なままで、気がつけば僕は泣いていた。慎吾さんと離れるのが悲しいのだろうか。そんなものではない気がした。僕にはこの涙の訳を言い表すことはできなかつた。

食卓に父と二人。モリモリ食べる父を前にして僕は右手に持った箸を動かすことができなかつた。考えて考えて何日か言えなかつた僕の重い口がようやくよく開いた。

「父さん、僕東京に行きたい」

「急にまたなんだねお前は。……東京か。言うのはいいが、それなりの頑張りを見せてもらわないとな、流石に父さんも背を押すことはできん」

いつもと違う真剣な目で、厳しい口調だった。世間はそう甘くないと知らしめるような言い方だった。悔しくなつてしばらく黙り込んでしまった。箸を置いて、父の目を見て僕は言った。

「わかつた。僕頑張るよ」

そして自分の部屋に戻った。少し調べ物をしてから早めにベッドに潜った。明日早く起きられるように。

午前七時、久しぶりに袖を通した制服はとても窮屈に思えた。制服姿の僕を見た父は口が塞がらないようだった。

「父さん、僕本気だからね」

そう一言家の中に残して僕は外へ踏み出した。朝早くから外を歩くなんて変な気分だ。学校に着くと案の定周りの人たちの視線がこれでもかと言うほど刺さつて痛かつた。担任は、「よくきてくれましたね」と心配混じりの喜びを言った。クラスメイトは何かをヒソヒソと話しながらチラチラこちらを見てくる。たくさんの視線の中にあの女子もいた。僕を見てなんて思うだろうか。逃げたい、今すぐここから。視界が端から暗くなる。それでも、こんなに頑張りたいと思えたのは初めてだったから最後まで戦いたいと思う。授業をなんとなく聞いて、休み時間は教科書をペラペラとめくり過ぎた。クラスメイトと言葉を交わすことはなかつた。ようやく帰りのホームルームが始まって、頭がクラクラしてきた。全てが終わった合図のチャイムが聞こえて、僕は真っ先に教室を出た。息苦しい、はやく外へ……。門を出た時だった。僕は一

瞬目を疑った。目の前に慎吾さんが立っていた。僕は慎吾さんに泣きつくようにして彼の胸に飛び込んだ。すると慎吾さんは僕を受け止め、力強く抱きしめてくれた。

「びっくりしたよ、学校に行っただってお父さんに聞いてさ。さっきたまたま会ったんだよ。頑張ったね」

声をあげて泣きたくなかった。慎吾さんは僕をいつもの公園に連れて行ってくれた。そこで僕は慎吾さんに、僕が考えた全てを伝えた。東京の学校に進学しようと思ったこと、そのため学校に行き始めたこと。

「僕は、本気なんです」

初めて本気で成し遂げたいことができた。大好きな慎吾さんの、その背中を追いかけたいと。それを聞いた慎吾さんは泣き出しそうな顔で笑いかけてくれた。

「ありがとう。賢治くんの気持ち、受け取ったよ。俺にできることがあればなんでも協力するよ。一緒に頑張ろうな」

一緒に頑張ろう、この言葉が何よりも嬉しかった。

毎日学校に行くようになって、アルバイトも始めた。勉強の知識も少しずつ身につけてきた。わからない問題は、放課後に慎吾さんに教えてもらった。そして毎晩パソコンに向かっていくつものサイトを見続け、ようやく進学したい東京の学校を見つけた。学校の図書館で本を探している時だった。

「高山くん」

後ろから女子の声が聞こえた。振り返るとあのときの女子生徒が立っていた。状況があのと似ている感じがして少

し嫌だった。

「どうしたの。最近」

そりゃあ不登校だったやつが突然学校に来るようになったら不思議だよな。

「……行きたい学校が見つかったんだ」

そう言う女子生徒は少し驚いた顔をした。

「へえ。いいじゃん。がんばろね」

そう言う女子生徒は去って行った。僕は探していた本を見つけ、貸し出しのカウンターへ持って行った。

それから女子生徒、浜野さんは僕に話しかけてくるようになった。「ここ間違ってる」とノートに指摘をしてきたり、課題の確認をしたりするようになった。期末テストの点数も見せた。

「いい感じじゃん。冬休みもどっか集まって勉強会しようよ」

「いいね」

僕らはいつの間にか毎日話すようになっていた。そして浜野さん以外のクラスメイトとも話すようになって、最近学校もちよつと楽しいんじゃないかと思えるようになった。もうすぐ冬休みが来る。冬休みが終われば、慎吾さんは行ってしまふ。それまでに、慎吾さんが安心できるように、僕は頑張らなくちゃと思った。冬休みに入ってから、ギターを弾き、勉強する日々だ。時々浜野さんと集まって勉強したり、慎吾さんにも教わったりした。慎吾さんはだいたい問題を解けるようになったと褒めてくれた。

「休み明けのテスト、絶対いい点とります」

「おう、待ってるな」

明日で冬休みが終わる。この時間も終わってしまう。テストは絶対にいい点をとって、慎吾さんに見せると心に誓った。

まだまだ寒い昼下がり、駅の改札前に慎吾さんと並んだ。「さあて、賢治くんのテストのいい点報告も聞けたし、俺は満足だ」

にししと慎吾さんは僕に笑いかける。時間を確認する。

「……そろそろか。体調には気をつけるんだよ」

うん。慎吾さんの顔を見れないまま僕は頷いた。慎吾さんは自分のいつも着ていたジャケットを脱ぎ、僕に羽織らせながら目を合わせて言った。

「頑張れよ。待ってるからな」

僕は頷いた。それじゃあねと慎吾さんは改札に向かった。僕の中で何かが込み上げる。走って改札の手前まで行く。

「絶対、絶対行くから、待っててくださいい！」

慎吾さんはいつもの弾けるような笑顔で手を振った。そして改札の向こう側の人混みへ消えて行った。僕は少し大きなジャケットに腕を通し、駅を出た。

「帰ったらギターでも弾こうかな」

家に向かう足取りはなんだか軽かった。

「志望校合格おめでとう！」

クラスメイトたちに祝福された。

「みんなありがとう」

浜野さんが特に喜んでくれて、一緒に勉強できてよかったと言ってくれた。

「いよいよだね。ずっと行くのが目標だったんでしょ？」

うん、と力強く頷いて見せる。ようやく会いに行けるんだ。追いかけて続けたあの人に。

電車を乗り継いで飛行機に乗って、ようやく着いた羽田空港。長い旅の時間が体を痺れさせた。それにしても、東京の空港は広くて人が多い。人酔いを起こしそうだ。僕はスマートフォンでメッセージを入力した。

「賢治くん」

声のしたほうを見ると、背の高い男の人が立っていた。一年ぶりに見たその人は髪が肩につくまで伸びていて、相変わらず弾けるような笑顔で両手を広げた。

「待ってたよ！」

僕は走り出し、その胸に飛び込んだ。

本を終生の友に

立石 富男

今年度も十三名の高校生作家が巣立って行く。寂しさと喜びを同時に感じている。わずか八回の講座ではあったが、回を重ねるたびに顔が違って見えるようになった。自分の胸の中の漠然としたものが少しずつ形になってきたのだろう。どんな形でもいい。輪郭がまだぐにやぐにやしていても、この七か月間、新しい自分と出会うために努力を続けたという充足感があれば講師としてとても嬉しい。そして、書き苦しんだ日々が今後の目標や夢の糧となればさらに嬉しい。

これまでも伝えてきたことだが、私たち講師が教えたのは基本の基本である。本物の作家になるためには今後さらなる努力が必要なの言うまでもない。作家を目指すかどうかは別にして、書くことは続けて行ってほしいと思う。文章力は必ず役に立つ。学生であっても社会人であっても、文章はつねに身近にあるし付いて回る。ペンは剣より強いとも言われる。そういう意味では苦境に陥った時、身を助ける大きな武器になるし防御にもなるだろう。

将来のために少し苦言を呈したい。本をもっと読んでほしい。書くことは読むこと、読むことは書くことである。古今東西の名著を読んで語彙を蓄え、言葉を磨いてほしい。本を終生の友人にすること。人は裏切っても本は裏切らないだろう。そういう本と出会えることを切に希っている。

推敲の時間を惜しまない

出水沢 藍子

8回の講座で、一作の小説を書き上げられた受講生のみならず、おめでとうございます。想像力を膨らませて、自分ならではの小説世界を描き切りました。

日曜の午後4時間を共有し、情報の溢れる社会で生きる高校生の新鮮な言語感覚に触れられたことは、昭和生まれの講師にとって得難い体験です。

年末から年始にかけて、講師はみなさんの小説の読み直し作業という大仕事に掛かります。

作品集に収められ、これから多くの人に読んでいただくのですから、あだやおろそかにはできません。赤ペンを持つ手にも自ずと力が入るといいます。

改めて読んでみると、文章表現や文章のリズムの乱れ、記号の多用や誤字脱字が散見されます。書いている間は作品に没頭して細部までは目が届かない、先に先に物語を進めたいという気持ちはよくわかります。

大切なのは書き上げてから、どれだけ推敲に時間をかけたかということ。客観的な目で読み直すことによって文章は生き返ります。文章の腕は、推敲の技術を持っていくか否かにかかっていると一言でも過言ではありません。

「これからが腕まくり」と気合を入れて、推敲作業を丁寧にこなし、それぞれの逸品を生み出してください。

講座の様子

開講式 7月6日



講座



特別講座 10月19日



閉講式 1月18日



	月・日	曜	時間	回	月・日	曜	時間
第1回	7月6日	日	12:30～16:30	第5回	10月19日	日	10:00～16:00
第2回	7月27日	日	12:30～16:30	第6回	11月16日	日	12:30～16:30
第3回	8月24日	日	12:30～16:30	第7回	12月7日	日	12:30～16:30
第4回	9月21日	日	12:30～16:30	第8回	1月18日	日	12:30～16:30

編集後記

県内の高等学校から集まった十三人の若者が、それぞれの作品世界を紡ぎ出し、令和七年度海音寺潮五郎記念文芸ゼミナール受講生作品集『潮音く若人の樹』が完成いたしました。

受講生たちは、各々に異なる視点と感性を持ちながら、言葉への熱い思いを同じように抱き、本ゼミナールに参加しました。「書く」ことは自己と向き合う孤独な作業ではありませんが、講座を通して互いの作品に刺激を受け、共に語句や表現のひとつひとつに意味を問うてきました。

仲間と共に、自分の中にある世界を自分の言葉で描き出そうと、推敲を重ねるたびに文章は磨かれ、個性がきらめくようになりました。第十二集に収められた作品は、どれも真摯な思いと言葉の光にあふれています。書くことの歓びと苦しみを味わいながら、十三人で真剣に言葉と向き合った時間は、かけがえない記憶として残ることでしょう。

最後に、立石先生と出水沢先生には、いつも一人一人に寄り添った、心温まる御指導をいただきました。本作品集を上梓できましたのは、ひとえに先生方の御指導と温かな支えのおかげです。心より感謝申し上げます。

令和七年度海音寺潮五郎記念
文芸ゼミナール受講生作品集
潮音 く若人の樹

令和八年三月

編集・発行

鹿児島県立図書館